

佐賀大学
農学部・農学研究科

—自己点検・評価報告書—
[平成29年度]

2019年1月

目 次

基準 1	学部・研究科の目的	・ ・ ・ ・ ・ 1
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 1
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 2
	(3) 基準 1 の自己評価の概要	・ ・ ・ 3
基準 2	教育研究組織	・ ・ ・ ・ ・ 4
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 4
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 9
	(3) 基準 2 の自己評価の概要	・ ・ ・ 9
基準 3	教員及び教育支援者	・ ・ ・ ・ ・ 10
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 10
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 17
	(3) 基準 3 の自己評価の概要	・ ・ ・ 17
基準 4	学生の受入	・ ・ ・ ・ ・ 19
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 19
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 31
	(3) 基準 4 の自己評価の概要	・ ・ ・ 31
基準 5	教育内容及び方法	・ ・ ・ ・ ・ 32
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 32
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 55
	(3) 基準 5 の自己評価の概要	・ ・ ・ 55
基準 6	学習成果	・ ・ ・ ・ ・ 56
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 56
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 65
	(3) 基準 6 の自己評価の概要	・ ・ ・ 65
基準 7	施設・設備及び学生支援	・ ・ ・ ・ ・ 67
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 67
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 77
	(3) 基準 7 の自己評価の概要	・ ・ ・ 77
基準 8	教育の内部質保証システム	・ ・ ・ ・ ・ 78
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 78
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 88
	(3) 基準 8 の自己評価の概要	・ ・ ・ 88
基準 9	財政基盤及び管理運営	・ ・ ・ ・ ・ 89
	(1) 観点ごとの分析	・ ・ ・ 89
	(2) 優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 95
	(3) 基準 9 の自己評価の概要	・ ・ ・ 95

基準 1 0 教育情報等の公表	・ ・ ・ ・ ・ 9 6
（1）観点ごとの分析	・ ・ ・ 9 6
（2）優れた点及び改善を要する点	・ ・ ・ 9 8
（3）基準 1 0 の自己評価の概要	・ ・ ・ 9 8

基準 1 学部・研究科の目的**(1) 観点ごとの分析**

- 1-1 大学の目的（使命，教育研究活動を展開する上での基本的な方針，達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており，その内容が学校教育法に規定されている，大学一般に求められる目的に適合するものであること。**

観点 1-1-①： 大学の目的（学部，学科又は課程等の目的を含む。）が，学則等に明確に定められ，その目的が，学校教育法第 83 条に規定された，大学一般に求められる目的に適合しているか。

【観点に係る状況】

農学部は，その目的を定め，農学部規則に明記している（資料 1-1-1-1）。

農学部の目的

農学部は，農学及び関連する学問領域において，多様な社会的要請にこたえうる幅広い素養と実行力を身に付けた人材を育成することを目的とする。

（出典：佐賀大学農学部規則（第 1 条の 2））

また，農学部を構成する 3 学科の目的を定め，農学部規則に明記している。

農学部 3 学科の目的

学 科	目 的
応用生物科学科	生物の特性を理解し，生物の改良や活用を通して，社会に貢献できる人材を育成すること。
生物環境科学科	【生物環境保全学コース】 地球上の環境や生態系を深く理解し，これらの保全，再生及び活用を通して，社会に貢献できる人材を育成すること。 【資源循環生産学コース】 生物科学及び生産情報科学の理論と技術を学び，環境に配慮した食糧生産と環境問題の解決に貢献できる人材を育成すること。 【地域社会開発学コース】 フィールドワークに基づく教育研究を通して，日本を含むアジア・太平洋諸地域における，持続可能な循環型地域社会の構築に貢献できる人材を育成すること。
生命機能科学科	科学的思考力を備え，生命科学技術の応用を通して，食と健康の分野において社会に貢献できる人材を育成すること。

（出典：佐賀大学農学部規則（第 1 条の 3））

資料 1-1-1-1 佐賀大学農学部規則 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

観点 1-1-1-②： 大学院を有する大学においては、大学院の目的（研究科又は専攻等の目的を含む。）が、学則等に明確に定められ、その目的が、学校教育法第 99 条に規定された大学院一般に求められる目的に適合しているか。

【観点に係る状況】

農学研究科は、その目的を定め、農学研究科規則に明記している（資料1-1-2-1）。

農学研究科の目的

研究科は、地域社会及び国際社会の発展に必要とされる農学上の諸課題を解決する能力、高い倫理意識及び国際的視野を有し、多方面において先端的・応用的・実用的な能力を発揮し、活躍できる創造性豊かな高度専門職業人を養成することを目的とする。

（出典：佐賀大学大学院農学研究科規則（第1条の2））

資料 1-1-2-1 佐賀大学大学院農学研究科規則 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部及び構成する 3 学科の目的は、佐賀大学農学部規則第 1 条の 2 及び第 1 条の 3 にそれぞれ記載しており、これらの内容は学校教育法第 83 条に規定された大学一般の目的から外れるものではない。

農学研究科の目的は、佐賀大学大学院農学研究科規則第 1 条の 2 に記載しており、この内容は学校教育法第 99 条に規定された大学院一般の目的から外れるものではない。

（2）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

農学部及び構成する 3 学科並びに農学研究科の目的は明確に定められており、それらの内容は学校教育法に規定されている大学及び大学院一般に定められる目的に適合している。

【改善を要する点】

学部改組においては、幅広い農学の素養を備えた人材を養成するために、一般入試では一括入学させ、共通教育を施した後、レイトスペシャライゼーションにより各専門を専攻する入試体制とカルキュラムを作成した。

1 学科体制で、幅広い農学の素養を備え、地域創生に役立つ人材の育成を目指す。そのために、社会から求められる基礎学力教育、データサイエンス教育などを共通教育プログラムとして充実させ、また、地域と連携したキャリア教育を推進する必要がある。

また、大学院改組においては、農学の専門性を担保しつつ、高度職業人に不可欠な知財・情報等を習得する新たな農学研究科を志向し、現行の農学研究科から健康関連物質を専門とする一部の教員が、農・理工・医の融合した「先進健康科学研究科（平成 31 年度（仮称）」に異動する計画とした。

農学の専門性を担保しつつ、複眼的視点・俯瞰的視野の養成を目指す。そのために、高度職業人に不可欠な知財・研究職業倫理・情報・データサイエンス等を習得させるとともに、農学研究科・理工学研究科、及び新設の先進健康科学研究科の 3 研究科共通科目を立ち上げ、分野横断的なカリキュラムを構築する必要がある。

（3）基準 1 の自己評価の概要

農学部及び構成する 3 学科並びに農学研究科の目的は明確に定められており、それらの内容は学校教育法に規定されている大学及び大学院一般に求められる目的に適合している。

基準2 教育研究組織

(1) 観点ごとの分析

2-1 教育研究に係る基本的な組織構成（学部及びその学科，研究科及びその専攻，その他の組織並びに教養教育の実施体制）が，大学の目的に照らして適切なものであること。

観点2-1-①： 学部及びその学科の構成（学部，学科以外の基本的組織を設置している場合には，その構成）が，学士課程における教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。

【観点到る状況】

農学部は，佐賀大学学則及び佐賀大学学士力にもとづいて，学位授与の方針，教育課程編成・実施の方針，入学者受け入れの方針を定め，それらにもとづき，総合科学である農学教育を実践するための学科を構成し，教育と研究を担当している。

農学部を構成する学科，講座，教育研究分野は，以下のとおりである。

教育研究組織（平成29年5月1日現在）

学科	講座	教育研究分野
応用生物科学科	生物資源開発学	熱帯作物改良学，動物資源開発学，植物代謝解析学，蔬菜花卉園芸学，果樹園芸学，植物遺伝育種学
	生物資源制御学	植物病制御学，植物ウイルス病制御学，線虫学，昆虫学，システム生態学，動物行動生態学
生物環境科学科	生物環境保全学	地圏環境学，水環境工学，浅海干潟環境学，環境地盤学，生物環境学，海浜環境情報学
	資源循環生産学	農業生産機械学，生産システム情報学，施設農業生産学，作物生態生理学，資源循環生物学，オーガニックファーミング学，フィールド資源開発学，アグロフィールド保全学，アグリ資源開発学，家畜医療応用学，植物遺伝資源学
	地域社会開発学	地域ビジネス開発学，地域資源学，人類生態学，島嶼社会経済学
生命機能科学科	生命化学	生化学，機能高分子化学，応用微生物学，分子生命科学
	食糧科学	生物資源利用学，食品化学，食糧安全学，食品栄養化学，天然資源化学

（出典：佐賀大学農学部「履修の手引」）

資料 2-1-1-1 佐賀大学学則 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 2-1-1-2 「佐賀大学学士力」について (<http://www.saga-u.ac.jp/koho/2010gakushiryoku.htm>)

資料 2-1-1-3 佐賀大学農学部 3つの方針 (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/housin_nou.pdf)

資料 2-1-1-4 農学部履修の手引（平成29年度）(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu>)

tebiki.html)

資料 2-1-1-5 佐賀大学農学部ホームページ (<http://www.saga-u.ac.jp/school/nogaku/index.html>)

【分析結果とその根拠理由】

現在の農学部の学科は、教育研究目的をさらに達成するための適切な構成になっている。

観点 2-1-②： 教養教育の体制が適切に整備されているか。

【観点に係る状況】

教養教育は、全学部の教員が担当する全学教育機構への全学出動方式で運営されている。農学部教員は、教養教育科目（大学入門科目Ⅰ）を担当している。一部の教員は、教養教育科目（情報基礎概論、情報基礎演習Ⅰ、基本教養科目、インタフェース科目）を担当している（資料 2-1-2-1）。

資料 2-1-2-1 全学教育機構履修の手引き（平成 29 年度）

(www.sc.admin.saga-u.ac.jp/tebiki-h29-kyoyo.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

農学部教員は、教養教育科目（大学入門科目Ⅰ、情報基礎概論、情報基礎演習Ⅰ、基本教養科目、インタフェース科目）を担当しており、全学出動方式による教養教育実施体制が適切に整備され、機能している。

観点 2-1-③： 研究科及びその専攻の構成（研究科、専攻以外の基本的組織を設置している場合には、その構成）が、大学院課程における教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。

【観点に係る状況】

農学研究科は、生物資源科学専攻の 1 専攻から組織され、本研究科の教育・研究目的・目標に基づいた 5 コース 7 講座・38 教育研究分野及び 1 副コース（農業技術経営管理学）から構成され、教員も各コースにバランスよく配置されていることから、大学院課程における教育研究の目的を達成する上で適切な教育研究組織になっている。

農業技術経営管理学 副コースにおいては経済学研究科教員に参加していただいて、教育の質の向上を図っている。

農学研究科の教育研究組織

専攻	学生定員	コース	講座	教育研究分野	教員数
生物資源科学	40	応用生物科学	生物資源開発学	熱帯作物改良学, 動物資源開発学, 植物代謝解析学, 蔬菜花卉園芸学, 果樹園芸学, 植物遺伝育種学	9
			生物資源制御学	植物病制御学, 植物ウイルス病制御学, 線虫学, 昆虫学, システム生態学, 動物行動生態学	6
		生物環境保全学	生物環境保全学	地圏環境学, 水環境工学, 浅海干潟環境学, 環境地盤学, 海浜環境情報学, 生物環境学	8
		資源循環生産学	資源循環生産学	農業生産機械学, 生産システム情報学, 施設農業生産学, 作物生態生理学, 家畜医療応用学, アグロフィールド保全学, 資源循環生物学, 植物資源遺伝学	8
		地域社会開発学	地域社会開発学	地域ビジネス開発学, 地域資源学, 人類生態学, 島嶼社会経済学	6
		生命機能科学	生命化学	生化学, 機能高分子化学, 応用微生物学, ☆分子細胞生物学	7
			食糧科学	生物資源利用学, 食品化学, 食糧安全学, 食品栄養化学	6
		農業技術経営管理学 (副コース)			

☆印は総合分析実験センターにおいて研究指導を行う。(出典：佐賀大学大学院農学研究科履修案内)

資料 2-1-3-1 佐賀大学大学院学則 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内 (平成 29 年度)

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 2-1-3-3 農学研究科農業技術経営管理者育成プログラムに関する要項

(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

資料 2-1-3-4 平成 29 年度農業版MO Tの主な取組

資料 2-1-3-5 研究科委員会・教員名表 (平成 29 年度)

【分析結果とその根拠理由】

農学研究科の構成は、1 専攻・5 コース (1 副コース)・7 講座・38 教育研究分野からなり、教員も各コースにバランスよく配置されていることから、大学院課程における教育研究の目的を達成する上で

適切なものとなっている。

観点2-1-④： 専攻科，別科を設置している場合には，その構成が教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。

【観点に係る状況】

該当なし

【分析結果とその根拠理由】

該当なし

観点2-1-⑤： 附属施設，センター等が，教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。

【観点に係る状況】

農学部は，附属施設，全学的なセンター等と連携を保ちながら，学部教育及び研究に活用している。附属施設として農学部附属アグリ創生教育研究センター（教員7名）及び全学的センターである総合分析実験センター（のうち教員1名）が，学部及び大学院の教育を分担している。

資料 2-1-1-4 農学部履修の手引（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科 履修案内（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 2-1-5-1 佐賀大学オンラインシラバス (<http://lc2.sc.admin.saga-u.ac.jp/syllabus2/syllabusSearchDirect.do?nologin=on>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部附属アグリ創生教育研究センターや総合分析実験センターを中心に，附属施設や全学的なセンターと農学部は教育面で密接に連携しており，農学部における教育と研究を達成する上で適切に機能している。

2-2 教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能していること。

観点 2-2-①： 教授会等が、教育活動に係る重要事項を審議するための必要な活動を行っているか。
また、教育課程や教育方法等を検討する教務委員会等の組織が、適切に構成されており、必要な活動を行っているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部の教授会規程（資料 2-2-1-1）に基づき、教員人事、教育課程の編成、学生の入学、卒業、学位授与など学士課程の教育活動に係る重要事項を教授会で審議している。教授会は、平成 18 年度以前は、教授、助教授、講師で構成し、平成 19 年度以降は、教授、准教授、講師、助教で構成している。農学部の教育活動との関係が深い総合分析実験センターの教員は、オブザーバーとして教授会に出席している。教授会は、毎月 1 回定例的に、また、必要に応じて臨時に開催している。

農学部内には教育担当副学部長を長とする教育委員会が組織されている（資料 2-2-1-2）。教育委員会へは各コースから 1 名の委員が選出され、教務事項の審議並びに教育課程や教育方法等の検討を行っている（資料 2-2-1-3）。

農学研究科

農学研究科では、研究科長（学部長兼任）及び研究科を担当できる資格を持つ教授、准教授、講師及び助教より構成される研究科委員会を設置している。この委員会では、農学研究科委員会規程（資料 2-2-1-4）に基づき、研究科における教員人事及び教育課程の編成、学生の入学、修了、学位授与など修士課程の教育活動に係る重要事項を毎月 1 回定例的に、必要に応じて臨時に開催し、審議している（資料 2-2-1-5）。

各コースから 1 名の委員が選出されている大学院教育委員会が設置され、教務事項の審議並びに教育課程や教育方法等の検討を行っている。また、学部教育や全学教育との連携を図るために、大学院教育委員会には教育担当副学部長が委員長として参加している。

資料 2-2-1-1 農学部教授会規程

資料 2-2-1-2 農学部教育委員会規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 2-2-1-3 農学部教育委員会 議事要旨

資料 2-2-1-4 農学研究科委員会規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 2-2-1-5 大学院教育委員会 議事要旨

【分析結果とその根拠理由】

農学部

教授会は、定例又は臨時に開催され、教育活動に係る重要事項を滞りなく審議・決定するための必要な活動を行っている。

教育委員会は、教務事項の審議並びに教育課程や教育方法等の検討などの必要な活動を行っている。

農学研究科

研究科委員会は、教育活動に係る重要事項を審議するため、毎月1回定期的に、また必要に応じて臨時に行っている。

大学院教育委員会は、教務事項の審議並びに教育課程や教育方法等の検討などの必要な活動を行っている。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

農学部内に教育担当副学部長を長とする教育委員会が組織されており、教育委員会へは各コースから1名の委員が選出され、教務事項の審議並びに教育課程や教育方法等の検討を定期的に行っている。

農学研究科の各コースから1名の委員が選出されている大学院教育委員会が設置され、教務事項の審議並びに教育課程や教育方法等の検討を行っている。平成26年度までは、大学院担当の教育委員会が農学部教育委員会の中の小委員会という位置付けになっていたが、大学院教育の重要度の増加に伴い、審議内容も増加しており、研究科として独立した教育委員会体制をとって行く必要があること、また、全学の教育委員会および教務専門委員会等に参加できる委員は限られているため、それまでオブザーバーの位置付けであった教育担当副学部長を平成27年度から大学院教育委員会の委員長とした。

【改善を要する点】

平成29年10月に、農水圏プロジェクトの推進とアグリ創生教育研究センター改革のため組織の見直しを行った。

また、アグリ創生教育研究センターの教育研究基盤を整備し、学部教員との連携により、センターを農業の実践教育の場としてもっと活用すべきである。

(3) 基準2の自己評価の概要

農学部及び農学研究科の教育研究に係る基本的な組織構成は、大学の目的に照らして適切なものになっている。

基準3 教員及び教育支援者**(1) 観点ごとの分析****3-1 教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されていること。**

観点3-1-①： 教員の適切な役割分担の下で、組織的な連携体制が確保され、教育研究に係る責任の所在が明確にされた教員組織編制がなされているか。

【観点到る状況】**農学部**

教員組織編制の基本的方針は、学部長の諮問を受けて農学部基本計画委員会が検討し、提案している（資料3-1-1-1）。教員の配置は、学部長の諮問を受けて農学部人事委員会で検討し、提案している（資料3-1-1-2）。教員は、学士課程の教育研究の目的・目標を達成するために、3学科7講座に、バランスよく配置されている（資料3-1-1-3）。教育研究分野の改廃等は、関係講座から発議され、人事委員会及び基本計画委員会における検討を経て、教授会で審議・決定される。

農学研究科

農学研究科では、教育と研究は一体であるという基本方針の下に、修士課程の教育研究の目的・目標を達成するため、1専攻・5コース（1副コース）・7講座・38教育研究分野で構成されている。コースあるいは講座単位で発議された教育研究上の重要な課題、教育研究分野の改廃は、まず各該当するコース会議等で審議され、基本計画委員会及び人事委員会の検討を経て、最終的に研究科委員会で審議・決定されており、問題がある場合は各コースに戻して再検討するなど、組織的に公平かつ責任ある連携体制を確保している（資料2-1-3-5、2-2-1-4）。

資料3-1-1-1 農学部基本計画委員会規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料3-1-1-2 農学部人事委員会規程

資料3-1-1-3 仮定定員現員表（平成29年度）

資料2-1-3-5 研究科委員会・教員名表（平成29年度）

資料2-2-1-4 農学研究科委員会規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

【分析結果とその根拠理由】**農学部**

農学部は、教育と研究は一体であるという基本的方針に基づき、3学科7講座で構成され、学科、講座、関連委員会及び教授会の間で組織的な連携体制が確保されると同時に、教育研究に係る責任の所在が明確にされた教員組織編成となっている。

農学研究科

農学研究科は、教育と研究は一体であるという基本的方針に基づき1専攻5コース（1副コース）7講座で構成され、コース、講座、関連委員会及び研究科委員会の間で組織的な連携体制が確保されると同時に、教育研究に係る責任の所在が明確にされた教員組織編成となっている。

観点3-1-②： 学士課程において、教育活動を展開するために必要な教員が確保されているか。また、教育上主要と認める授業科目には、専任の教授又は准教授を配置しているか。

【観点に係る状況】

農学部の教育課程を遂行するための専任教員は、平成29年5月現在で55人が確保されている。教育上必要な授業科目の担当教員として、専任教員（教授、准教授）を配置している。学部教育の一部は、講師と助教が担当している。

農学部の教員配置（平成29年5月1日現在）

学 科	教授	准教授	講師	助教	非常勤講師		合計
					学外	学内	
応用生物科学科	8	7	1	0	2	0	18
生物環境科学科	9	8	0	1	5	3	26
生命機能科学科	8	3	2	2	0	2	17
附属アグリ創生教育研究センター (注)	0	3	2	1	0	0	6

(注) 附属アグリ創生教育研究センターの教員は、教育組織である生物環境科学科・生命機能科学科に所属。

上表の専任教員に加えて、農学部における教育研究との関連が深い総合分析実験センターの教員が、それぞれの専門を活かした授業科目を担当している。

資料2-1-1-4 農学部履修の手引（平成29年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料3-1-1-3 仮定定員現員表（平成29年度）

資料3-1-2-1 平成29年度非常勤講師一覧

【分析結果とその根拠理由】

農学部の教育課程を遂行するための教員は、必要数確保されている。また、教育上主要な授業科目は、専任の教授又は准教授を配置し、その他の授業科目は、専任の教授・准教授・講師・助教が分担・協力して担っている。

観点3-1-③： 大学院課程において、教育活動を展開するために必要な教員が確保されているか。

【観点に係る状況】

農学研究科では佐賀地域に立脚しながら、地球的規模で農学を考えることのできる幅広い視野、高度な専門的知識、理解力・実践力等を備えた国際性豊かな人材の育成を目的としており、この目的のために、下に示すように52人の専任教員が各コース・講座に配置され、研究指導教員及び研究指導補助教員として研究指導に携わっている。また、これらの専任教員は、それぞれの研究分野に関する講義及び特別研究も担当している。教員の退職・不補充が原因で生じる未開講科目、専門性の高い教職免許状（専修）取得関連科目等には、平成29年度は3人の非常勤講師を充てることにより対応した。

農学研究科担当教員数（平成29年5月1日現在）

コース	講座数	教育研究分野数					合計	非講師 講師
			教 授	准教授	講 師	助 教		
応用生物科学	2	12	8	7	0	0	15	2
生物環境保全学	1	6	2	6	0	0	8	
資源循環生産学	1	8	5	3	0	0	8	
地域社会開発学	1	4	3	3	0	0	6	
生命機能科学	2	9	8	4	1	0	13	

（出典：平成29年度佐賀大学大学院農学研究科履修案内，平成29年度非常勤講師一覧）

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成29年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 3-1-2-1 平成29年度非常勤講師一覧

【分析結果とその根拠理由】

農学研究科の教育研究目的・目標に沿って、教育・研究が可能な50人の教員が研究指導教員及び研究指導補助教員として確保されている。

観点3-1-④： 大学の目的に応じて、教員組織の活動をより活性化するための適切な措置が講じられているか。

【観点に係る状況】

農学部及び農学研究科ともに、教員組織の活動をより活性化するための方策を学部運営会議が中心となって検討し、必要に応じ、学部内委員会や教授会及び研究科委員会と連携を図りながら適切な措置を講じることとしている。

資料 3-1-4-1 学部運営会議議事録

【分析結果とその根拠理由】

農学部及び農学研究科ともに、その目的に応じて、教員組織の活動をより活性化するための適切な措置が講じられている。

- 3-2 教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されていること。**
また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されていること。

観点3-2-①： 教員の採用基準や昇格基準等が明確に定められ、適切に運用がなされているか。特に、学士課程においては、教育上の指導能力の評価、また大学院課程においては、教育研究上の指導能力の評価が行われているか。

【観点に係る状況】

農学部

教育研究水準を高く維持するために、佐賀大学教員選考規則に基づく農学部教員選考規程を制定し、この規程に基づいて教員の採用及び昇格を行っている。採用及び昇格候補者の選考は、教授会で選出される教員5人で構成される教員選考委員会が担当し、厳格な書類審査（履歴書、研究業績目録、研究業績説明書等）と、学士課程における教育上の指導能力の評価を実施している。特に、教員選考委員会における審査の最終段階で、必要に応じて、候補者にプレゼンテーションを求め、授業担当能力を測っている。そして、教員選考委員会の報告に基づき教授会における審議により、採用及び昇格候補者を決定している。

農学研究科

農学研究科では学部と同様に、佐賀大学教員選考規則及び佐賀大学農学部教員選考規程に基づいた教員の採用・昇任を行っている。

修士課程の教育研究担当者は、より高度な研究水準を維持するため、博士の学位を有することは勿論、主指導・副指導教員の資格として求められるレフェリー付きの論文数等をクリアーすることを条件とするなど、大学院課程における教育研究上の指導能力の厳格な評価を行い、研究科委員会の議に基づき、採用者あるいは大学院科目の担当者を決定している。

なお、本学の博士課程の担当者は鹿児島大学大学院連合農学研究科の資格審査委員会において、別途主指導あるいは副指導教員の資格審査を受けることになっているが、この資格基準も本学の修士課程の主指導あるいは副指導教員資格と全く同じく厳格な水準にある。

農学研究科教員資格判定基準

主指導教員	修士課程の研究指導及び講義を担当し、学位論文審査の主査となることができる。 論文1（レフェリー付き論文）が20編以上「ただし、第1著者（Corresponding Authorを含む。）である論文が10編以上あること」で、最近5年間の業績が5編以上あること。
副指導教員	修士課程の研究指導及び講義を担当する。 論文1（レフェリー付き論文）が12編以上「ただし、第1著者（Corresponding Authorを含む。）である論文が6編以上あること」で、最近5年間の業績が5編以上あること。

（出典：佐賀大学大学院農学研究科教員資格審査判定基準の申合せ）

資料 3-2-1-1	佐賀大学教員選考規則 (https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/)
資料 3-2-1-2	農学部教員選考規程
資料 3-2-1-3	農学部教員候補者の推薦依頼に関する申合せ
資料 3-2-1-4	大学院農学研究科教員選考基準
資料 3-2-1-5	鹿児島大学大学院連合農学研究科ホームページ（教員資格審査） (http://homeuags.agri.kagoshima-u.ac.jp/contents/examination/)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

教員選考基準は明確に定められており、教員選考は、教育上の指導能力と相応の教育上の評価に基づいて実施している。このことにより、教員の採用及び昇格は、適切に運用がなされている。

農学研究科

佐賀大学教員選考規則に基づいた佐賀大学農学部教員選考規程に則って、研究科委員会の議に基づき、教員候補者を決定している。さらに、修士課程の担当者はより高度な研究水準を維持するため、博士の学位を有することは勿論、指定したレフェリー付きの論文数をクリアすることを条件とするなど、教育研究上の指導能力についてより厳格な評価を行っている。

観点3-2-②： 教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に行われているか。また、その結果把握された事項に対して適切な取組がなされているか。

【観点到係る状況】

農学部

農学部は、平成5年4月に農学部自己点検・評価委員会を設置し、平成6年からほぼ4年ごとに自己点検評価を実施している。平成14年4月からは、農学部評価委員会が、平成22年7月からは農学部中期目標・中期計画実施本部が、教員の教育・研究業績、社会貢献、国際貢献、学内運営に関する活

動、研究費の獲得状況等について評価活動を行ってきた。平成16年度に、農学部個人評価に関する実施要項を策定し、以後、教員についての個人評価を毎年、実施している。評価の結果は、教員へ通知され、教育活動の改善に利用されている。

また、教育委員会及びFD委員会は、学生による授業評価と授業改善を、大学教育委員会と連携して実施し、学生による授業評価の結果は、教育改善に利用されている。

佐賀大学には教育功績者を表彰する制度があり、このような個人評価等に基づいて、学内外で優れた教育活動を行った教員数人を毎年、佐賀大学学長が表彰している。

農学研究科

平成5年4月に農学部自己点検・評価委員会を発足させ、平成6年からほぼ4年ごとに自己点検・評価を行ってきた。同委員会は平成14年4月から農学部評価委員会が、平成22年7月からは農学部中期目標・中期計画実施本部が、研究科担当教員の教育・研究業績、社会貢献、国際貢献、学内運営等について評価活動を行ってきた。また、平成16年度から新たに農学部個人評価に関する実施基準を策定し、当年度から研究教育活動等に関する個人評価報告書に基づき、個人による自己評価結果及び次年度の目標などの提出を毎年、義務付けている。評価の結果は、教員へ通知され、教育活動の改善に利用されている。

また、大学院教育委員会及び大学院FD委員会は、学生による授業評価と授業改善を、大学教育委員会と連携して実施し、学生による授業評価の結果は、教育改善に利用されている。

資料 3-2-2-1 農学部中期目標・中期計画実施本部規程

(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

資料 3-2-2-2 佐賀大学農学部教員の個人評価に関する実施基準

(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

資料 3-2-2-3 農学部教員個人評価実施基準 (<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

資料 3-2-2-4 教員個人評価報告書（平成29年度）

資料 3-2-2-5 平成29年度FD活動報告書（農学部・農学研究科）

資料 3-2-2-6 平成29年度授業評価報告書（農学部・農学研究科）

資料 3-2-2-7 佐賀大学教育功績等表彰規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

農学部中期目標・中期計画実施本部が設置され、教員の教育活動に関する適切かつ定期的な評価が実施されており、その結果把握された事項に対する適切な取組として学部長から各教員へ評価結果を伝えている。また、教育委員会及びFD委員会は、学生による授業評価と授業改善を、大学教育委員会と連携して実施している。

農学研究科

農学部中期目標・中期計画実施本部が設置され、評価方法等を検討すると同時に、この評価方法に基づき研究科担当教員の教育活動について定期的に評価を行っている。また、大学院教育委員会及び大学院 FD 委員会は、学生による授業評価と授業改善を、大学教育委員会と連携して実施している。

3-3 教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われていること。

観点3-3-①： 教育活動を展開するために必要な事務職員、技術職員等の教育支援者が適切に配置されているか。また、TA等の教育補助者の活用が図られているか。

【観点に係る状況】

農学部

教育課程の展開を事務の面から支援する学務部教務課農学部教務担当に、職員3人を配置している（資料3-3-1-1）。技術職員は、農学部4人、附属アグリ創生教育研究センターに6人配置している。技術職員は、学生実験・実習、資源循環フィールド科学実習・演習等の授業を支援し、教育支援者として重要な役割を果たしている（資料3-3-1-2）。大学院修士課程及び博士課程の大学院生がTAに採用され、実験、実習、演習等の教育補助業務を行っている。

農学研究科

学務部教務課農学部教務担当及び附属アグリ創生教育研究センターの事務職員（非常勤職員も含む。）が大学院修士課程をそれぞれ支援している。また、学部に4人、附属アグリ創生教育研究センターに6人配置された技術職員は、大学院課程の実験・実習及び演習等の授業等に教育支援者として従事している。さらに、多数の大学院修士課程の学生がTAとして学部に配置され、実験、実習、演習等の教育補助業務を行うと同時に、教員と学部学生のパイプ役としても重要な役割を果たしている。平成29年度は延べ68科目、3,288時間にTAが採用された。

農学部事務職員現員表（平成29年5月1日現在）

区分	事務職員 行(一)	技術職員 行(一)	計	非常勤職員
事務長	1		1	
総務係	3		3	2
技術職員		4	4	
附属アグリ創生教育研究センター	1	6	7	2
計	5	10	15	4

平成 29 年度 T A の活用状況

年度	項 目	実験補助項目					合 計
		実 験	実 習	演 習	講 義	卒業研究	
29	T A 延べ人数	64	36	55	28	33	216
	科目数	26	12	20	20	15	93

資料 3-3-1-1 学務部職員名簿 (<http://www.saga-u.ac.jp/jinji/gakunai/meibo/index.htm>)

資料 3-3-1-2 事務職員現員表 (平成 29 年度) (<http://www.saga-u.ac.jp/jinji/gakunai/meibo/index.htm>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

学務部教務課職員と農学部技術職員は、教育支援者として適切に配置され、機能している。実験、実習、演習等の教育補助業務のために T A が活用され、教員と学生をつなぐパイプ役として、重要な役割を果たしている。

農学研究科

学務部教務課職員と農学部の技術職員が研究科教育課程における実験、実習、演習等の教育支援を行っている。また、多数の大学院修士の学生を T A として学部配置し、教育補助を行っていることから、研究科の教育課程を展開するために必要な教育補助者として適切に配置され、十分な活用が図られている。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

教育活動を展開するために必要な教員や事務職員、技術職員、T A が適切に配置されている。

【改善を要する点】

3 研究科を 1 研究科に統合する改組 (案) から、理工学研究科、農学研究科及び医・工・農が融合した新たな研究科を設置する改組 (案) を作成し、健康関連物質を専門とする一部の教員が、農・理工・医の融合した「先進健康科学研究科 (平成 31 年度 (仮称))」に異動する。

理工、医、農が連携する新しい融合型研究科である先進健康科学研究科の設置に向けて、新組織の準備委員会の設置や事務局の体制整備を行う必要がある。

(3) 基準 3 の自己評価の概要

農学部及び農学研究科の教員、事務職員、技術職員等は、教育研究を展開するために必要な人員が確

保され、また適切に配置されている。

基準4 学生の受入

(1) 観点ごとの分析

4-1 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されていること。

観点4-1-①： 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められているか。

【観点到係る状況】

農学部

農学部の教育目的を達成するため、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、ホームページ等を通じて、広く公表されている。

農学部のアドミッション・ポリシー

<教育目的>

今、私たちが生きる21世紀は、大量生産・大量消費・大量廃棄型社会から循環型社会への大転換が求められています。このような時代背景のなか、日本有数の食料生産基地である佐賀平野に立地する佐賀大学農学部は、農学という学問が、理系から文系にわたり、基礎から応用に及ぶ総合科学であることを踏まえ、「食料」、「生命」、「環境」、「情報」、「エネルギー」、「地域社会」をキーワードとした多様で重要な課題を解決していこうとしています。そのために、創造性豊かな専門職業人を育て、国内はもとより、アジアをはじめとする世界に貢献します。これらのことから、農学部は、個性とバイタリティーにあふれ、基礎学力を有する人を歓迎します。

応用生物科学科

<応用生物科学科の目的と求める学生像>

応用生物科学科では、生物の特性を理解し、生物の改良や活用を通して、社会に貢献できる人材を育成します。そのために、以下に示すような学生を求めています。① 多様な動植物の生理生態的特性の解明、バイオテクノロジーを用いた有用生物資源の開発・利用、有用動植物を加害する病害虫の制御等についての理解と関心がある人 ② 問題解決に向けて、粘り強く自己研鑽に努める熱意と実行力がある人 ③ 本学科で学んだことを活かして社会で活躍したいという目的意識と向上心がある人

<応用生物科学科で学ぶために必要な能力や適性等および入学志願者に求める高等学校等での学習の取り組み>

生物に対する興味があり、生物の機能また生物が生育する環境について学習するための基礎学力として、高等学校で履修する理科や数学の基本事項を理解していることが必要です。また、講義を理解し、レポート等を作成・発表するためには、様々な文献を読み、文書を作成するという国語力が必要になるだけでなく、社会の仕組みや地理・歴史といった高等学校の教科書レベルの一般常識も求められます。さらに、専門的な知識や技術を得るためには、海外の文献にも目を通す必要があるため、高

等学校の教科書レベルの英語の読解力が不可欠です。農学は、実験や調査活動を自主的にかつ継続的に行なうことが重要です。また、その課題はグローバルな問題が多くあります。従って、自然科学全般に対する知識欲と、勉強を続けるための目的意識を持つこと、さらに、教員、先輩、友人、留学生等とコミュニケーションがとれる積極性が必要です。

生物環境科学科

<生物環境科学科の目的と求める学生像>

生物環境科学科では、3つのコースにおいて次のような人材を育成します。生物環境保全学コースでは、地球上の環境や生態系を深く理解し、これらの保全、再生及び活用を通して、社会に貢献できる人材を育成します。資源循環生産学コースでは、生物科学及び生産情報科学の理論と技術を学び、環境に配慮した食糧生産と環境問題の解決に貢献できる人材を育成します。地域社会開発学コースでは、フィールドワークに基づく教育研究を通して、日本を含むアジア・太平洋諸地域における、持続可能な循環型地域社会の構築に貢献できる人材を育成します。そのために、以下に示すような学生を求めています。① 自然環境、社会環境及び生物生産環境の保全と修復に興味を持つ人 ② 永続的な農業を可能にする新たな生物生産システム及び経済社会システムの創造に意欲がある人 ③ 本学科で学んだことを活かして社会で活躍したいという目的意識と向上心がある人

<生物環境科学科で学ぶために必要な能力や適性等および入学志願者に求める高等学校等での学習の取り組み>

人間を含む生物やそれを取り巻く環境及び人間社会に対する興味があり、これらを総合的に学習するための基礎学力として、高等学校で履修する理科や数学の基本事項を理解していることが必要です。また、講義を理解し、レポート等を作成・発表するためには、様々な文献を読み、文書を作成するという国語力が必要になるだけでなく、社会の仕組みや地理・歴史、文化といった高等学校の教科書レベルの一般常識も求められます。さらに、専門的な知識や技術を得るためには、海外の文献にも目を通す必要があるため、高等学校の教科書レベルの英語の読解力が不可欠です。農学の課題にはグローバルな問題が多くあり、それを解決する糸口を得るため、実験や調査活動を自主的にかつ継続的に行なうことが重要です。従って、自然科学全般に対する知識欲と、勉強を続けるための目的意識を持つこと、さらに、教員、先輩、友人また留学生等とコミュニケーションがとれる積極性が望まれます。

生命機能科学科

<生命機能科学科の目的と求める学生像>

生命機能科学科では、科学的思考力を備え、生命科学技術の応用を通して、食と健康の分野において社会に貢献できる人材を育成します。そのために、以下に示すような学生を求めています。① 生体における遺伝子の発現や物質代謝とそれらの調節機構を分子レベルで理解するライフサイエンス、食品の生体調節機能、栄養機能や安全性等に興味を持っている人 ② 将来、本学科で学んだ知識や技術を社会で活かそうと考えている人

<生命機能科学科で学ぶために必要な能力や適性等および入学志願者に求める高等学校等での学習の取り組み>

生命現象に対する科学的興味があり、微生物から高等生物までの生命体が持つ機能について学習するための基礎学力として、高等学校で履修する理科や数学の基本事項を理解していることが必要です。また、講義を理解し、レポート等を作成・発表するためには、様々な文献を読み、文書を作成するという国語力が必要になるだけでなく、社会の仕組みや地理・歴史、文化といった高等学校の教科書レベルの一般常識も求められます。さらに、専門的な知識や技術を得るためには、海外の文献にも目を通す必要があるため、高等学校の教科書レベルの英語の読解力が不可欠です。農学は、実験や調査活動を自主的にかつ継続的に行なうことが重要です。また、その課題はグローバルな問題が多くあります。従って、自然科学全般に対する知識欲と、勉強を続けるための目的意識を持つこと、さらに、教員、先輩、友人また留学生等とコミュニケーションがとれる積極性が必要です。

入学者選抜の基本方針（入学、選抜、選抜基準等）

農学部が求める学生像にふさわしい学生を選抜するために、一般選抜、推薦入試、3年次編入学試験等の多様な入学試験を実施します。

1 一般選抜

高等学校等での学習の達成度を評価するために、大学入試センター試験及び個別試験を課します。大学入試センター試験では、5教科7科目を課し、数学及び理科の学力を重視します。個別学力検査では、前期日程で数学及び英語、後期日程で数学の学力試験を課し、入学後に必要な基礎学力を測ります。

2 推薦入試

出願要件を満たし、各高等学校長から推薦されることを前提とします。その上で、大学で学習するために必要な基礎学力として、汎用的な学力を有しているかを判断するために、書類審査（調査書、推薦書、作文等）、小論文及び口頭試問によって評価します。また、専門科目を学ぶために必要な基礎学力を有しているかを判断するために、口頭試問と小論文によって評価します。さらに、各学科に対する明確な志望動機や入学後の意欲等を有しているかを判断するために、書類審査と面接試験によって評価します。

3 3年次編入学試験

高等専門学校、短期大学、大学の卒業者と卒業見込みの者、大学に2年以上在学し所定の単位を修得した者等を対象とします。試験科目は、英語、口頭試問及び面接です。

4 帰国子女特別選抜

小論文、口頭試問及び面接を課します。

5 私費外国人留学生選抜

独立行政法人日本学生支援機構が実施する「日本留学試験」、TOEFL及び面接を課します。

（出典：佐賀大学アドミッションセンターホームページ）

また学部及び各学科の入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）は、一般選抜、私費外国人留学生選抜、帰国子女特別選抜等の学生募集要項にも明記されている（資料4-1-1-1）。学生募集要項等の印刷物は、高校、短大、高等専門学校、本学志願者、文部科学省、本学教職員、事務局各課等に配布され、周知されている（資料4-1-1-2）。

これら入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）及び教育研究の特色等は、毎年実施される大学説明会（オープンキャンパス）（資料 4-1-1-3）、ジョイントセミナー（高校訪問）（資料 4-1-1-4）、高校関係者との懇談会（資料 4-1-1-5）、進学説明会等においても説明され、学内外の関係者への周知が図られている。

農学研究科

農学研究科の教育目的は、佐賀地域に立脚し、地域社会及び国際社会の発展に必要とされる農学上の諸課題を解決する能力、高い倫理意識及び国際的視野を有し、多方面において先端的・応用的・実用的な能力を発揮し、活躍できる創造性豊かな高度専門職業人を養成することであり、本学及び農学研究科の理念と教育研究の基本方針に従ったものになっている。この教育目的に沿って、農学研究科のアドミッション・ポリシーが定められ、それが学生の受け入れ方針として募集要項に明記されている。また各コースのアドミッション・ポリシーも明確に定められている（資料 4-1-1-6）。

農学研究科のアドミッション・ポリシー

<農学研究科が求める学生像>

農学を基盤とした人類の生存に必要な食料、環境、資源・エネルギー、経済・社会・文化、生命などに関わる5つの教育研究コースを擁しています。本研究科は、科学技術の高度化・国際化を踏まえつつ、各コースにおける学習と研究を通じて当該専門分野における専門職業人又は研究者としての知識・技能を高め、リーダーとして社会に貢献する人材を育成します。そのために、以下に示すような学生を求めています。

- ① 専門分野における基礎知識を持ち、かつ明確な問題意識を持つ人
- ② 研究課題に取り組む旺盛な意欲と研究を貫徹する実行力のある人
- ③ 語学力ならびに高いコミュニケーション能力を有する人
- ④ 本研究科での研究を通じて社会に貢献しようという意識の高い人
- ⑤ 農学系大学院博士後期課程に進学して、農学関連の研究者や専門技術者を目指す人

<コースの求める学生像>

1 応用生物科学コース

有用な動植物の育種開発ならびに生物制御機構の解明と応用を中心としたバイオサイエンスに関する知識の修得と研究を志す人

2 生物環境保全学コース

環境負荷の少ない生物生産環境の創出と保全ならびに地球レベルから地域までの幅広い保全と創造に関する知識の修得と研究を志す人

3 資源循環生産学コース

資源循環型の生物生産システムの構築ならびに環境に配慮した農産・加工とバイオエネルギー開発に関する知識の修得と研究を志す人

4 地域社会開発学コース

農林水産に関する政策・流通経済・経営管理システム、農村の社会構造と集落維持システムならび

に産業・地域開発に伴う環境問題と健康問題に関する知識の修得と研究を志す人

5 生命機能科学コース

生命現象と遺伝機能の化学的解明ならびに生物の機能性を利活用した食品の製造・貯蔵などに関する知識の修得と研究を志す人

(出典：佐賀大学アドミッションセンターホームページ)

このアドミッション・ポリシーは、大学院募集要項の配布により周知されるだけでなく、佐賀大学農学部ホームページにも掲載されており、学内外に広く公表・周知されている。

資料 4-1-1-1 佐賀大学入学者選抜要項（平成 30 年度）

(<http://www.sao.saga-u.ac.jp/gakubugakububosyuuyoukou.html>)

資料 4-1-1-2 学生募集要項配布先一覧（平成 29 年度）

資料 4-1-1-3 オープンキャンパス参加者数（平成 29 年度）

資料 4-1-1-4 ジョイントセミナー実施高校・出席者一覧（平成 29 年度）

資料 4-1-1-5 農業高校関係者との懇談会の実施状況（平成 29 年度）

資料 4-1-1-6 佐賀大学大学院学生募集要項（平成 30 年度）

(http://www.sao.saga-u.ac.jp/daigakuin/daigakuin_yoko.html)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、ホームページ、農学部紹介パンフレット等を通じて、学内外に公表・周知されている。

農学研究科

アドミッション・ポリシーが明確に定められ、その内容は佐賀大学大学院学生募集要項及び佐賀大学農学部ホームページに掲載され、学内外に広く公表・周知されている。

観点 4-1-②： 入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

【観点に係る状況】

農学部

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に一致した学生を獲得するために、多様な選抜試験が実施され、学力、思考力、勉学意欲、独創性などへの厳正な評価によって入学者が決定されている。

入学定員の約 80%は一般選抜によるものである。一般選抜では、前期日程が重視され、農学部を目指す入学志願者の積極的な受け入れが図られている（資料 4-1-2-1）。また前期日程及び後期日程ともに、大学入試センター試験が課されており、個別試験として、前期日程試験では英語と数学、後期日程試験では数学のみが課されている。大学入試センター試験と個別試験の結果が総合して評価され、合格者が決定されている。

入学定員の約20%は推薦入試によるものである。推薦入試では、大学入試センター試験が免除され、推薦書、調査書、小論文及び面接等の多様な選抜方法で実施されているが、平成30年度農学部推薦入試からは、学力試験の一環としてCBTを活用した基礎学力試験（応用生物科学科：生物、化学；生物環境科学科：数学、英語；生命機能科学科：化学）を導入し、質の良い学生の確保に努めている（資料4-1-1-1）。

農学部学生の選抜・受け入れ状況

学 科	年度	入学定員	入学者			
			合計	推薦	前期	後期
応用生物科学科	24	45	48	10	30	8
	25	45	49	10	30	9
	26	45	49	10	31	8
	27	45	46	10	26	10
	28	45	45	6	30	9
	29	45	46	10	29	7
	30	45	49	9	31	9
生物環境科学科	24	60	65	15	35	15
	25	60	61	15	38	8
	26	60	61	13	37	16
	27	60	62	15	36	11
	28	60	61	15	30	16
	29	60	64	15	37	12
	30	60	62	15	36	11
生命機能科学科	24	40	43	6	29	8
	25	40	42	5	32	5
	26	40	42	5	33	4
	27	40	43	5	34	4
	28	40	40	4	28	8
	29	40	43	5	33	5
	30	40	44	5	32	7

（出典：アドミッションセンターホームページ「入学試験に関する統計」）

外国人留学生に対しては、英文の入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が募集要項に記載され、その募集要項に従って特別選抜が実施されている。この選抜では、大学入試センター試験は免除され、成績証明書、日本留学試験、TOEFL、面接の総合点に基づいた評価により合格者が決定されている。

3年次編入学試験（入学定員10人）は、短期大学、高等専門学校等の卒業見込み者等を対象に実施されている。合格者は、推薦書、調査書（成績証明書）、学力試験（英語、数学又は生物）及び面接の

総合点を基にした評価により決定されている（資料 4-1-2-2）。

なお、平成 29 年度編入学試験より農業高校（専攻科）卒業者を受験資格に含めたことにより、2 人の応募・受験があった。

帰国子女特別選抜も実施されている。本選抜では、大学入試センター試験は免除され、推薦書、調査書、小論文及び面接の総合点を基にした評価により合格が決定されている（資料 4-1-1-1、4-1-2-3）。

社会人受入れは、農学部では実施されていない。

農学研究科

農学研究科では、アドミッション・ポリシーに沿った入学者選抜の基本方針に従って、次に示す選抜方法が採用されている。一般選抜においては、筆記試験（英語及び専門科目）、面接及び提出書類（成績証明書、志望理由書等）により、学力、思考能力、独創性、人間性及び勉学意欲などが総合的に評価され、それを基に選抜が行われている（資料 4-1-1-6）。ただし平成 29 年度入試より、英語の学力評価には英語筆記試験の成績の代わりに TOEIC の成績を用いることが決定されており、実施の詳細、配点、予告の時期や方法などについての検討が進められている（資料 4-1-2-5）。社会人特別選抜及び外国人留学生特別選抜においては、口頭試問、面接及び提出書類（成績証明書、志望理由書、研究業績書、研究計画書等）により、学力、思考能力、独創性、人間性及び勉学意欲などについての総合評価が行われ、それを基に選抜が行われている（資料 4-1-1-6）。このときの口頭試問及び面接では、修学に必要な学力、能力及び専門分野の内容などが評価され、求める学生像にふさわしい人物が選抜されている。

農学研究科の入学者選抜の基本方針（入学、選抜、選抜基準等）

【一般入試】

農学研究科が求める学生像に相応しい学生を選抜するために、外国語（英語）能力と専門分野の知識を問う筆記試験ならびに口頭試問を含む面接試験を実施します。

外国語（英語）試験は、農学研究科の共通問題が課されます。試験問題には、農学・生物科学・環境科学分野における基礎的な題材を取り上げ、筆答による英語の読解力と作文力をみます。

専門試験は、各コースの専門試験として受験者個別に課され、当該コースでの学習・研究に必要な専門的知識の修得程度をみます。応用生物科学コース、生物環境保全学コース、資源循環生産学コース及び地域社会開発学コースは、受験者の志望する教育研究分野の専門試験を出題します。生命機能科学コースは、受験者の志望する教育研究分野の専門試験に加えて、当該コースの共通問題も出題します。

【社会人特別入試】

農学研究科は、大学卒業後に社会における専門分野の職業経験を持つ者を受け入れて、再教育ならびに高度な研究の推進を通じて社会への貢献を目指しています。したがって、社会人特別入試の受験者は、口頭試問及び面接によって専門分野における基礎知識・研究課題ならびに入学後の修学条件等が問われます。

【外国人留学生特別入試】

農学研究科は、設置趣旨に沿い、世界に開かれています。したがって、外国人留学生特別入試の受験者は、口頭試問及び面接によって専門分野における基礎知識、コミュニケーション能力ならびに研究課題等が問われます。

資料 4-1-2-1 入学試験に関する統計（平成 24 年度～30 年度）

(<http://www.sao.saga-u.ac.jp/nyushidata/nyuushitoukei.html>)

資料 4-1-1-1 佐賀大学入学者選抜要項（平成 30 年度）

(<http://www.sao.saga-u.ac.jp/gakubugakububosyuuyoukou.html>)

資料 4-1-2-2 佐賀大学編入学生募集要項（平成 30 年度）

(http://www.sao.saga-u.ac.jp/sannenjihennyu/hennyu_yoko.html)

資料 4-1-2-3 佐賀大学推薦入試学生募集要項（平成 30 年度）

(<http://www.sao.saga-u.ac.jp/gakubugakububosyuuyoukou.html>)

資料 4-1-2-4 佐賀大学帰国子女特別選抜学生募集要項（平成 30 年度）

(<http://www.sao.saga-u.ac.jp/gakubugakububosyuuyoukou.html>)

資料 4-1-1-6 佐賀大学大学院学生募集要項（平成 30 年度）

(http://www.sao.saga-u.ac.jp/daigakuin/daigakuin_yoko.html)

資料 4-1-2-5 入試委員会議事要旨（平成 29 年度）

【分析結果とその根拠理由】

農学部

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に基づいて、多様かつ適切な入試が実施されている。これらの入学者選抜方法は、本学部の目的に合致する学生を受け入れる上で、実質的に機能している。

また、留学生、編入学生、帰国子女に係る入学者選抜の方法は、農学部の教育の目的、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に沿っており、適切かつ実質的に機能している。

農学研究科

アドミッション・ポリシーに沿って行われている学生の一般入試の方法は、適切かつ実質的に機能している。また、多様で広範な人物を受け入れるために実施されている社会人特別入試と外国人留学生特別入試も、研究科のアドミッション・ポリシーに沿った適切な選抜方法が講じられている。

観点 4-1-③： 入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部の入学者選抜は、佐賀大学の入学者選抜に係る規程に基づいて実施されている（資料 4-1-1-1）。学長を委員長とする入学試験委員会（以下「入試委員会」という。）が、入学者選抜の実施及び本学における大学入試センター試験の実施に関する基本的事項と重要事項について審議している。個別試験の問題作成については、入試委員会の下に置かれた試験問題作成専門委員会が作業委員会となり、

実際の問題作成は、十分な教育研究経験を有する教員によって行われている。公正を期するため、入学試験問題作成に関わる情報は非公開となっている。

入学試験の際には、入学試験実施本部及び各試験場本部が置かれ、学長が本部長を、各学部長が各試験場本部責任者（試験場責任者）を務めている。厳正に委嘱される試験実施本部員には、試験問題作成委員会委員長及び問題作成責任者も加わり、入学試験が遺漏なく実施される体制が整っている（資料 4-1-3-1）。面接、口頭試問は、複数の教員によって実施され、公正な合否判定が行えるように配慮されている。

合格候補者は、各学科、教授会における審議を経て決定されている。

農学研究科

農学研究科の入学者選抜は、佐賀大学大学院農学研究科の入学者選抜に係る規程に基づいて実施されている（資料 4-1-3-2）。農学研究科の入学者選抜の総括責任者は農学研究科長であり、入学者選抜の実施に関する基本的事項及び実施に関する重要事項は、農学部入試委員会の下に置かれる大学院入学試験小委員会によって審議・決定されている。試験問題の作成については、入試委員会の下に置かれた試験問題作成専門委員会が作業委員会となり、実際の問題作成は十分な教育研究経験を有する教員によって行われている。公正を期するため、入学試験問題作成に関わる情報は非公開となっている。

入学試験の際には、試験場本部が置かれ、農学研究科長が本部長かつ試験場責任者を務めている。厳正に委嘱される試験実施本部員には、試験問題作成委員会委員長及び問題作成責任者も加わり、入学試験が遺漏なく実施される体制が整っている（資料 4-1-3-3）。面接、口頭試問は、複数の教員によって実施され、公正な合否判定が行えるように配慮されている。

合格候補者は、各コースと研究科委員会の議を経て決定されている。

資料 4-1-1-1 佐賀大学入学者選抜要項（平成 30 年度）

(<http://www.sao.saga-u.ac.jp/gakubugakububosyuuyoukou.html>)

資料 4-1-3-1 入学試験関係委員割振表（平成 29 年度）

資料 4-1-3-2 佐賀大学大学院農学研究科入学試験実施要領（平成 29 年度）

(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

入学者選抜に関わる実施計画等の作成、試験問題の作成、試験の実施、試験の採点及び合格者の決定までの実施体制は、入試委員会を中心に構成されている。関係者間の連携が図られ、意思決定のプロセスと責任は明確かつ公正である。これらのことにより、入学者選抜が、適切な実施体制の下で公正に実施されていることは明白である。

農学研究科

入学者選抜に関わる実施体制は、農学部入試委員会の中にある大学院入学試験小委員会を中心に構築されており、組織間の連携も図られ、入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されている。

観点 4-1-④： 入学者受入方針に沿った学生の受入が実施に行われているかどうかを検証するための取組が行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立てているか。

【観点に係る状況】

農学部

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に沿って入試が実施され、期待される質の高い入学者を獲得しているか否かについての検証は、主に農学部入試委員会が担当している。農学部入試委員会は、各学科の協力を基にして、入学者選抜方法に関する調査・研究を行うとともに、個別学力検査等の内容、在り方、改善方策を検討している（資料 4-1-4-1）。また、農学部広報委員会とともに大学進学情報の提供、入学者選抜に関する大学案内の編集及び広報活動に関する事項についても検討している（資料 4-1-4-1）。

農学研究科

アドミッション・ポリシーに沿った学生が入学しているかどうかの検証については、大学院一般選抜及び社会人・外国人留学生特別選抜小委員会、入学試験問題作成委員会並びに各コース会議が、継続的に取り組んでおり、学生の成績や授業評価を参考にして、出願資格及び試験の内容（資料 4-1-1-6）や合否判定基準（資料 4-1-4-2）に対する改善策を継続的に講じてきている。

資料 4-1-2-5 入試委員会議事要旨（平成 29 年度）

資料 4-1-1-6 佐賀大学大学院学生募集要項（平成 30 年度）

(http://www.sao.saga-u.ac.jp/daigakuin/daigakuin_yoko.html)

資料 4-1-4-1 佐賀大学大学院農学研究科の入学試験合否判定基準

(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

農学部入試委員会は、入学試験の結果や、高校・高専教員との意見交換等を踏まえ、入学者選抜に関する検証と改善を継続的にを行っている。改善例として、農業高校学生への推薦入試に関連したガイダンスの実施や入試科目（英語）の出題範囲の変更等の検討があげられる。また推薦入試および編入学試験においては、農学部内で入学者の学力の低下が問題視されており、入学者受入方針に沿って入学者の質を確保するために、定員の充足に捕われない選抜や定員そのものの削減についての検討が行われている。

農学研究科

各コース及び研究科の入学試験関係委員会は、アドミッション・ポリシーに沿った学生の受入れが行われているかどうかを継続的に検証しており、その結果は入学者選抜の改善に役立っている。具体的には、大学院関係入試小委員会は、各コース間での合格者数の調整、二次試験実施の有無に関する検討等

を毎年行っている。特に本年度は、質の高い学生を受け入れるための評価選抜要項の明文化を目指した作業が進行している。

4-2 実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっていること。

観点4-2-①： 実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか。また、その場合には、これを改善するための取組が行われるなど、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。

【観点に係る状況】

農学部

過去7年間（平成24～30年）の平均入学定員超過率は、学部1年次入学の場合が1.07倍であり、編入学の超過はない（資料4-2-1-1）。学部の入学定員と在籍学生数は、以下のとおりである。

農学部入学定員と実入学者

学 科	年度	入学定員(a)	実入学者合計(b)	超過率(b/a)
応用生物科学科	24	45	49	1.09
	25	45	49	1.09
	26	45	49	1.09
	27	45	46	1.02
	28	45	45	1.00
	29	45	46	1.02
	30	45	49	1.09
生物環境科学科	24	60	61	1.02
	25	60	61	1.02
	26	60	66	1.10
	27	60	62	1.03
	28	60	61	1.02
	29	60	64	1.07
	30	60	62	1.03
生命機能科学科	24	40	42	1.05
	25	40	42	1.05
	26	40	42	1.05

	27	40	43	1.08
	28	40	40	1.00
	29	40	43	1.08
	30	40	44	1.10

(出典：平成 30 年度佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要)

農学部編入学の実入学者数

入学定員	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度
10	8	7	7	9	8	10	11

(出典：平成 30 年度佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要)

農学部の入学定員と在籍学生数（平成 29 年度）

学科	入学定員	在籍学生数			
		1 年次	2 年次	3 年次	4 年次以上
応用生物科学科	45	46	45	46	58
生物環境科学科	60	64	61	61	76
生命機能科学科	40	44	41	41	41
3 年次編入学	10	—	—	10	9

備考：入学定員は 145 人である。

(出典：平成 29 年度佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要)

農学研究科

研究科の改組に伴い、平成 22 年度から入学定員が 40 人になったが、平成 23 年度から平成 29 年度の専攻別の入学者数は、次のとおりである。本研究科の実入学者数の入学定員に対する割合は、この 5 年間の平均で 1.06 となっており、ほぼ適切な（定員のプラス 30%以下）入学者数となっている。

農学研究科（修士課程）の入学者数（平成 30 年 5 月 1 日現在）

専攻	入学定員	入学者数						
		24 年度	25 年度	26 年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度
生物資源科学	40	50(2)	37(2)	37(1)	49(4)	42(1)	39(0)	39 (0)

(注) () は留学生で内数

(出典：平成 30 年度佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要)

資料 4-2-1-1 佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要（平成 29 年度）

(http://www.ag.saga-u.ac.jp/pdf/nogakubu_gaiyo.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

農学部の実入学者数は、入学定員を大幅に超過又は下回っておらず、入学定員と実入学者との関係は適正である。

農学研究科

この5年間の農学研究科の入学状況は、実入学者数が入学定員を大幅に超過することなく、また、大幅に下回ってもおらず、入学定員と実入学者との関係は適正である。

（2）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

農学部及び農学研究科ともに、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー及び入学者選抜の基本方針）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入れが実施されている。

平成30年度農学部推薦入試において、CBTを活用した基礎学力試験を導入することで、受験生の学力に関する質の確保に努めている。

平成31年度に延期された学部改組に対応するために、再度、入試制度の見直しを行った。特筆すべき点として、一般入試において受験生の主体性等を評価する「特色加点制度」の導入を決定した。また、特別入試においてAO入試Ⅰ・AO入試Ⅱの募集開始に伴い推薦入試Ⅰ（普通高校）の募集停止を決めた。このことにより、受験生にはセンター入試が課され客観的な学力考査を行うことになり、質の良い学生の入学に向けた体制が整った。

【改善を要する点】

平成30年度農学部編入学試験（第1次募集）では入学者の定員確保に不足が出たため、第2次募集を実施することで定員を確保した。平成31年度の編入学試験においては、第1次募集において極力定員を確保する必要がある。

平成31年度改組に伴う新学部および新研究科（農学研究科、先進健康科学研究科）の入学者選抜要項を作成、公表する。新規に導入予定の入試制度（AO入試、特色加点）については、早急に内容を整備し、高校関係者や受験生への積極的な情報提供を行う。設置認可後は速やかに、学部および研究科の入学試験を実施する。

（3）基準4の自己評価の概要

農学部及び農学研究科では、明確に定められた入学者受入方針（アドミッション・ポリシー及び入学者選抜の基本方針）に基づいた適正な試験制度により

基準5 教育内容及び方法

(1) 観点ごとの分析

<学士課程>

5-1 教育課程の編成・実施方法（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。

観点5-1-①： 教育課程の編成・実施方法（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められているか。

【観点到係る状況】

農学部では、佐賀大学の学士課程で学習する学生が、卒業までに身に付ける能力を「佐賀大学 学士力」として定め、この学士力に示した能力を学生に身に付けさせることを目指し、これらに沿いながら教育を行っている。また、農学部教育課程編成・実施の方針として、1. 教育課程の編成、2. 教育の実施体制、3. 教育・指導の方法、4. 成績の評価に分けて明確に定められている。

資料 2-1-1-3 佐賀大学農学部 3つの方針 (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/housin_nou.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

農学部教育課程の編成・実施方法が学科ごとに明確に定められている。

観点5-1-②： 教育課程の編成・実施方針に基づいて、教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切なものになっているか。

【観点到係る状況】

農学部教育課程の編成・実施方針に基づいて、各学科では、効果的な学習成果をあげるために、教養教育科目と専門教育科目を有機的かつ体系的に配置した4年間の教育課程を編成し、実行している。

これらの教育課程では、佐賀地域に立脚しながら、地球的規模で農学を考えることのできる幅広い視野、高度な専門知識、理解力、実践力等を備えた国際性豊かな人材を育成することを目的とし、その内容、水準は農学士の学位にふさわしいものとなっている。

授業科目区分と農学部の卒業要件

学 科		教養教育科目								小 計	専門教育科目			小 計	合 計		
		大 学 入 門 科 目	共通基礎科目			基本教養科目			イン ター フ ェ ー ス 科 目		共通教 職科目		専 門 基 礎 科 目			農 学 基 礎 科 目	専 門 科 目
			外 国 語 科 目	情報リ テラシ ー科目		自 然 科 学 と 技 術 の 分 野	文 化 の 分 野	現 代 社 会 の 分 野			体 育 実 技 Ⅰ	体 育 実 技 Ⅰ					
				英 語	講 義												
応 用 生 物 科 学 科		2	4	2	1	20			8			37	4	6	79	89	126
生 物 環 境 科 学 科	生物環境保全学コース	2	4	2	1	20			8			37	4	6	79	89	126
	資源循環生産学コース	2	4	2	1	20			8			37	4	6	79	89	126
	地域社会開発学コース	2	4	2	1	20			8			37	4	6	79	89	126
生 命 機 能 科 学 科		2	4	2	1	20			8			37	6	6	77	89	126

(出典：佐賀大学農学部「履修の手引」)

農学部の教育課程は、教養教育科目と専門教育科目で構成している。卒業するために必要な修得単位数（卒業要件という。）は、3学科（応用生物科学科、生物環境科学科、生命機能科学科）ともに126単位である。内訳は、教養教育科目が37単位（大学入門科目が2単位、共通基礎科目が7単位、基本教養科目が20単位、インターフェース科目が8単位）、専門教育科目が89単位である。専門教育科目の内訳は、専門基礎科目が4単位（応用生物科学科、生物環境科学科）又は6単位（生命機能科学科）、農学基礎科目が6単位（3学科共通）、専門科目が79単位（応用生物科学科、生物環境科学科）又は77単位（生命機能科学科）である。

教養教育科目である大学入門科目、外国語科目、情報リテラシー科目を必修とし、専門教育の基盤を形成できるようにしている。

専門教育科目については、専門基礎科目（数学、物理学、化学、生物学）を1年前学期に配置することにより、農学部における学修に必要な理数科目の基礎学力を養い、高校教育から大学における専門教育への移行がスムーズに行えるように配慮している。

農学部の中心的な授業科目（コア科目）として、農学基礎科目5科目を選定し、1、2年生向けに開講している。学生は、3科目（6単位）を選択履修（必修）することにより、農学の基本を修得する（資料5-1-2-1）。

専門科目の必修科目及び選択必修科目（一覧表）

学科		専門基礎科目	農学基礎科目	専門科目
応用生物科学科		化学 生物学		植物生理学，熱帯農業論，遺伝学，応用動物昆虫学，生物統計学，植物育種学，植物病理学Ⅰ，フィールド科学基礎実習Ⅲ，生物学実験，応用化学実験，果樹園芸学，蔬菜園芸学，応用生物学実験，科学英語，生物科学英語，生物情報処理演習，卒業研究
生物環境科学科	生物環境保全学コース	基礎数学，物理学，化学，生物学のうち2科目4単位	作物生産学，動物資源開発学，土壌学，生物化学，食品流通経済学のうち3科目6単位	生物環境保全学概説，資源循環生産学概説，地域社会開発学概説，実験生物環境保全学，実験水気圏環境学，生物環境保全学演習，科学英語，卒業研究
	資源循環生産学コース			生物環境保全学概説，資源循環生産学概説，地域社会開発学概説，環境保全型農業論，栽培環境制御学，農業生産機械学，フィールド科学基礎実習Ⅰ・Ⅱ，生物科学実験実習，科学英語，卒業研究
	地域社会開発学コース			生物環境保全学概説，資源循環生産学概説，地域社会開発学概説，地域資源論，人類生態学，地域ビジネス開発論，農業政策論，フィールドワーク基礎演習，フィールド科学基礎実習Ⅰ，科学英語，卒業研究
生命機能科学科		物理学 化学 生物学		物理化学，有機化学，分析化学，化学実験Ⅰ，生物有機化学，生化学，生物物理化学，微生物学，生命化学概説，食糧科学概説，食品衛生学，栄養化学，食品化学，分子生物学，生化学実験，化学実験Ⅱ，微生物学実験，生物学基礎実験，科学英語，卒業研究

(出典：佐賀大学農学部「履修の手引」)

応用生物科学科では，専門9科目の講義，科学英語，生物科学英語，生物情報処理演習，フィールド科学基礎実習Ⅲ，生物学実験，応用生物学実験，応用化学実験，卒業研究を必修科目としている。3年前期の始めに行う分野分属の後，各分野の教員が担当する選択科目や実験実習科目を選択，履修する。

生物環境科学科では，生物環境保全学，資源循環生物学，地域社会開発学の3コースを設けており，学生は，2年次前期から各コースに分属する。このため，カリキュラムはコースにより異なる。学科としての必修科目は，各コースが開設する概説，科学英語，卒業研究である。生物環境保全学コースの必修科目は，実験生物環境保全学，実験水気圏環境学と生物環境保全学演習である。資源循環生物学コースの必修科目は，4つの講義科目，フィールド科学基礎実習Ⅰ・Ⅱ並びに生物科学実験実習である。地域社会開発学コースの必修科目は，3つの講義科目，フィールドワーク基礎演習，フィールド科学基礎実習Ⅰである。これらの3コースの学生は，学生実験などを必修科目とするとともに，豊富な選択科目の中から履修科目を選ぶことにより，自主的に履修カリキュラムを作り上げる。

生命機能科学科は，13の講義科目，5つの実験実習科目，科学英語，卒業研究を必修科目としている。カリキュラムの基本的な部分を固定して，生命科学についての基本的な理解を深めさせることにより，有用生物の開発と生物資源の有効利用を図ることができる人材の養成を進めている。

資料 2-1-1-4 農学部履修の手引（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 5-1-2-1 農学部授業時間割表（平成 29 年度）

【分析結果とその根拠理由】

農学部教育課程の編成・実施方針に基づいて、各学科では、効果的な学習成果をあげるために、教養教育科目と専門教育科目を有機的かつ体系的に配置した 4 年間の教育課程を編成し、実行している。

これらの教育課程では、佐賀地域に立脚しながら、地球規模で農学を考えることのできる幅広い視野、高度な専門知識、理解力、実践力等を備えた国際性豊かな人材を育成することを目的とし、その内容、水準は農学士の学位にふさわしいものとなっている。

観点 5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

【観点に係る状況】

農学部の学生が受講する授業科目について、学生が主体的に学ぶことを支援するために、全授業科目に番号を付し、その学問分野と水準等を示すコースナンバリング制度を導入している。また、学生の多様なニーズに対応し、学修効果を高めるため、平成29年度より 1 科目週複数回授業を行うクォーター制を導入している。さらに、授業においては必要に応じて学生に発言を促したり、グループワークやディスカッションを実施したりする等、アクティブラーニングを実施し、学生の授業に対する満足度を高めている。（資料3-2-2-6 平成29年度授業評価報告書）

農学部学生は、単位互換制度に基づいて、他大学で開講される科目を履修できる（例：琉球大学の熱帯農学総合実習など）（資料2-1-1-4）。他方、農学部は、フィールド科学総合実習を附属アグリ創生教育研究センターにおいて毎年実施し、単位互換制度に基づく宿泊実習に他大学の学生を受け入れている。企業や試験場等でのインターンシップを3年前学期に実施し、単位として認定している（資料 5-1-3-1）。

専門基礎科目の物理学については、成績不良者に対する補講を実施している（資料 5-1-3-2）。編入学生については、短期大学等で修得した単位を一括して認定し、農学部の卒業要件に算入している（資料 5-1-3-3）。

多様な知的関心をもつ受講生の修学意欲を高め、理解を深めるために教員は、所属学会等における研究の成果を授業内容に組み込んだり、新聞記事など活用して、関係分野における社会的状況を紹介している。

資料 2-1-1-4 農学部履修の手引（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 5-1-3-1 インターンシップ参加者一覧（平成 29 年度）

資料 5-1-3-2 補講実績表（平成 29 年度）

資料 5-1-3-3 佐賀大学学生便覧（平成 29 年度）(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/binran.html>)

【分析結果とその根拠理由】

単位互換，インターンシップ，専門基礎科目の補講，編入学者への配慮などがなされている。また，授業時間割クォーター制，アクティブラーニングの導入や，授業において，学術の動向や社会的要請との関係が，必要に応じて紹介されている。これらのことにより，学生の多様なニーズ，学術の発展動向，社会からの要請等に対応した教育課程の編成及び授業科目の内容となっている。

5-2 教育課程を展開するにふさわしい授業形態，学習指導法等が整備されていること。

観点 5-2-①： 教育の目的に照らして，講義，演習，実験，実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり，それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

【観点に係る状況】

農学部並びに各学科の教育目的を達成するために，様々な授業形態を組み合わせ，カリキュラムに沿った教育を実施している（資料 5-2-1-1）。

農学部専門科目の授業形態別単位数

学科	コース	講義	演習	実験	卒業研究
応用生物科学科	—	75	2	4	8
生物環境科学科	生物環境保全学	75	2	4	8
	資源循環生産学	77	0	4	8
	地域社会開発学	79	0	2	8
生命機能科学科	—	70	0	11	8

（出典：佐賀大学農学部「履修の手引」）

演習科目の多くは，少人数授業でなされる対話・討論型授業である。フィールド科学基礎実習Ⅰ，Ⅱのようなフィールド型授業や，情報基礎演習Ⅰなどでは，パソコンを利用した授業を実施している（資料 2-1-5-1）。農学研究科の大学院生をTAとして採用し，学部学生に対する教育を充実させている。

資料 2-1-5-1 佐賀大学オンラインシラバス (<http://lc2.sc.admin.saga-u.ac.jp/syllabus2/syllabusSearchDirect.do?nologin=on>)

【分析結果とその根拠理由】

教育の目的に照らして，講義，演習，実験実習の授業形態がバランスよく組み合わせられており，教育目的に応じた適切な学修指導がなされている。

観点5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。**【観点に係る状況】**

単位の実質化については、量と質の両面において、配慮している。

農学部で開講されているすべての講義、演習、実験・実習は、単位修得に必要な授業時間数を確保している。やむを得ず休講になった場合は、必ず代替措置を実施している。また、単位の実質化を図るために、農学部履修細則で各学期に登録できる授業単位数の上限を定めている（資料2-1-1-4）。

農学部履修の手引には、カリキュラム表やシラバスなどの教務事項を詳しく記載している。1年次始めに行うガイダンスなどにおいて、各学科・各コースの履修プログラムについて詳しく説明している（資料5-2-2-1）。教育委員や教務課職員による個別的な履修指導やメールを活用した相談などにより、適切な履修計画を学生が立てられるようにしている。これらのことを通して、学修目標を明確にし、単位を修得するために必要かつ十分な学修を学生に求めている。また、平成23年度入学生からラーニング・ポートフォリオを導入し、学生が自らの学習活動について振り返ることによって、また、チューターの学修指導の一助として、単位の実質化に役立てている。

教員は、オフィスアワーを設定するとともに、メールアドレスを公開している。質問がある学生は、教員と連絡を取り、個別指導を受けることができる。研究室に分属した後の学生は、卒業研究の指導教員からマンツーマン指導を受ける体制にしている。

個人評価におけるGPAを、平成19年度から導入している。GPAは、学修意欲を引き出すために活用している（資料5-2-2-3）。

資料2-1-1-4 農学部履修の手引き（平成29年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料5-2-2-1 農学部オリエンテーション資料（平成29年度）

資料5-2-2-2 農学部ラーニング・ポートフォリオ実施要項

資料5-2-2-3 佐賀大学における成績判定等に関する規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

【分析結果とその根拠理由】

各学期に登録できる授業単位数の上限を定めるとともに、授業時間数の確保の徹底、組織的な履修指導などの、単位の実質化に必要な配慮がなされている。

観点5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。**【観点に係る状況】**

農学部の教育目的を達成するための教育課程は、農学部教育委員会が検討し、各学科、基本計画委員会並びに農学部教授会における審議を経て決定され、シラバスが作成されている。

教育課程の実践に必要な各教員が担当する授業科目のシラバスは、シラバスの記入フォーマットを使用して作成している。シラバスは、オンラインシラバスとしてインターネットで公開している（資料 5-2-1-1）。教員は、最初の授業でシラバスの内容を説明するとともに、「学生による授業評価」の結果等を利用して、毎年度末に点検を行いシラバスを改善している（資料 2-1-5-1）。

資料 2-1-5-1 佐賀大学オンラインシラバス

(<http://lc2.sc.admin.saga-u.ac.jp/syllabus2/syllabusSearchDirect.do?nologin=on>)

資料 5-2-3-1 授業評価アンケート実施基準 (<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

【分析結果とその根拠理由】

教育課程の編成趣旨に沿ったシラバスが適切に作成及び公開され、授業で活用されている。また、シラバスに記載する事項の改善は、「学生による授業評価」の結果などを利用してなされている。

観点 5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

【観点に係る状況】

学生からの質問や要望に対応するため、教員は、オフィスアワーやメールアドレスを学生に公開している（資料 5-2-4-1）。附属図書館は、学生用の机、パソコン等を整備し、学生が自由に使える体制としている（資料 5-2-4-2）。学生の自主学習のために、総合情報基盤センターや附属図書館のパソコンを自由に使えるようにしている。

農学部は、学生が机、椅子を自由に使えるコミュニケーションスペースを設けている。各研究室では、学生用の空間を整備している。これらを学生が自主学習のために活用している（資料 5-2-4-3）。

基礎学力が不足している学生については、専門基礎科目の数学では能力別のクラス分けを行い、クラス毎に進度を変えて対応を行っている。また、物理学で一定の成績を満たさなかった学生に補習授業を実施している（資料 5-1-3-2）。

資料 5-2-4-1 オフィスアワー一覧 (<https://lc2.sc.admin.saga-u.ac.jp/portalUI/html/shibbolethStart.htm>)

資料 5-2-4-2 附属図書館利用規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 5-2-4-3 農学部建物平面図

資料 5-1-3-2 補講実績表（平成 29 年度）

【分析結果とその根拠理由】

農学部の学生のための自主的学習環境は整備され、利用されている。また、基礎学力不足学生への配慮が組織的に行われている。

観点5-2-⑤： 夜間において授業を実施している課程（夜間学部や昼夜開講制（夜間主コース））を置いている場合には、その課程に在籍する学生に配慮した適切な時間割の設定等がなされ、適切な指導が行われているか。

【観点に係る状況】

該当なし

【分析結果とその根拠理由】

該当なし

観点5-2-⑥： 通信教育を行う課程を置いている場合には、印刷教材等による授業（添削等による指導を含む。）、放送授業、面接授業（スクリーニングを含む。）若しくはメディアを利用して行う授業の実施方法が整備され、適切な指導が行われているか。

【観点に係る状況】

該当なし

【分析結果とその根拠理由】

該当なし

5-3 学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定は適切に実施され、有効なものになっていること。

観点5-3-①： 学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められているか。

【観点に係る状況】

教育目標に照らして、学生が身に付けるべき具体的学習成果の達成を学位授与の方針とし、明確に定めている。また、学則に定める所定の単位を修得した者には、教授会の議を経て、学長が卒業を認定し、学位記を授与すると明確に定められている。また、さらに詳細に、学科毎に、1. 基礎的な知識と技能、2. 課題発見・解決能力、3. 個人と社会の持続的発展を支える力、に分けて定められている。

資料 5-3-1-1 佐賀大学農学部学位授与の方針 (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/housin_nou.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

教育目標に照らして、学生が身に付けるべき具体的学習成果の達成を学位授与の方針とし、明確に定めている。

観点5-3-②： 成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

佐賀大学成績判定等に関する規程が定められ、この規程に準じて、農学部で開講している授業科目の成績評価を実施している。「成績評価の方法」はシラバスに明記し、学生に周知している。成績判定は、授業科目の内容に応じて、定期試験、小テスト、レポート等により行い、成績評価と単位認定を厳格に実施している。卒業認定の要件は、履修細則や農学部履修の手引に明記している。卒業研究については、公開の卒業研究発表会を学科・コース単位で実施するとともに、卒業論文を提出させて、厳格に評価している。卒業認定は、学生が修得した科目の単位数と内訳に基づいて、教育委員会における実務的な検討を経て、教授会で審議し、決定している。

資料 5-2-2-3 佐賀大学における成績判定等に関する規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 5-3-2-1 農学部履修細則 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 2-1-1-4 農学部履修の手引 (平成 29 年度)

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

【分析結果とその根拠理由】

佐賀大学成績判定等に関する規程などに基づいて、成績評価と単位認定が適切に実施されている。卒業認定は、農学部規則に基づいて、教授会で審議し、決定している。

観点5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか。

【観点に係る状況】

佐賀大学成績判定等に関する規程に基づいて、成績判定を行っている。試験の答案は、成績判定の妥当性を検証・確認できるように、3ヶ月間保存することとしている。成績評価に異議のある学生は、成績評価の異議申立てに関する申合せに基づいて、担当教員に申し出ることができる。担当教員との協議によって成績評価に対する疑義が解決されない場合又は担当教員と協議ができない場合には、学部長に申し出ることができる。その場合、教育委員会は調査委員会の調査結果に基づき審議し、学部長に報告し、学部長は教授会の議を経て対応を決定することにより、成績評価の正確性を担保するための組織

的な処置を講じている。

資料 5-2-2-3 佐賀大学における成績判定等に関する規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 5-3-3-1 農学部における成績評価の異議申し立てに関する申合せ
(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

【分析結果とその根拠理由】

成績判定等に関する規程に基づく成績判定、学生に対する「成績評価の方法」の周知、成績評価に対する異議に対応する制度等により、成績評価の正確性を担保するための組織的な処置を講じている。

観点5-3-④： 学位授与方針に従って卒業認定基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って卒業認定が適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

農学部学位授与の方針に従って農学部履修細則に卒業認定基準が明記されている。卒業認定の要件は、履修細則や農学部履修の手引に明記し、オリエンテーション等で周知している。教育委員会は学生の単位取得状況を把握し、卒業認定基準にもとづいて卒業認定案を作成し、教授会で審議、決定している。

資料 5-3-2-1 農学部履修細則 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 2-1-1-4 農学部履修の手引（平成 29 年度）
(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

【分析結果とその根拠理由】

卒業認定基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って卒業認定が適切に実施されている。

＜大学院課程＞

5-4 教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。

観点5-4-①： 教育課程の編成・実施方針が明確に定められているか。

【観点に係る状況】

農学研究科の教育目標は、ホームページ（佐賀大学のウェブサイト、在学生の方へ、教育方針についてのページ）上で一般に公開されている。また、新入生オリエンテーション時に各学生に配布される大学院履修案内の中にも、教育研究の理念と目標として明記され、教育委員や指導教員から適時周知されている。

農学研究科は、平成22年度に1専攻5コース（1副コース）への改組を行い、各コースの教育目的に沿った教育課程の編成と実施方針が以下のように明確に定められている。

教育研究の理念と目的

農学は、21世紀の我々人類に課された責務として、食糧問題と環境問題を克服し、地球上のあらゆる生物が共に生存し続けるための生命生存に関する科学である。本研究科はそのための学問・研究することを目的としている。本研究科の使命は、近年の科学技術の高度化・情報化・国際化の中で、社会・国際ニーズに応えられる高度な専門知識と技能を持った創造性豊かな農学・生命科学に関する研究者・専門家になる人材を育成することである。

（出典：佐賀大学大学院農学研究科ホームページ）

農学研究科の教育目的と教育課程の編成・実施方針

（教育目的）

佐賀大学大学院農学研究科の教育目的は、科学技術が高度化・多様化・国際化する時代の中で、社会のニーズに応えられる人材、すなわち確固たる専門基礎知識に裏付けられた正しい価値観を基盤とし、冷静かつ柔軟な判断力・行動力を兼ねそなえた創造性豊かな専門職業人になるべき人材を育成することである。

農学研究科唯一の専攻である生物資源科学専攻において育成する人材は、第1に、高い倫理意識と国際性豊かな教養を有し、情報収集・分析能力及び優れたコミュニケーション能力を活かして、企業や社会において能力を発揮できる専門職業人であり、第2に、生物資源の開発と制御、環境保全と持続的農業生産、生命化学と食糧科学、地域社会の持続可能な開発などの分野で、先端的・応用的・実用的な能力を発揮できる高度な専門職業人であり、第3に、高度な農業技術と経営管理能力を有し、中北部九州及びアジアの諸地域における地域農業組織・企業・団体・行政・研究所等の職場で、実行力をもって活躍できる高度な専門職業人である。

（教育課程の編成・実施）

以上のような農学研究科の教育目的を達成するために、本農学研究科には、生物資源科学専攻の1専攻を置き、その中に5つの主コース（応用生物科学コース・生物環境保全学コース・資源循環生産学コース・生命機能科学コース・地域社会開発学コース）と1つの副コース（農業技術経営管理学コース）を設置する。

また、1単位制講義を基本とするサブ・セメスター制度を導入し、柔軟なクロス履修による専門横断的な知識の修得を可能とする教育課程を編成する。専攻共通科目として農学総合講義2単位を必修とし、基礎教育科目5科目（各1単位）から2単位を選択必修とすることにより、農学における基礎的

で広い知識も修得できるように配慮する。

さらに、それぞれの主コースに教育研究分野を配慮し、すべての学生はいずれかの教育研究分野に
分属し、指導教員のもとで特別研究（必修）を履修する体制を整える。

（出典：平成 29 年度佐賀大学大学院農学研究科履修案内）

【分析結果とその根拠理由】

農学研究科の教育目標は、ホームページで一般に公開されるとともに、大学院履修案内等の冊子にも
明記され、学生に適時周知されている。

農学研究科では、教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、ホームページで公開されるとともに
大学院履修案内等で学生に周知している。

**観点5－4－②： 教育課程の編成・実施方針に基づいて、教育課程が体系的に編成されており、その
内容、水準が授与される学位名において適切なものになっているか。**

【観点に係る状況】

農学研究科の各コースの教育課程は、各コースの教育方針に沿って編成されており、教育目標に対応
する科目群を大学院履修案内等で以下のように学生に明確に提示している。

教育課程の編成の一例（生物環境保全学コースの例）

（生物環境保全学コース）

本コースの教育課程は、環境関連分野に関する高度な専門知識を持ち、環境保全、持続的食料生産の
為の技術開発及び資源循環型地域社会の構築を行う能力を持つ高度専門職業人等を養成することを目
的とする。本コースにおいては、地球レベルから地域レベルに至るまでの様々なスケールで生じてい
る環境問題に対処し、環境に負荷の少ない生物生産環境の創出・保全と豊かな生活環境を創造するた
め、(1)生物環境保全学分野の幅広い知識と研究手法についての総合的な学習、(2)生物環境保全学分野
の高度な研究経験と専門知識の習得、(3)専門的職業人・研究者に必要とされる情報処理能力、分析能
力及びプレゼンテーション能力の習得、を教育目標とする。

教育目標 1 に関して、1 年次に必修科目である「専攻共通科目」として「農学総合講義」、「基礎教
育科目」として「生物環境保全学特論」を開講している。

教育目標 2 に関しては、「選択科目」として、「利水情報工学特論」、「水資源計画学特論」、「農地
環境工学特論」、「農地計画学特論」、「土壌物理学特論」、「先端地水学特論」、「浅海環境工学特論」、
「リモートセンシング工学特論」、「生産地盤工学特論」、「土質工学特論」、「環境資源学特論」、「物
理探査学特論」、「土地生産機能学特論」、「応用水利学特論」、「植物環境調節学特論」、「先端植物栄
養調節学特論」、「環境分析化学特論」を開講している。また、生物環境保全学分野における最先端、
かつ多様な研究活動の場を通じて研鑽を積むことを目標に「特別研究」が開講されている。

教育目標 3 に関して、学生同士が切磋琢磨する環境の中で、自ら研究課題を設定し研究活動を実施す

ることなどの想像力、自立力などを磨く教育として、「特別研究」及び「生物環境保全学演習」を開講している。

(出典：平成 29 年度佐賀大学大学院農学研究科履修案内)

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

【分析結果とその根拠理由】

農学研究科においては、最新の学問分野に関する授業科目である「特論」と、専門職業人への人材育成を目指す「演習」や「特別研究」をバランスよく配置し、さらに各コースの教育目的に沿った履修モデルを学生に提示していることから、教育課程が体系的に編成されており、授業科目の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっている。

観点 5-4-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

【観点に係る状況】

農学研究科の教員は、学会などに毎年複数回参加し、最新の研究動向を入手し、担当授業科目の中で自分の研究とともに自ら属する専門分野の今後の発展動向などを紹介している。また、多様なニーズを持つ学生を教育する一環として、修了要件である 30 単位中 10 単位を指導教員と相談の上、他専攻や他研究科が開講する科目を履修することができる制度（資料 2-1-3-2）を設けている。

また、社会的な要求から夜間開講の体制を整備し、社会人の受入れを可能にしている（資料 2-1-3-2）。本修士課程修了者は、鹿児島大学大学院連合農学研究科博士課程に進学可能であり（資料 2-1-3-2）、佐賀大学大学院農学研究科の修了生に限り、入学検定料を免除している。また、進学者にはスムーズに博士課程に入れるよう教育研究の指導をしている。さらに、留学制度（資料 5-1-3-3）については、大学間学術交流協定を締結している諸外国の大学間で実施している。

平成 22 年度の大学院改組に伴い、農学研究科では副コースとして農業技術経営管理学コースを設置した。この副コースは、高度な農業技術と経営管理能力を有する人材の育成を目的とする実践的な教育カリキュラム（農業版 MO T 教育）からなり、農業法人や法人化を志向する集落営農組織等における中核的経営者、農政や農業団体における営農指導者、農業関連分野に新規に参入する企業等における指導的立場で働く企業人及びアジアの諸地域におけるアグリビジネス産業の発展に寄与できる人材等の育成を目指すプログラムとなっている。この教育プログラムを修了することによって、農学修士に加えて「佐賀大学農業技術経営管理学コース」の修了証及び農業技術経営管理士の称号が授与され、学生に対する多様な教育の提供と地域社会からのニーズ、学術の発展に応えるものとなっている。

農業技術経営管理学コースの修了要件と修了証及び称号の授与

この教育プログラムでは、講義科目 11 単位と農業技術経営管理学概論 1 単位及び修了研究 3 単位の合計 15 単位以上の修得によって、農学修士に加えて「佐賀大学農業技術経営管理学コース」の修了証及び農業技術経営管理士の称号が授与される。

(出典：平成 29 年度佐賀大学大学院農学研究科履修案内)

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 5-1-3-3 佐賀大学学生便覧（平成 29 年度）(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/binran.html>)

【分析結果とその根拠理由】

自分の研究成果や専門分野の研究動向を授業科目に密接に反映させ、かつ他専攻や他研究科開講科目を履修する制度、留学制度、博士課程への進学優遇制度、夜間開講制度などを設けている。また、平成 22 年度からは経済学研究科と連携した副コースも設置する等、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮している。

5-5 教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等（研究・論文指導を含む。）が整備されていること。

観点 5-5-①： 教育の目的に照らして、講義、演習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

【観点に係る状況】

農学研究科では、平成 22 年度の改組に伴い、カリキュラム編成においても 1 単位制講義を基本とするサブ・セメスター制度を導入し、柔軟なクロス履修による専門横断的な知識の修得を可能とした。また、専攻共通科目として農学総合講義 2 単位を必修とし、基礎教育科目 5 科目（各 1 単位）から 2 単位を選択必修とすることにより、農学における基礎的で広い知識も修得できるように配慮した。各コースでは、標準履修モデルを作成し、学生に周知することにより体系的な履修が行われるよう配慮されている。

農学研究科のコース標準履修モデルの一例（生命機能科学コース）

【生命機能科学コース】履修モデル

	専攻共通科目 (必修)	基礎教育科目 (選必)	選択科目			特別研究 (必修)	研究科間共通科目（内 研究科間基礎科目は選 択必修）	単 位 数
			コース 必修科目	コース 選択科目	自由選 択科目			
2 年秋期 B				生命化学		特別		

2 年秋期 A				演習			研究		
2 年春期 B				食糧科学					
2 年春期 A				演習					
1 年秋期 B			先端分 析科学 特論Ⅱ	(二科目 のうち一 科目がコ ース必修 科目)	糖鎖工学特論 食糧流通貯蔵学特論			学術英語 特論	
1 年秋期 A					食品化学特論				
1 年春期 B	農学総 合講義	生命機 能科学 特論	先端分 析科学 特論Ⅰ		インターンシップⅠ タンパク質科学特論 微生物学特論 食糧流通貯蔵学特論				
1 年春期 A		応用生 物科学 特論			生化学特論 応用微生物学特論				
修了要件 単位数	2	2	4	4	6	0	10	2	30

(出典：平成 29 年度佐賀大学大学院農学研究科履修案内)

各コースの標準履修モデルに沿って、それぞれのコースの教育目標に適した科目が体系的に配置、開講されている。大学院では、最新の学問分野に関する授業科目を「特論」として広く配置し、「特別研究」もバランスよく配置され、それぞれの研究テーマを通じて創造性に富んだ高度な科学技術・専門知識を持った専門職業人を養成する内容となっている（資料 2-1-3-2）。

すなわち、各コースの開講科目中、学生が所属する講座の特別研究（10 単位）及び指導教員の指導による授業科目を合わせて 30 単位以上を履修することとし、各専攻の全ての履修モデルは、1 年前期に 12～13 単位、後期に 10～13 単位修得できるようにバランスよく開講している（資料 2-1-3-2）。

農学研究科の履修方法

- ① 開講授業科目中、専攻共通科目 2 単位、基礎教育科目から 2 単位以上、研究科間共通科目のうち研究科間基礎科目から 2 単位及び専門科目のうち各コースごとに各コース必修科目（特別研究 10 単位を含み、生命機能科学コースにあつてはコース選択必修科目 2 単位以上を含む。）を含む 24 単位以上、計 30 単位以上を履修しなければならない。
- ② その他指導教員が必要と認め、履修願を提出の上履修した他コース及び他研究科等の授業科目については、10 単位を限度として前項の 30 単位の中にも含めることができる。

所属コースの特別研究 10 単位

専攻共通科目 2 単位

基礎教育科目 2 単位以上

研究科間共通科目のうち研究科間基礎科目 2 単位

所属コースの科目 14 単位以上（他コース及び他研究科等の授業科目 10 単位を含む。）

合 計 30 単位以上

(出典：平成 29 年度佐賀大学大学院農学研究科履修案内)

また、履修手続きは、ウェブ（資料 5-5-1-1）による履修登録としている。本研究科の演習、実験、実習は基本的にすべて少人数教育であり、演習科目では対話・討論型授業やフィールド型授業を実施し、学習指導に関する工夫をしている。

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 5-5-1-1 佐賀大学ホームページ（Live Campus）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/livecampus.html>)

【分析結果とその根拠理由】

研究科では、各コースで履修モデルを示し、それぞれの特性に応じて講義、演習、実験、実習等をバランス良く配置し、少人数教育、対話・討論型授業、フィールド型授業、複数教員による指導など目的に応じた学習指導の多様な工夫が凝らされていることから、教育の目的に照らして授業形態の組合せ・バランスは適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされている。

観点 5-5-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

【観点到係る状況】

農学研究科では、カリキュラム編成（資料 5-5-2-1）において、無理のない十分配慮された授業時間配置をとっている。大学院生には、入学時に大学院教育委員会委員による履修に際してのオリエンテーションを受けさせるとともに、指導教員の指導のもとに研究テーマを設定し、その研究内容に適した履修計画を策定させている（資料 2-1-3-2）。

また、学生の授業科目選択の参考として大学院履修案内に講義概要（資料 2-1-3-2）を、オンラインシラバス（資料 5-5-1-1）に授業計画、成績評価基準を記載している。

平成 20 年度からは、学生の学業成績に G P A を採用し（資料 5-1-3-3）、試験の解答例等を学生へ提示すること、答案・レポート等の閲覧ができることなどもオンラインシラバスで周知している（資料 5-5-1-1）。

資料 5-5-2-1 大学院農学研究科授業時間割表（平成 29 年度）

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 5-5-1-1 佐賀大学ホームページ（Live Campus）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/livecampus.html>)

資料 5-1-3-3 佐賀大学学生便覧（平成 29 年度）(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/binran.html>)

【分析結果とその根拠理由】

カリキュラム編成において、十分配慮された授業時間配置をとっており、大学院小委員会委員や指導教員がきめ細かい履修指導をしている。また、試験の解答例等の提示、答案・レポート等の閲覧などを開始し、平成20年度からは、学生の学業成績にGPAを採用したことなどから、単位の実質化への配慮が適切になされている。

観点5-5-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

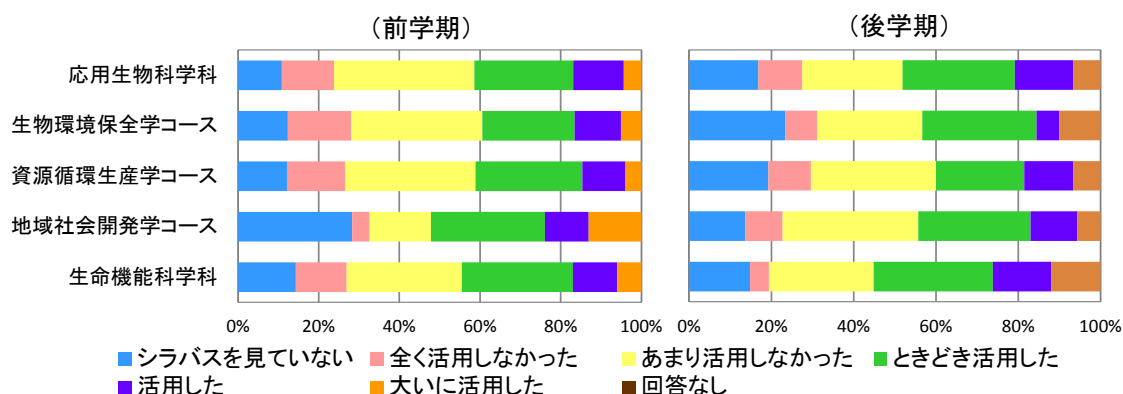
【観点到に係る状況】

全科目のシラバスは、本学共通のシラバス作成要領に従って作成され、オンラインシラバスとして、ホームページに掲載している（資料5-5-1-1）。このシラバスには、担当教員名・授業科目名・開講学期・開講曜日・時限などに加えて、授業計画・履修上の注意・成績評価の方法と基準・教科書・参考書・オフィスアワーを記しており、学生が授業科目を選択する上での適切な内容となっている。

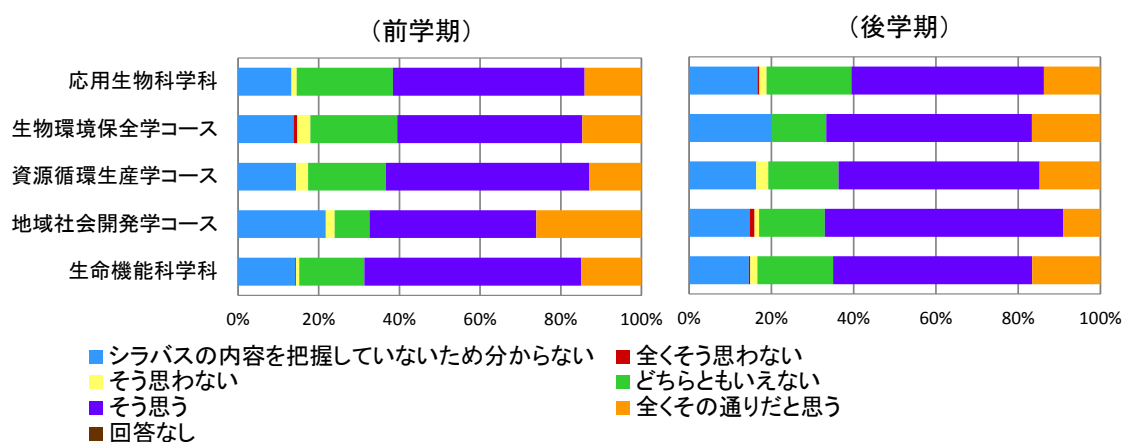
大学院生は、入学時に配布する大学院履修案内（資料2-1-3-2）に掲載されている授業科目概要及び履修モデルと、オンラインシラバスにある詳しい授業内容を参考にしながら、受講科目を決めることができる。

平成29年度の農学研究科「前期」と「後期」全科目のシラバスの利用に関するアンケート結果（資料3-2-2-6）によると、授業の選択・予習・復習のためにシラバスを活用したかについては、「大いに活用した」「活用した」「ときどき活用した」は前期60.3%、後期56.9%であり、前年度に比べると高くなっているが、十分とはいえない。また、授業内容はシラバスに基づいていたかについても、「全くそのとおりだと思う」「そう思う」と回答した学生の合計は、前期86.5%、後期78.4%となっており、こちらも前年度より増加しており、シラバスも授業内容の重要な情報源となっていることが伺える。

授業の選択・予習・復習のためにシラバスを活用したかの調査（平成29年度）



授業内容はシラバスに基づいていたかのアンケート調査（平成 29 年度）



資料 5-5-1-1 佐賀大学ホームページ（Live Campus）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/livecampus.html>)

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 3-2-2-6 平成 29 年度授業評価報告書（農学部・農学研究科）

【分析結果とその根拠理由】

大学院履修案内にカリキュラム表、授業科目概要及び履修モデルが掲載されるとともに、オンラインシラバスにおいて詳細な各教科のシラバスが公開され、学生はこれらを参考にしながら授業科目の選択、授業内容の確認、試験情報の確認を行うなどその活用がされている。

観点 5-5-④： 夜間において授業を実施している課程（夜間大学院や教育方法の特例）を置いている場合には、その課程に在籍する学生に配慮した適切な時間割の設定等がなされ、適切な指導が行われているか。

【観点に係る状況】

大学院においては、企業等に在職のまま入学を希望する社会人に対して、入学後も社会人が学びやすいように大学院設置基準第 14 条に定める教育方法の特例措置を実施している。希望者には、指導教員の指導により、履修方法や授業等の実施時間帯等の履修計画を立てさせるようにしている。また、特例による夜間の授業時間は第 1 時限 18:00～19:30 とし、14 単位までを課程修了に必要な単位数（30 単位）に含めることができるように配慮している（資料 2-1-3-2）。

また、平成22年度の大学院改組に伴い設置した副コース（農業技術経営管理学コース）では、社会人が主対象であるため、社会人が受講する科目は夜間又は集中で開講する配慮を行っている。また、開講科目は1, 2年時にバランスよく配置され、社会人の履修に無理のない体系となっている。

副コース（農業技術経営管理学コース）の授業科目

科目 区分	コース	授 業 科 目	単 位 数	担当教員	毎 週 授 業 時 数								備 考
					27 年 度				28 年 度				
					春学期		秋学期		春学期		秋学期		
					前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
副コース（農業技術経営管理学コース）専門科目	経営 管 理 部 門	（農業技術経営管理学コース）											
		農産物市場流通特論	1	白 武 義 治		2				2			
		農業政策学特論	1	（未 定）			2				2		
		農業経営学特論	1	辻 一 成									
		農村地理学特論	1	五十嵐 勉	2				2				
		地域資源開発学特論	1	中 井 信 介				2				2	
		農村社会学特論	1	藤 村 美 穂		2				2			
		アジア農村開発学特論	1	辻 一 成									
		国際環境保健学特論	1	稲 岡 司		2				2			
		経営分析特論	1	山 下 寿 文				2					
	知的財産と法特論	1	（未 定）										
	農業経済研究特論	1	品 川 優							2			
	管理会計特論	1	小 川 哲 彦							2			
	技 術 管 理 部 門	熱帯農業資源学特論	1	鄭 紹 輝	2				2				
		動物繁殖生理学特論	1	山 中 賢 一				2				2	
		果樹育種学特論	1	古藤田 信博	2				2				
		蔬菜花卉園芸学特論	1	一 色 司 郎			2				2		
		植物感染病学特論	1	草 場 基 章		2				2			
		植物病学特論	1	大 島 一 里			2				2		
		線 虫 学 特 論	1	吉 賀 豊 司	2				2				
		利水情報工学特論	1	原 口 智 和	2				2				
		農地計画学特論	1	弓 削 こ ず え			2						
		農地環境工学特論	1	近 藤 文 義		2				2			
	農 業 技 術 管 理 部 門	植物環境調節学特論	1	（未 定）									
		土 壌 物 理 学 特 論	1	長 裕 幸			2				2		
		リモートセンシング工学特論	1	郡 山 益 実									
		生産地盤工学特論	1	宮 本 英 揮		2				2			
		施設農業生産学特論	1	田 中 宗 浩	2				2				
		応用植物生理学特論	1	鈴 木 章 弘				2				2	
		作物生産学特論	1	有 馬 進			2				2		
		雑草生態学特論	1	（未 定）									
		家畜管理学特論	1	江 原 史 雄									
		生産情報処理学特論	1	北 垣・稲 葉	2				2				
	農 業 技 術 管 理 部 門	農用先端機械学特論	1	稲 葉 繁 樹				2				2	
		生産生態学特論	1	上 埜 喜 八			2				2		
		土 壌 学 特 論	1	染 谷 孝	2				2				
		ウイルス学特論	1	（未 定）									
		微生物学特論	1	小 林 元 太		2				2			
		食糧流通貯蔵学特論	1	（未 定）									
		食品科学工学特論	1	林 信 行									
		食品化学特論	1	光 富 勝			2				2		
		食品機能学特論	1	光 武 進			2				2		
		農業技術経営管理学概論	1	白武義治 他									
		修了研究（研究指導）		白武・五十嵐・辻 他									

備考： は主コースの専門科目と同一

(出典：平成29年度佐賀大学大学院農学研究科履修案内)

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

【分析結果とその根拠理由】

大学院では、社会人学生の希望があれば指導教員の指導により、特例による夜間の授業を実施し、夜間開講科目 14 単位までを課程修了に必要な単位数に含めるなど、社会人学生に配慮した適切な時間割の設定がなされ、適切な指導が行われている。また、社会人が多く履修する副コースにおいては、夜間や集中で科目を開講する等配慮されたカリキュラムとなっている。

観点 5-5-⑤： 通信教育を行う課程を置いている場合には、印刷教材等による授業（添削等による指導を含む。）、放送授業、面接授業（スクリーニングを含む。）若しくはメディアを利用して行う授業の実施方法が整備され、適切な指導が行われているか。

【観点に係る状況】

該当なし

【分析結果とその根拠理由】

該当なし

観点 5-5-⑥： 専門職学位課程を除く大学院課程においては、研究指導、学位論文（特定課題研究の成果を含む。）に係る指導の体制が整備され、適切な計画に基づいて指導が行われているか。

【観点に係る状況】

学生ごとに所属研究室と指導教員を定め、研究テーマに関する打合せを行い、研究指導実施計画書（資料 5-5-6-1）を作成し、それに基づき研究指導を実施している（資料 2-1-3-1）。また、平成 27 年度より、主指導教員、副指導教員を決め、毎学期に指導計画、実施状況報告をティーチングポートフォリオに記録として残している。適宜、研究の中間報告会を実施し、複数の教員により、各学生の研究に対する助言、指導を行っている。論文執筆に当たっては、学位論文の審査委員となった複数の教員（副査として 2 人以上）の指導を受けている（資料 5-5-6-2）。

修士論文に係る評価基準は、大学院履修案内（資料 2-1-3-2）とオンラインシラバス（資料 5-5-1-1）に明記するとともに、大学院履修案内を学生全員に配布し、さらに、入学時及び初回授業時にガイダンスを実施し、周知している。

修士論文及び最終試験の評価は、主査（1 人）及び副査（2 人以上）の教員が行い、「修士論文および最終試験の評価基準」（資料 2-1-3-2）に基づき、提出論文の内容、学位論文発表会での発表及び質疑応答内容などに対し、各教員が 100 点満点の採点制により、その平均点において、60 点以上を合格とし

ている。

資料 5-5-6-1	研究指導の実施に関する報告書
資料 2-1-3-2	大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度） (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html)
資料 5-5-6-2	修士論文の論文題目及び審査員について
資料 5-5-1-1	佐賀大学ホームページ（Live Campus） (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/livecampus.html)

【分析結果とその根拠理由】

研究指導、論文執筆、論文発表は、それぞれの専攻における複数の指導教員により常時、計画的かつ適切に行われていることから、教育課程の趣旨に沿った研究指導、学位論文に係る指導の体制が整備され、適切な計画に基づいて指導が行われている。

学位論文に係る評価基準は、入学時や授業開始時のガイダンスなどにより周知され、学位論文の審査については学位審査細則に基づき、厳格に実施されており、適切な審査体制が整備され、機能している。

5-6 学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、修了認定が適切に実施され、有効なものになっていること。

観点 5-6-①： 学位授与方針が明確に定められているか。

【観点に係る状況】

農学研究科では、以下のような学位授与の方針が明確に定められ、ホームページで公開するとともに、大学院履修案内等で学生に周知している。

農学研究科の学位授与の方針

佐賀大学大学院農学研究科の教育目的に沿った知識・技能を修得し、以下に示した学生が身につけるべき具体的学習成果の達成を学位授与の方針とする。

この方針に従って教育課程を編成・実施し、佐賀大学大学院農学研究科履修細則に定められた所定の単位を修め、修士論文審査に合格した者に対して修士（農学）の学位を授与する。

- 1 高い倫理意識と国際性豊かな教養を有し、情報収集・分析能力及び優れたコミュニケーション能力を活かして、企業や社会において指導的立場で能力を発揮できる力を身につけている。
- 2 生物資源の開発と制御、環境保全と持続的農業生産、生命化学と食糧科学、地域社会の持続可能な開発などの分野で、先端的・応用的・実用的な能力を身につけている。

3 中北部九州及びアジアの諸地域における地域農業組織・企業・団体・行政・研究所等の職場で、実行力をもって活躍できる力を身につけている。

(出典：佐賀大学ホームページ 在学生の方へ 教育方針)

【分析結果とその根拠理由】

農学研究科では、学位授与の方針が明確に定められ、ホームページで公開するとともに、大学院履修案内等で学生に周知していることから、適切に実施されている。

観点5-6-②： 成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

【観点到係る状況】

各授業の成績評価基準、修士論文、最終試験の評価基準及び修了認定基準は、大学院履修案内（資料2-1-3-2）とオンラインシラバス（資料5-5-1-1）に明記するとともに、大学院履修案内を学生全員に配布し、特に、成績評価基準については入学時及び各教員の初回授業時にガイダンスを実施し、周知している。

研究科の修了認定は、修了認定基準及び最終試験の評価基準に基づき、最初に提出論文の内容、学位論文発表会での発表及び質疑応答内容などにより、厳格に評価し、次に学位論文の単位を含めた修得単位数をもとに各専攻で修了認定審査を行い、さらに大学院教育委員会で審議後、最終的には研究科委員会（資料5-6-2-1）において認定を行っている。

資料2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成29年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料5-5-1-1 佐賀大学ホームページ（Live Campus）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/livecampus.html>)

資料5-6-2-1 研究科委員会議事録（平成29年度 大学院修了認定資料）

【分析結果とその根拠理由】

成績評価基準及び修了認定基準は、大学院履修案内やオンラインシラバスに明記するとともに、入学時及び初回授業時にガイダンスを実施し、学生全員に周知している。また、研究科の修了認定は、修了認定基準及び最終試験の評価基準に基づき、厳格に評価し、修了認定を行っており、成績評価、単位認定、修了認定が適切に実施されている。

観点5-6-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか。

【観点到係る状況】

成績評価等の正確さを担保するための措置として、平成20年度から学業成績にGPA（資料5-1-3-3）を採用し、さらに教員による成績評価判定資料の保管、学生に対する試験の解答例等の提示、答案・

レポート等の閲覧などを開始した(資料2-1-5-1)。また、成績の厳格評価の結果として生ずることが予測される学生からのクレームへの対応のために、「成績評価の異議申立てに関する要項」(資料2-1-1-4)を平成18年度に定めた。

資料 5-1-3-3 佐賀大学学生便覧(平成29年度)(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/binran.html>)

資料 2-1-5-1 佐賀大学オンラインシラバス

(<http://lc2.sc.admin.saga-u.ac.jp/syllabus2/syllabusSearchDirect.do?nologin=on>)

【分析結果とその根拠理由】

平成20年度から学業成績にGPAを採用し、さらに成績評価判定資料の保管、学生に対する試験の解答例等の提示、答案・レポート等の閲覧などを開始しており、成績評価等の正確さを担保するための措置が講じられている。

観点5-6-④： 専門職学位課程を除く大学院課程においては、学位授与方針に従って、学位論文に係る評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、適切な審査体制の下で、修了認定が適切に実施されているか。また、専門職学位課程においては、学位授与方針に従って、修了認定基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、修了認定が適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

修士論文に係る評価基準は、大学院履修案内(資料2-1-3-2)とオンラインシラバス(資料5-5-1-1)に明記するとともに、大学院履修案内を学生全員に配布し、さらに、入学時及び初回授業時にガイダンスを実施し、周知している。

修士論文及び最終試験の評価は、主査(1人)及び副査(2人以上)の教員が行い、「修士論文および最終試験の評価基準」(資料2-1-3-2)に基づき、提出論文の内容、学位論文発表会での発表及び質疑応答内容などに基づき、各教員の100点満点の採点制により、その平均点において、60点以上を合格としている。

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内(平成29年度)

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料 5-5-1-1 佐賀大学ホームページ(Live Campus)

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/livecampus.html>)

【分析結果とその根拠理由】

学位論文に係る評価基準は、入学時や授業開始時のガイダンスなどにより周知され、学位論文の審査については学位審査細則に基づき、厳格に実施されており、適切な審査体制が整備され、機能している。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

農学研究科では、平成 22 年度の組織改組に伴い、経済学研究科とも連携した副コースを設置し、広く社会からの要望に応える教育課程を編成している。

平成 23 年度農学部入学生からラーニング・ポートフォリオを導入し、学生が自らの学習活動について振り返ることによって、また、チューターの学修・生活指導の一助として、単位の実質化に役立てている。平成 28 年度には授業科目のコースナンバリングを行い、さらに、教育の質的向上を目指し、一部の科目について週複数回授業の実施、授業のルーブリック評価、アクティブラーニングの平成 29 年度より試行導入している。

【改善を要する点】

全授業科目におけるアクティブラーニングについて授業担当教員に周知し、現在実施状況を調査中である。また、平成 29 年度より一部授業科目にルーブリック評価を導入している。

ラーニングポートフォリオに関しては、学生委員・指導教員の指導により、学生の入力率も改善している（平成 29 年度前期各学年平均で約 95%）。

また、学習効果を高めるための時間割のクォーター制や、全授業科目においてアクティブラーニングの導入率を高める必要がある。また、大学院課程では、専門分野における教育だけではなく、他分野との融合を図り、複眼的視点を持って広く学べるようなカリキュラムの整備も必要である。

（３）基準 5 の自己評価の概要

農学部及び農学研究科では、教育課程の編成・実施方法（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されている。また、学位授与方針も明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定、修了認定が適切に実施されており、その内容、水準が授与される学位名においても適切である。

基準6 学習成果

(1) 観点ごとの分析

6-1 教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。

観点6-1-①：各学年や卒業（修了）時等において学生は身に付けるべき知識・技能・態度等について、単位修得、進級、卒業（修了）の状況、資格取得の状況等から、あるいは卒業（学位）論文等の内容・水準から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点到係る状況】

農学部

農学部教育委員会は、各学年終了時及び卒業時まで身に付ける学力・能力、資格取得の状況、あるいは卒論・修論の内容と水準を検討し、教育の成果と効果を確認している（資料2-2-1-3）。

各チューターは、ラーニングポートフォリオの単位取得状況および学士力項目別到達状況表を参考にして各学期終了時に担当学生の面接を行い、到達状況の確認と履修指導を行っている。農学部教育委員会は、卒業判定時にラーニングポートフォリオを活用して学士力の項目別達成状況を確認したうえで、卒業判定を行っている。

なお、修業年限4年間の修得総単位数は、卒業要件である126単位を超えた平均130単位を概ね超えており、高い水準を維持している。

また、農学部教育において最重要科目と位置付けている卒業研究は、指導教員による個別指導のもと実施されており、大きな教育効果が得られている。

修業年限4年間の修得総単位数の平均値

入学年度 学科名	平成21年度		平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度	
	対象 学生数	修得総 単位数	対象 学生数	修得総 単位数	対象 学生数	修得総 単位数	対象 学生数	修得総 単位数	対象 学生数	修得総 単位数	対象 学生数	修得総 単位数
応用生物科学科	38	134.5	49	130.8	47	131.3	45	129.6	44	135.1	43	132.5
生物環境科学科	59	133.6	58	136.3	62	131.7	60	130.4	53	132.8	61	133.7
生命機能科学科	45	132.5	39	129.4	41	130.0	40	130.5	42	127.9	39	132.0

農学研究科

次の表は、平成23～28年度に大学院生等が関係した研究成果（学会発表及び研究論文数）である。大学院生の在籍者数は各年度40人（定員）内外であり、従前は概ね全大学院生が毎年1回の学会発表を行い、2.5～5人に1人が論文を発表していることになる。

平成 21 年度から業績の入力システムが学部単位から全学単位に変わった後、教員のウェブ入力率は比較的高い水準にあるものの、学会発表や論文数の入力漏れがあると推察され、佐賀大学教員活動データベースへの入力の徹底および入力漏れに対する注意を促すことを、継続する必要がある。

大学院修士学生の学会発表・論文発表数

区分 \ 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
学会発表数 (回)	36	55	49	49	53	35	43
論文発表数 (件)	16	9	9	9	11	15	14

注：論文発表数は、学生が学術雑誌（紀要，論文集等も含む。）に発表したもの（査読中・投稿中のものは除く。）

また、複数教員による研究指導および修士の学位に関する厳格な審査を行っている中で、平成 29 年度に修了を予定する全在籍者数 42 人(平成 27 年度入学者 1 人，平成 28 年度入学者 41 人)全員が修了していること，平成 26 年度以前に入学した学生の在籍数も 0 人となっていること，平成 24 年度以降の修了率が改善して高い水準を維持していること等から（資料 5-6-2-1），生物資源科学 1 専攻に改組した平成 22 年度以降，教育の成果は着実に上がっている。

平成 29 年度農学研究科修了者数（平成 30 年 3 月 23 日付け）

専攻・コース		入学年度			在籍者数			修了者数			留年者数		
		27 年 入学	28 年 入学	計	27 年 入学	28 年 入学	計	27 年 入学	28 年 入学	計	27 年 入学	28 年 入学	計
生物資源 科学専攻	応用生物科学コース	0	11	11	0	11	11	0	0	0	0	0	0
	生物環境保全学コース	0	4	4	0	4	4	0	0	0	0	0	0
	資源循環生産学コース	0	9	9	0	9	9	0	0	0	0	0	0
	地域社会開発学コース	1	5	6	1	5	6	0	0	0	0	0	0
	生命機能科学コース	0	12	12	0	12	12	0	0	0	0	0	0
合 計		1	41	42	1	41	42	0	0	0	0	0	0

（出典：農学研究科委員会資料（平成 30 年 3 月 6 日））

農学研究科における年度別修了率

専 攻	平成 24 年度			平成 25 年度			平成 26 年度			平成 27 年度			平成 28 年度		
	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率	在籍者数	修了者数	修了率

生物資源科学専攻	46	41	89 %	54	50	93 %	40	37	93 %	36	36	100 %	46	45	98 %
----------	----	----	---------	----	----	---------	----	----	---------	----	----	----------	----	----	---------

(出典：教務課大学院記録)

平成 22 年度の大学院改組に伴い、新しく設置した副コース（農業技術経営管理学コース）には、社会人を対象とした講座（農業技術経営管理士育成講座）に 12 人、2 年次在籍学生を対象としたプログラム（農業技術経営管理者育成プログラム）に 3 人の受講者があり、農業技術経営管理士養成講座及び農業技術経営管理者育成プログラム全員が、論文審査を含む単位を修得して修了している。

これら大学院の各教育カリキュラムにおける良好な修了率から、学習効果は上がっていると判断される。

平成 29 年度副コース修了者数（平成 30 年 3 月 23 日付け）

講座・プログラム	在籍者数	修了者数
農業技術経営管理士養成講座	12	12
農業技術経営管理者養成プログラム	3	3
合計	15	15

(出典：農学研究科委員会資料（平成 30 年 3 月 6 日）)

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度）

(http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html)

資料 2-2-1-3 農学部教育委員会議事要旨

資料 5-6-2-1 研究科委員会議事録（平成 29 年度 大学院修了認定資料）

【分析結果とその根拠理由】

農学部

単位修得率並びに卒業研究の内容から、教育の成果は上がっていると判断される。

農学研究科

年度毎の学会発表数や論文発表数から、大学院生の 1 人 1 回は学会で発表し、2.5～5 人に 1 人は論文を学術誌に発表している。また、複数教員による指導と厳格な審査体制のもと、平成 22 年度から設置した副コースを含め、修士課程の過去 5 年間の修了率は漸増して高い水準を維持していることから、教育の成果や効果が上がっていると判断される。

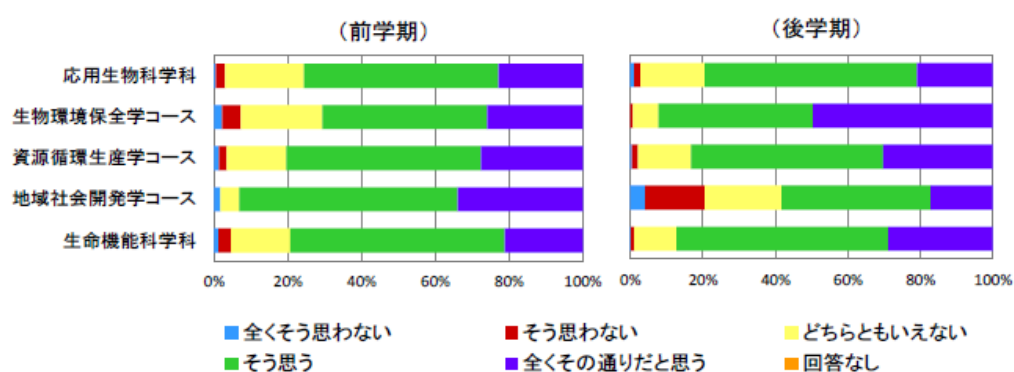
観点6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

農学部

大学教育委員会が行っている授業評価（資料3-2-2-6）の結果では、全体として満足できた（「全くその通りだと思う」、「そう思う」）と答えた学生の割合は、前期では応用生物科学科 75.7%、生物環境保全学コース 70.6%、資源循環生産学コース 80.3%、地域社会開発学コース 93.2%、生命機能科学科 79.4%、後期では、応用生物科学科 79.4%、生物環境保全学コース 92.2%、資源循環生産学コース 83.2%、地域社会開発学コース 58.2%、生命機能科学科 87.2%となっており、大部分の学生が満足していることが分かった。

「この科目を受講してみて、満足が得られたかどうか」に関するアンケート調べ



（出典：平成29年度授業評価報告）

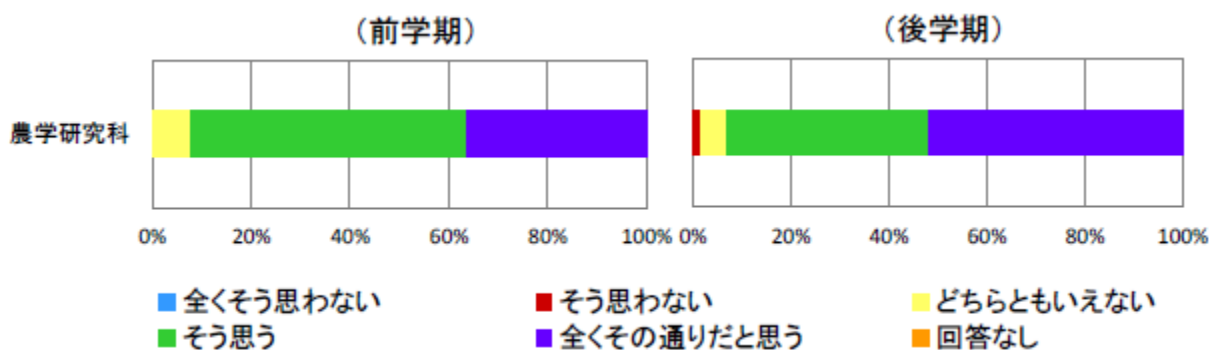
農学研究科

農学研究科の理念と目的に沿った教育の成果や効果が十分上がっているか否かを明らかにするために、大学院生による授業評価、修了生を対象としたアンケート調査および学生対象アンケート調査などを通じて、自己評価・分析を行っている。

大学教育委員会が行っている授業評価（資料3-2-2-6）によれば、授業の満足度については、前期が92.2%、後期が93.1%と肯定的意見が90%以上の高水準（前年度は前期79.4%、後期95.0%）となっており、概ね教育の効果が上がっていると判断される。

さらに、修了（予定）者を対象としたアンケート調査（資料6-1-2-1）では、農学研究科が教育効果を期待する項目について、「ややできた・かなりできた」とする比率の合計が60%を超える項目が多い。しかし、コミュニケーション能力（語学力）、創造性、一般教養、異分野理解等の項目については、「まったくできなかった・あまりできなかった・どちらともいえない」と判断をしている学生が比較的多いため、これらへの対応を検討する必要がある。

「この科目を受講してみて、満足が得られたかどうか」に関するアンケート調べ



(出典：平成 29 年度授業評価報告)

平成 29 年度農学研究科修了者におけるアンケート調査 (回収率 44%, 18 / 41 人)

(%)

項目	まったくできなかった	あまりできなかった	どちらともいえない	ややできた	かなりできた	合計
専門的な知識と技能		11.1	11.1	55.6	22.2	100
就職に結びつく技能		11.1	27.8	44.4	16.7	100
分析し批判する能力		16.7	22.2	55.6	5.6	100
社会に適応する能力		5.6	38.9	44.4	11.1	100
コミュニケーション能力 (対人関係)			22.2	61.1	16.7	100
コミュニケーション能力 (語学力)	5.9	23.5	29.4	41.2		100
プレゼンテーション技術		5.6	11.1	61.1	22.2	100
ディベート (議論・討論) の能力		11.1	27.8	50.0	11.1	100
資料や報告書を作成する能力		11.1	22.2	38.9	27.8	100
創造性	5.6	16.7	50.0	22.2	5.6	100
一般教養		16.7	44.4	27.8	11.1	100
異文化理解	11.8	11.8	23.5	41.2	11.8	100
研究能力		5.6	11.1	61.1	22.2	100
課題を探究する能力		16.7	11.1	55.6	16.7	100
問題を解決する能力		11.1	16.7	61.1	11.1	100

(出典：平成 29 年度佐賀大学学生調査報告書)

資料 3-2-2-6 平成 29 年度授業評価報告書 (農学部・農学研究科)

資料 6-1-2-1 修士学生対象アンケート (平成 29 年度)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

授業評価アンケートや卒業・修了予定者アンケートの結果から、授業に対する満足度は比較的高く、ほとんどの学生が大学生活を通して専門的な知識・技能を修得できたと回答していることから、教育の成果と効果が上がっていると判断される。

農学研究科

大学院生による授業評価、修了生に対するアンケート調査等から判断して、教育の成果や効果は概ね上がっていると判断される。

6-2 卒業（修了）後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっていること。**観点6-2-①： 就職や進学といった卒業（修了）後の進路の状況等の実績から判断して、学習成果が上がっているか。**

【観点に係る状況】

農学部

卒業生の進路・就職率は、経済状況（景気）に左右され得るものの、総合科学である農学部の特性を反映して、公務員製造業、J A、食品、理科系教員など、様々な分野へ進出している。農学部卒業生の過去5年の就職率は、非常に高い水準を維持している。

農学部卒業生の就職率

区 分	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
農学部卒業生	98.0%	99.0%	98.1%	99.0%	98.0%	100%

（出典：平成 29 年度佐賀大学キャリアセンター就職統計）

農学研究科

就職や進学といった進路状況等について、農学研究科は就職委員会を組織して、現状を定量的に把握し、教育成果や効果を調査している。平成 29 年度の修了生の就職率は 100.0%であり、高い就職率を達成している。また、進学者は 3 人（修了生全体 42 人）であり、年度によるばらつきが認められるため、進学者数の増減傾向を注視する必要がある。

また、専攻が育成を目指す人材像に学生が近づいているという意味（履修モデルを推奨）では、就職者のほとんどが専門分野と関連する業種に就いていることから、専門職業人の養成に関する教育の成果が上がっていると判断される。

修了生の進学及び就職状況

年 度	修了生数	進学者	就職者	その他
23	45	4	33	8
24	41	1	33	7
25	50	4	41	4
26	37	2	32	3
27	36	0	33	3
28	45	3	35	7
29	42	3	37	2

(出典:平成29年度佐賀大学キャリアセンター就職統計)

平成29年度農学研究科修了生の就職先

産業分類	生物資源科学専攻
農業, 林業	1
建設業	1
機化学工業・石油・石炭製品等製造業	4
その他の製造業	3
食料品・飲料・たばこ・飼料製造業	10
卸売業・小売業	2
金融・保険業	2
情報通信業	2
サービス・その他	4
教育, 学習支援業	3
公務員	5
教員等	2
総 計	37

(出典:平成29年度佐賀大学キャリアセンター就職統計)

資料 4-2-1-1 佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要 (平成29年度)

(http://www.ag.saga-u.ac.jp/pdf/nogakubu_gaiyo.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

就職実績から判断して、教育の成果は上がっていると判断される。

農学研究科

平成29年度の修了生の就職率は、100.0%であり、非常に高い就職率となった。なお、専門職業人の養成に関しては、ほとんどの就職者が専門分野と関連する業種に就いていることから、専門教育の効

果は十分に上がっていると判断される。

観点6-2-②：卒業（修了）生や、就職先等からの意見聴取の結果から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部・大学院農学研究科における教育効果を検証するために、農学部就職委員会は、平成29年11月に、農学部卒業または農学研究科修了後3年以内のOB・OGとその採用企業・官公庁の人事担当者・上司等を対象として、「佐賀大学 学士力」を構成する各能力および学習満足度に関するアンケート調査を実施し、計71名から下表に示す回答結果を得ている。

農学部卒業または農学研究科修了後3年以内のOB・OGからの回答(平成29年11月)

	質問項目	評価段階					平均点
		(低い) 1	2	3	4	(高い) 5	
学士力 関連評価	1. 基本的な理解力, 思考力, 判断力を有する	0.0%	1.7%	40.0%	41.7%	16.7%	3.7
	2. 日本語によるコミュニケーションができる	0.0%	3.3%	38.3%	35.0%	23.3%	3.8
	3. 英語能力を生かして情報の収集・発信ができる	16.7%	33.3%	36.7%	11.7%	1.7%	2.5
	4. 知識や情報を収集し, 適切に活用・管理できる	1.7%	8.3%	38.3%	43.3%	8.3%	3.5
	5. 専門分野の基本的な知識・技法を習熟している	1.7%	10.0%	45.0%	35.0%	8.3%	3.4
	6. 課題を多面的に考察し, 解決方法を見出すことができる	0.0%	13.3%	41.7%	40.0%	5.0%	3.4
	7. 専門分野の知識・技法を応用し, 課題を解決することができる	3.3%	11.7%	50.0%	28.3%	6.7%	3.2
	8. 他者との協調・協働により, 課題を解決できる	0.0%	6.7%	25.0%	46.7%	21.7%	3.8
	9. 国際コミュニケーション能力と異文化理解能力を有する	13.3%	30.0%	33.3%	23.3%	0.0%	2.7
	10. 持続的に学習し, 主体的に行動する意欲がある	0.0%	10.0%	40.0%	38.3%	11.7%	3.5
	11. 倫理観, 規範意識, 社会的責任感を備えている	0.0%	3.3%	33.3%	38.3%	25.0%	3.9
OB・OG満足度	12. 期待通りの活躍をしているか?	1.7%	5.0%	51.7%	33.3%	8.3%	3.4

備考1：各設問事項について、優れているものを「5」、劣っているものを「1」とし、5段階で評価した。

備考2：平均点は、各評価項目の評価段階×回答数を合計回答数で除した値である。

採用企業・官公庁の人事担当者・上司等からの回答(平成 29 年 11 月)

	質問項目	評価段階					平均点
		(低い) 1	2	3	4	(高い) 5	
学士力 関連評価	1. 基本的な理解力, 思考力, 判断力を有する	0.0%	9.1%	9.1%	63.6%	18.2%	3.9
	2. 日本語によるコミュニケーションができる	0.0%	0.0%	9.1%	45.5%	45.5%	4.4
	3. 英語能力を生かして情報の収集・発信ができる	9.1%	18.2%	63.6%	0.0%	9.1%	2.8
	4. 知識や情報を収集し, 適切に活用・管理できる	0.0%	0.0%	36.4%	45.5%	18.2%	3.8
	5. 専門分野の基本的な知識・技法を習熟している	0.0%	9.1%	0.0%	63.6%	27.3%	4.1
	6. 課題を多面的に考察し, 解決方法を見出すことができる	0.0%	27.3%	36.4%	18.2%	18.2%	3.3
	7. 専門分野の知識・技法を応用し, 課題を解決することができる	0.0%	9.1%	27.3%	54.5%	9.1%	3.6
	8. 他者との協調・協働により, 課題を解決できる	0.0%	9.1%	9.1%	54.5%	27.3%	4.0
	9. 国際コミュニケーション能力と異文化理解能力を有する	0.0%	27.3%	63.6%	0.0%	9.1%	2.9
	10. 持続的に学習し, 主体的に行動する意欲がある	0.0%	0.0%	27.3%	45.5%	27.3%	4.0
	11. 倫理観, 規範意識, 社会的責任感を備えている	0.0%	0.0%	18.2%	27.3%	54.5%	4.4
採用者満足度	12. 期待通りの活躍をしているか?	0.0%	0.0%	9.1%	72.7%	18.2%	4.1

備考 1: 各設問事項について, 優れているものを「5」, 劣っているものを「1」とし, 5段階で評価した。

備考 2: 平均点は, 各評価項目の評価段階×回答数を合計回答数で除した値である。

英語能力を生かした国際・異文化コミュニケーション(質問項目 3, 9)に関する卒業生・修了生の自己評価はやや低調な水準にあるものの, それを除く全項目の平均点が比較的高い水準にあることから, 就学中に専門職業人・社会人に求められる能力を身に付けることができた実感していると判断される。特に修了生は, 専門分野における課題解決型の修士論文を作成する過程で知識・技法・課題解決力等の業務遂行力を, またティーチングアシスタントとして学部学生の研究教育を補佐する過程で指導力・リーダーシップを, それぞれ効果的に身に付けていると判断される。

一方, 農学部卒業生および農学研究科修了生を採用した人事担当者・上司等も, 卒業生・修了生に対して概ね高い評価を与えている。ほぼ全ての項目の平均点が OB・OG のそれらよりも高く, 特に採用企業・官公庁等の満足度(質問項目 12)を示す平均点が「4.1」と非常に高いことから, 卒業生・修了生が期待以上の活躍を示していると判断される。

農学研究科

平成 29 年 11 月に, 農学部卒業または大学院修士課程修了後 3 年以内の OB・OG を対象として実施したアンケート調査の結果から, 佐賀大学卒業生・修了生の多くが, 「佐賀大学 学士力」に定めた多くの項目において良好な自己評価を行っている。また, 採用企業・官公庁の人事担当者・上司等からも, ほぼ全項目において卒業生・修了生の自己評価を上回る高い評価を与えられている。

さらに, 農学部・農学研究科では後援会と同窓会の支援により, 年間 10 回程度の就職セミナーを催すとともに, 各専攻主任の教員が就職支援活動の一環として会社訪問を行い, 就職した卒業生・修了生の働きぶりに関する聞き取り調査や, 求人の依頼を行っている。

【分析結果とその根拠理由】

農学部

平成29年度11月に実施したアンケート調査における採用企業・官公庁の人事担当者・上司等による評価は、学部卒業者・大学院修了者による自己評価より全体的に高く、採用側の満足度も非常に高いことから、農学部における教育の成果と効果は十分に上がっていると判断される。

農学研究科

平成29年度11月に実施したアンケート調査における採用企業・官公庁の人事担当者・上司等による評価は、学部卒業者・大学院修了者による自己評価より全体的に高く、採用側の満足度も非常に高いことから、農学研究科における教育の成果と効果は十分に上がっていると判断される。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

農学部及び農学研究科では、学生の履修状況、研究発表成果や修了状況、また各種アンケート調査から、教育の成果と効果は十分に上がっていると判断される。

【改善を要する点】

アンケート検証の結果、「他者と協調・協働して課題に取り組む能力がある」や「持続的に学習を続け、主体的に仕事に取り組む」など高い評価があった半面、「国際コミュニケーション力、異文化理解力がある」や「積極的でリーダーシップがとれる」での評価が低く、今後特に後者について学生の教育効果について検討が必要である。教育・研究の改善や具体的な学生支援策を検討するためには、現状を正確に把握すること、すなわち「ラーニングポートフォリオ、就職システム、佐賀大学教員活動データベース」の入力率を高い水準で維持することが必要不可欠である。入力状況を適宜確認し、教育・研究の成果や現状を正確に把握する。

また、学部の授業の満足度は比較的高い水準にあるが、コース毎や学期毎にばらつきが大きいいため、今後も、満足度の向上にむけた工夫を行う。

参考（年度毎の授業満足度）

学科名等	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
応用生物科学科	68	69	84	78	76	79
生物環境保全学コース	61	82	79	73	71	92
資源循環生産学コース	79	80	84	90	80	83
地域社会開発学コース	89	58	81	85	93	58
生命機能科学科	64	73	76	79	79	87

(3) 基準6の自己評価の概要

農学部及び農学研究科では、学生の履修状況、研究発表成果や修了状況、また各種アンケート調査から、教育の成果と効果が十分に上がっていると判断される。

基準 7 施設・設備及び学生支援

(1) 観点ごとの分析

7-1 教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。

観点 7-1-①： 教育研究活動を展開する上で必要な施設・設備が整備され、有効に活用されているか。

また、施設・設備における耐震化、バリアフリー化、安全・防犯面について、それぞれ配慮がなされているか。

【観点到る状況】

農学部

農学部は、基本計画委員会規程及び施設委員会規程を定め、それぞれの委員会で施設・設備の運用方法に係る諸課題について審議し、審議結果を教職員へ周知している（資料 3-1-1-1, 7-1-1-1）。農学部では「実験・実習における安全の手引」（資料 7-1-1-2）に施設・設備の利用方法を明記し、新入生オリエンテーション（資料 7-1-1-3）で新入生全員に配布し、周知を図るとともに、実験・実習の際に再度、使用方法を指導している。また、学科・学系などの専門教育研究分野ごとにスペースを集団化し、実験スペースや施設のオープン化、共有化、共同利用化の促進と、研究教育機能の効率化を進めている。共同利用スペースの運用については佐賀大学農学部共同利用スペース利用細則（資料 7-1-1-4）を制定し、構成員に周知させている。また、学生コミュニケーションスペース、大学院演習室、学生自習室、広報室、地域支援室、高度解析共同実験室、客員教授室などを設けて、キャンパスアメニティの形成とともに、産学の連携・協力型研究及び生涯学習などの地域貢献の推進にも配慮している。

高度な教育研究に必要な機器は、総合分析実験センター機器分析部門の装置として登録・管理されており、その利用に関しては、佐賀大学ホームページの利用案内（資料 7-1-1-5）に示されている。多目的講義室、大学院演習室、学生演習室、会議室の使用に当たっては、事前に予約表に記入することを義務づけている。液晶プロジェクター、実物投影機、OHP、スライドプロジェクターなどの教育機器についても集中管理し、予約制としている。

農学部は、1号館から4号館の建物の他に、圃場、大型温室を含む温室等を有しており、年間を通して活用している（資料 7-1-1-6）。圃場および温室に関して、学長裁量圃場等が制定され、利用希望者は利用申請書により学長へ申請することになり、選定に関しては農学部が付託された。圃場整備に関しては、西圃場エリアの整備が緊急課題であり、農学部からの営繕要求重点事項として申請している。

附属アグリ創生教育研究センターには、農場及び畜産設備があり、農場実習や学生の学位論文や卒業論文作成等に有効に利用され、フィールドを重視した教育研究に必要な施設・設備を整備し、活用している。

農学部共通の講義室は、1号館に9室あり、学部及び大学院の講義に利用されている（資料 7-1-1-7）。

また、少人数の講義や研究指導を円滑に運用するためのセミナー室、学部の卒業研究や大学院の特別研究を行う学生の研究室や実験室を整備している（資料 5-1-3-3）。大学院生用の多目的講義室及び演習室は、学部教育のためにも活用されている。

耐震化については工事を終了しており、当面の問題はない。バリアフリー化については農学部の1, 2, 4号館の出入り口に少なくとも1ヶ所、車いすの出入りができるようにしている。また、本館の階段に身体障害者用に手すりを設置し、3, 4号館の間に省エネに配慮したLED電球の街灯を設け、農学部敷地内の犯罪の防止にも努めている。農学部各施設の出入り口には電気錠によるICカードリーダーを設置し、教職員・学生は夜間の出入りに図書カードを利用し、外部からの不審者の侵入を防いでいる。

農学研究科

学部同様に、農学研究科の施設・設備の整備・運用は、農学部基本計画委員会・施設委員会で検討された基本方針に基づいて行っており、教職員及び大学院生に周知され、有効利用が図られている。特に大学院では社会人向けの特別コース（農業版 MOT 教育）を設けており、夜間に講義室を使用する（18:00～19:30, 19:40-21:10 の開講）ので、施設の管理には留意している。バリアフリー化及び安全・防犯面についても学部と同様である。

【分析結果とその根拠理由】**農学部**

農学部の目的に即した施設・設備が整備され、活用されている。圃場の有効活用や衛生安全面での強化がなされており、身障者の学習等に配慮したバリアフリー化が進められている。

農学研究科

農学研究科も学部と同様である。

- | | |
|------------|--|
| 資料 3-1-1-1 | 農学部基本計画委員会規程 (https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/) |
| 資料 7-1-1-1 | 農学部施設委員会規程 (https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/) |
| 資料 7-1-1-2 | 安全の手引き（平成 29 年度、農学部安全衛生委員会発行） |
| 資料 7-1-1-3 | 新入生オリエンテーションスケジュール（平成 29 年度） |
| 資料 7-1-1-4 | 農学部共同利用スペース利用細則 (https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html) |
| 資料 7-1-1-5 | 総合分析実験センター (http://www.iac.saga-u.ac.jp/) |
| 資料 7-1-1-6 | 圃場・温室利用状況（平成 29 年度） |
| 資料 2-1-1-4 | 農学部履修の手引き（平成 29 年度）
(http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html) |
| 資料 7-1-1-7 | 農学部講義室使用状況（平成 29 年度） |
| 資料 5-1-3-3 | 佐賀大学学生便覧（平成 29 年度）(http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/binran.html) |

観点 7-1-②： 教育研究活動を展開する上で必要な ICT 環境が整備され、有効に活用されているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部では、ほぼすべての研究室、演習室、実験室にインターネットの有線 LAN 端末及び表に示す無線 LAN ポートを設けている。

学生には、入学後すぐにインターネット・アドレスが与えられ、個人用並びに図書館あるいは情報演習室に設置しているパソコンを用いて、就学に必要な情報を学内及び学外から自由に得ることができる。科目履修と学生生活に関しては、それぞれ農学部教育委員及び農学部学生委員へ直接アクセスできるメールアドレスを設けている（資料 2-1-1-4）。学生センターへは、インターネットと携帯電話からアクセスできるアドレスを設けている。

さらに、各研究室の自習スペースには研究室共通のパソコンが数台（研究室個々に台数は異なる）設置され、研究室のゼミ生がデータの整理や発表資料の作成に利用している。

農学研究科

農学研究科も ICT 整備環境は、学部と同様である。大学院演習室には、サイネットシステムがあり、大学間の研究情報などをこのネットワークを通じて交換している。特に、佐賀大学農学研究科が所属している鹿児島大学連合農学研究科の学生や教員がよく利用している。

【分析結果とその根拠理由】

農学部

教育の内容・方法や学生のニーズを満たすための情報ネットワークの整備は、おおむね達成され、教職員及び学生により有効に活用されている。

農学研究科

教育の内容・方法や学生のニーズを満たすための情報ネットワークの整備は、おおむね達成され、教職員及び学生により有効に活用されている。

資料 2-1-1-4 農学部履修の手引（平成 29 年度） http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html

観点 7-1-③： 図書館が整備され、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されており、有効に活用されているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部の図書類は、附属図書館に集中しており、独自の図書館を有していない。図書・雑誌・視聴覚資料などの整備状況については附属図書館からの報告にまかせるとして、ここでは農学部学生の利用状況について報告する。

表は、各学部の平成 29 年度の図書貸出状況及び 1 人当たりの貸出冊数（平成 23～28 年度）である。図書を借りた学生の割合は、農学部は 58% であり、前年度と比較すると 2% 下がっている。また、月別の個人の貸出冊数データを見ると、平成 29 年度の貸出総数は 3,726 冊、学生一人あたりの貸出数 5.8 冊といずれも前年度を下回っている。近年ではインターネットを活用した資料調査の機会も多いと思われるが、専門書等を用いた学習において図書館をより有効に活用することも必要と思われる。

学部学生への図書貸出状況について

■ 図書を借りた学生の割合（学部別）

H29.4月～H30.3月								
	教育学部	芸術地域 デザイン学部	文化 教育学部	経済学部	医学部	理工学部	農学部	合計
H29 図書を借りた学生数	171	151	354	434	658	946	371	3,085
H29 図書を借りた学生の割合	68%	65%	59%	38%	74%	42%	58%	51%
前年同月間の割合	62%	63%	64%	44%	81%	43%	60%	54%
（参考）過去5年間の、1年間を通して図書を借りた学生の割合								
平成28年度	62%	63%	64%	44%	81%	43%	60%	54%
平成27年度	—	—	69%	56%	77%	52%	69%	62%
平成26年度	—	—	67%	51%	75%	51%	66%	59%
平成25年度	—	—	62%	46%	76%	45%	58%	54%
平成24年度	—	—	60%	43%	78%	41%	55%	51%

平成29年度の学生数は大学運営連合部局報告用データ（5/1現在）、平成28年度以前の学生数は「佐賀大学概要」によった。

■ 1人当たりの貸出冊数（学部別）

H29.4月～H30.3月								
	教育学部	芸術地域 デザイン学部	文化 教育学部	経済学部	医学部	理工学部	農学部	合計
平成29年度貸出冊数	1,404	1,936	4,176	3,716	10,385	8,293	3,726	33,636
H29学生1人当たりの貸出冊数	5.5	8.4	7.0	3.2	11.6	3.7	5.8	5.6
前年同月間の1人当たりの貸出冊数	3.1	4.3	7.1	3.7	12.5	3.9	6.7	5.9
（参考）過去5年間の学生1人当たりの年間貸出冊数								
平成28年度	3.1	4.3	7.1	3.7	12.5	3.9	6.7	5.9
平成27年度	—	—	8.0	5.5	12.2	4.8	9.0	7.1
平成26年度	—	—	8.2	5.1	11.0	5.4	7.9	7.0
平成25年度	—	—	8.3	5.1	11.9	5.6	8.0	7.1
平成24年度	—	—	6.7	4.5	11.4	4.5	8.0	6.2

（出典：佐賀大学附属図書館）

農学研究科

下記は、農学研究科（修士学生）の年度別貸出冊数である。こちらも、平成28年度や平成29年度と比較すると、図書の貸出数は多くなっている。

年 度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度
貸出冊数	629	415	473	472	474

（出典：佐賀大学附属図書館）

【分析結果とその根拠理由】

農学部

附属図書館からの図書の貸出冊数は、他の学部と比べると多い方であるが、だんだんと少なくなっている傾向にある。

農学研究科

農学研究科も学部と同様である。

観点7-1-④：自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部の学生が利用する主な学習スペースは、附属図書館と農学部建物内にある。

附属図書館は、授業で使う参考図書を充実し、学生用の机、パソコン等を整備している（資料 5-2-4-2）。

農学部の建物内には、学生が自由に使える学習机と椅子を備えた学生専用スペースを設けており、自習スペースには十分な机、椅子、書籍などを整備している。（資料 5-2-4-3）。

また、農学部 1 号館南棟 1 階の学生コミュニケーションスペースにおいて、パーティション及び空調設備が設置され、学生の自習スペースとして、特に夏季と冬季の利用における学習環境が改善されている。

農学研究科

学部と同様であるが、農学研究科では、配属された分野毎あるいは研究室毎に院生用の机を整備し、複数教育分野では、院生専用の演習室を確保し、各部屋にはパソコンを設置している。これらのパソコンは、院生が自主学習に活用している。

【分析結果とその根拠理由】

農学部

農学部の学生のための自主的学習環境は、主に、附属図書館、総合情報基盤センター（資料 7-1-4-2）及び農学部建物において整備されている。パーティション及び空調設備の設置等、一部の学生コミュニケーションスペースの環境整備も行われ、効果的に活用されていると判断される。

農学研究科

農学研究科の学生のための自主的学習環境も、学部と同様に、附属図書館、総合情報基盤センター及び農学部建物において整備されている。学生の利用状況から判断して、効果的に活用されていると判断される。

資料 5-2-4-2 附属図書館利用規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 5-2-4-3 農学部建物平面図

資料 7-1-4-2 総合情報基盤センター利用規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

7-2 学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること

観点 7-2-①：授業科目、専門、専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部教育委員会は、授業科目や専門、専攻の選択の際のガイダンスを、1年次最初のオリエンテーション時や前学期終了時、コース分属・分野分属時などに実施している。また、各学科・講座等の具体的な教育研究内容、教員組織等の具体的な内容は、佐賀大学農学部・農学研究科概要（資料 4-2-1-1）に記し、詳しく説明している。さらに、チューター（担任）が、学生一人一人と、各学期開始時に面談を行い、履修状況を確認する事で、履修の間違いによる進学の遅れや、学修目標の未達を防ぐ様に努力している。

また、各授業科目に関しては、教員相互でシラバスを点検し、必要事項が盛り込まれているか、第三者の目でチェックするシステムを採用している（資料 7-2-1-1 シラバス点検表）。これにより授業の到達目標や評価の方法に関して学生が必要な情報をシラバスから確実に得られるように充実させている。

農学研究科

農学部大学院教育委員会を中心として、学生に対して年数回のガイダンスを行っている。具体的には、研究科の入学生を対象として、冊子体の大学院履修案内（資料 2-1-3-2）及び佐賀大学農学部・農学研究科概要（資料 4-2-1-1）を配布し、これに沿って、教育研究内容、教員組織、履修モデル、授業科目の選択、受講方法、履修方法、修了認定基準及び学位授与等について説明している。農学研究科の各授業科目に関しても、教員相互でシラバスを点検し、必要事項が盛り込まれているか、第三者の目でチェックするシステムを採用している（資料 7-2-1-1 シラバス点検表）。

また、個別な取り組みとして、各教育研究分野の指導教員は、分野所属の学生と共に、2年間の履修計画を立て、マンツーマンで学修（履修）を指導し、指導の点検・評価を行っている（資料 2-1-3-2、資料 5-5-6-1）。さらに、他大学からの入学者に対し、教員は必要に応じて、個別に特別の指導（補完的な教育や研究方法の指導）を実施している。

資料 4-2-1-1 佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要（平成 29 年度）

(http://www.ag.saga-u.ac.jp/pdf/nogakubu_gaiyo.pdf)

資料 2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/wp-content/uploads/2014/03/tebiki-h28-nouin.pdf>)

資料 5-5-6-1 研究指導実施報告書

資料 7-2-1-1 シラバス点検表

【分析結果とその根拠理由】

農学部

オリエンテーション時などのガイダンス実施状況、チューターによる履修指導、シラバス内容の教員相互点検体制の実施等から、授業科目や専門、専攻選択の際のガイダンスは十分適切に実施されていると判断される。

農学研究科

2年間の履修計画を立てる際に、指導教員が学生に対してマンツーマンで学修（履修）方法を指導するなど、授業科目や専門、専攻の選択の際のガイダンス体制は適切である。

観点 7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部では、全ての学生に対しチューターを定め、教育委員及びチューターが学生に対して適宜、学修相談、助言、支援を行っている（資料 7-2-2-1）。また、農学部ホームページにも在学生対象の履修方法などに関する質問コーナー（資料 7-2-2-2）を設け、農学部の全教員がオフィスアワーを設定し（資料 5-2-4-1）、学修相談・助言体制を整えている。さらに、学生委員会では平成 23 年度からのラーニング・ポートフォリオの実施を行っている。各学期にチューターは担当学生と面談し、ラーニング・ポートフォリオを活用しながら、学修相談、支援のニーズを積極的に把握するよう努めている。

特別な支援が必要と考えられる学生へは、チューターだけではなく、専門的な知識とスキルを持つ、集中支援室、保健管理センター、キャンパスソーシャルワーカー等の学内支援システムとチーム体制を整え対応している。

農学研究科

農学研究科では学修支援に関する学生のニーズについて、大学院教育委員会を中心に組織的に把握・分析し、助言、支援を行っている。また、農学部ホームページにも在学生対象の履修方法などに関する質問コーナー（資料 7-2-2-2）を設け、さらに農学部の全教員がオフィスアワーを設定し（資料 5-2-4-1）、学修相談・助言体制を整えている。各教育研究分野の指導教員は、ポートフォリオ学習支援統合システムを用いて、研究指導計画、研究実施報告、研究経過の点検・評価・助言を学生に明示し学修支援効果を高めている（資料 5-5-6-1）。同時に、これらを複数の指導教員で確認する体制をとっている（資料）。

資料 7-2-2-1 平成 29 年度チューター名簿

資料 7-2-2-2 佐賀大学農学部ホームページ（在学生向け情報）

(<http://www.ag.saga-u.ac.jp/japanese/student/student.html>)

資料 5-5-6-1 研究指導実施報告書

資料 5-2-4-1 オフィスアワー一覧

(<https://lc2.sc.admin.saga-u.ac.jp/portalUI/html/shibbolethStart.htm>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

全学生にチューターを定め、個々の学生からニーズを汲み上げ、教育委員会とチューターを中心に適切な学修相談、助言、支援ができる体制を整えている。また、教育委員会ではティーチング・ポートフォリオの積極的な運用もなされ、学修支援は適切に実施されている。

農学研究科

大学院教育委員会を中心として、農学部ホームページにも在学生対象の質問コーナーを設けるなど、組織的に学生のニーズを適切に把握するため、適切な学修相談、助言、支援体制を整えている。農学研究科では学修支援体制などに係る個別指導が行き届いていると思われる。

観点 7-2-③： 通信教育を行う課程を置いている場合には、そのための学習支援、教育相談が適切に行われているか。

【観点に係る状況】

該当なし

【分析結果とその根拠理由】

該当なし

観点 7-2-④： 学生の部活動や自治会活動等の課外活動が円滑に行われるよう支援が適切に行われているか。

【観点到係る状況】

一部の農学部の教員が部活動の団体の顧問を担当し、学生の部活動や課外活動の支援を行っている（資料 7-2-4-2）。

資料 7-2-4-2 学生団体の顧問教員（農学部）

【分析結果とその根拠理由】

一部の農学部の教員が部活動等の団体の顧問を担当し、学生の部活動や自治会活動等の課外活動が円滑に行われるよう支援が適切に行われている。

観点 7-2-⑤： 生活支援等に関する学生のニーズが適切に把握されており、生活、健康、就職等進路、各種ハラスメント等に関する相談・助言体制が整備され、適切に行われているか。また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への生活支援等を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて生活支援等が行われているか。

【観点到係る状況】

農学部

学生委員会委員、教育委員会委員、チューター、卒論指導教員、学生生活課職員、農学部教務係職員を含む全ての教職員が、学生のニーズの把握と対応に努めている。全ての教員はオフィスアワーを設定し、一般学生、留学生、社会人、障害を有する学生からの多岐にわたる相談に対応している（資料 7-2-5-1）。

新入生から、教育研究分野への分属が決まるまでの学生については、チューター（担任）が相談役を務めている。各チューターは、約 10 人の学生の相談役となり、学期毎に、個人面談を行うことにより、課題を抱えている学生を把握し、対応している。面談日時等は、個別のメールや掲示等により、学生へ周知している。教育研究分野へ分属した学生については、卒論指導教員が対応している。ハラスメントについては、ハラスメント相談委員が主として対応している。ハラスメントの場合は、被害者が直接相談委員に申し立てを行う事が困難な場合も予想される。そのような学生への対応として、ハラスメントに関する相談の手紙を投函するボックスを設け、申し立てを行う心理的なハードルを下げる努力も行っている。

農学部の留学生、社会人入学生、編入学生、障害のある学生など、特別に支援が必要な学生の入学に備えて、留学生担当専門教員、教育委員会委員、学生委員会委員を配置して、学修支援体制を整えている。留学生については、学生チューター制をとり、学修と生活支援を実施している。

農学研究科

学生の進路・生活面・健康（精神面）及び定期的健康診断などについては、主に、所属研究室の指導教員、学生センターの相談窓口、農学部ホームページの相談窓口（資料 7-2-2-2）及び佐賀大学保健管理センターで対応している。また、佐賀大学学生支援室では、適切な学生の指導法を書いたチューター制度ガイドブック（資料 7-2-5-2）を発行し、教員に配布している。

留学生の場合には、日本の学生による学生チューター制（資料 7-2-5-3）を実施し、生活支援体制を整えている。また、農学研究科では、留学生専門講師を配置し、講義（資料 2-1-3-2）を通じ

て留学生の進路及び生活面などに関して支援している。

ハラスメントについては、農学研究科（農学部）では、女性の相談員を含め2人を配置している。入学時にハラスメント防止に関するパンフレット（資料7-2-5-4）を配布し、入学ガイダンス時に説明している。また、入学後も学内で開催されるハラスメントや人権に関する講習会について周知している。

平日の労働時間帯に受講できにくい社会人学生に対しては、夜間開講あるいは集中講義を行う体制を取っている。なお、基礎教育が必要とされる社会人に対する補習教育については、大学院教育委員会、学生委員会が適宜、あるいは指導教員が個別に対応している。

資料7-2-5-1 教員報告様式【佐賀大学ホームページ（職員向け掲示板）】

(<http://www.saga-u.ac.jp/gakunai/syokuinyou.htm>)

資料7-2-2 佐賀大学農学部ホームページ（在学生向け情報）

(<http://www.ag.saga-u.ac.jp/japanese/student/student.html>)

資料7-2-5-2 チューター（担任）制度ガイドブック（佐賀大学学生支援室）

資料7-2-5-3 チューターの手引き（佐賀大学国際課）

資料2-1-3-2 大学院農学研究科履修案内（平成29年度）

(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html>)

資料7-2-5-4 セクハラ・アカハラ・パワハラとは？（同和・人権問題委員会）

【分析結果とその根拠理由】

農学部

学生のニーズ把握と、ハラスメント等の問題が生じた場合の体制は整備され、機能している。また、農学部の各種委員会及び関係教員が、特別な支援が必要な者への学修相談、助言を適切に実施していると判断される。

農学研究科

学生の健康、生活、進路面については、指導教員をはじめ学生センター、学生支援室及び保健管理センターなどで二重、三重に支援体制を整えている。ハラスメントの対応についてもパンフレットの配布、ガイダンス及び講習会などで周知すると同時に、相談・助言体制が整備され、適切に機能している。留学生については、学修内容に対応して、留学生担当講師あるいは日本人の学生が学修支援を、社会人学生に対しては、夜間開講科目や集中講義を用意するなど、制度的な教育支援を行っている。また、各種委員会及び関係教員が、個別に学修相談や助言を適切に行っているなど、支援体制は適切である。

観点7-2-⑥： 学生に対する経済面の援助が適切に行われているか。

【観点に係る状況】

農学部

下記のとおり各種の奨学金を受給している。奨学金等に関する情報は、ホームページ（資料7-2-6-1）や掲示により、学生に周知している。

農学部からの奨学生の推薦にあたっては、成績等の基準により、学生委員会が厳正に順位付けを行った上で、上位者から推薦している。

日本学生支援機構以外の奨学金受給一覧

平成28年度	平成29年度
中董奨学金 1名（院生）	長崎県育英会 1名（学部生）
岡田甲子男記念奨学財団 1名（学部）	岡田甲子男記念奨学財団 2名（学部）

生) 長崎県育英会 2名 (学部生) コカコーラ教育・環境財団 1名 (学部生) 出水市 1名 (学部生)	生) 出水市教育委員会 1名 (学部生)
--	-------------------------

農学研究科

佐賀大学の大学院生の経済支援体制として、授業料免除（半免を含む。）と奨学金制度があり、これらの窓口には佐賀大学学生センターが対応し、ウェブ上に掲載して、広く周知している（資料 7-2-6-1、資料 7-2-6-2）。農学部学生委員会では、大学院生の奨学生選考の順位を付け、全学学生委員会（資料 7-2-6-3）に報告している。全学学生委員会では、厳正な審議を行い、大学院生の授業料減免者及び奨学生の候補者を決定している。また、農学研究科では、奨学金返還免除者申請に関する定め（資料 7-2-6-4）を整備しており、概要を入学時のガイダンスで周知している。

資料 7-2-6-1	授業料免除ホームページ (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/kezai.html)
資料 7-2-6-2	奨学金ホームページ (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/syougakukin.html)
資料 7-2-6-3	農学部学生委員会規程 (https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/)
資料 7-2-6-4	農学研究科学資金返還免除候補者選考についての申合せ（農学部学生委員会） (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/01/86a167dd47c9c0633ff6c2adcdb3be50.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

学生に対する経済的支援（奨学金）の順位付けは、農学部学生委員会と学生生活課が適切に実施している。

農学研究科

経済的支援体制として、農学研究科学生を対象とした授業料減免制度及び奨学生制度・奨学金返還免除制度を設けており、これらの選考制度が整備され、機能している。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

農学部及び農学研究科では、学生の利用状況や実態調査等から判断して、教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備、また学生支援体制が整備されている。

【改善を要する点】

温室・圃場の利用状況を調査し、次年度の利用申請書の提出に基づき、学長裁量圃場としての利用について、法人と協議し、平成29年10月24日付け学長制定により、本庄および久保泉キャンパスの圃場と温室が「学長裁量圃場等」の対象となり、利用希望者は学長に対して利用に関する申請書を提出することになったために、次年度からの運用を円滑にするために手順等を整備する。

(3) 基準7の自己評価の概要

農学部及び農学研究科では、学生の利用状況や実態調査等から判断して、教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備、また学生支援体制が整備されている。学生支援体制に関しては、順次学生の学習環境の改善を行う等、概ね有効に機能していると思われる。

基準 8 教育の内部質保証システム**(1) 観点ごとの分析**

8-1 教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能していること。

観点 8-1-①： 教育の取組状況や大学の教育を通じて学生が身に付けた学習成果について自己点検・評価し、教育の質を保証するとともに、教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

【観点に係る状況】**農学部**

教員の教育活動の実態を示す資料（講義ノート、スライドファイル、講義に使用した資料等、学生の出席状況、試験問題、レポート課題、答案、レポート、成績結果、卒業研究等）は、各教員が責任をもって保管・蓄積している。これらの資料に基づく教育活動の実態は、農学部教育研究業績総覧及び農学部自己点検・評価報告書として取りまとめ、公開している（資料 3-2-2-2, 6-1-1-1）。

農学研究科

教員の講義ノート、学生の出席状況、試験問題、レポート課題、答案、レポート、模範解答、成績結果、修士論文等の教育活動の実態の根拠となる原資料については、各教員が責任をもって保管・蓄積している。

農学研究科担当教員の全般にわたる教育（研究）活動の実態を平成 17 年度まで 3 年毎に農学部教育研究業績総覧として取りまとめていたが、平成 18 年度以降は佐賀大学農学部自己点検・評価報告書（資料 8-1-1-1）さらに教員活動データベース（資料 8-1-1-2）として毎年取りまとめ、農学部事務部や大学事務部が管理している。

資料 8-1-1-1 佐賀大学農学部自己点検・評価報告書（平成 22～28 年度）

<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>

資料 8-1-1-2 佐賀大学教員活動データベース

[http://research.dl.saga-](http://research.dl.saga-u.ac.jp/search/index.html?lang=ja&template=template1)

[u.ac.jp/search/index.html?lang=ja&template=template1](http://research.dl.saga-u.ac.jp/search/index.html?lang=ja&template=template1)

【分析結果とその根拠理由】**農学部**

教育の活動実態を示すデータや資料の収集・蓄積及びその組織的な集計がなされ、農学部事務部や大学事務部が適切に保管・管理している。

農学研究科

教育の状況について、活動の実態を示すデータや資料を研究科担当教員や附属図書館などで、収集・蓄積・管理しており、それらの組織的な集計については研究業績総覧や自己点検・評価報告書などに取りまとめ、農学部事務部が適切に保管・管理している。

観点 8-1-②： 大学の構成員（学生及び教職員）の意見の聴取が行われており、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。

【観点に係る状況】**農学部**

「学生による授業評価」の集計結果とアンケート用紙の原票は教員へ返却され、或いは LiveCampus コミュニケーションポータルシステムから閲覧することができ、授業改善に活用されている（資料 5-2-3-1 及び資料 5-5-1-1）。農学部を含む全学部の授業評価を取り纏めた授業評価報告書には、集計・比較・分析された各評価項目のデータを記している（資料 3-2-2-6）。この分析結果を見ることにより、教員は担当科目についての相対的評価を知り、授業改善に活用可能である。また、ポートフォリオ学習支援システムのラーニングポートフォリオ（LA）を用いて学生の意見を聴取しており、教育の質の改善を行っている。

大学教育委員会のFD専門委員会は、授業改善に資するため、授業評価の結果の活用（フィードバック）に関する先進事例等を紹介している。農学部FD専門委員会は、全学的なFD活動と連携しながら、教育の質的改善に向けた活動（講演会等）を実施している（資料 3-2-2-5）。

農学研究科

大学院の全講義において授業評価が実施され（資料 5-2-3-1 及び資料 5-5-1-1）、この集計結果については、研究科ごとに集計・比較・分析し、評価項目に対する講義の相対的評価を個々の担当教員に通知し、これを参考に翌年に向けた授業の改善点などを各教員がウェブ入力し、ホームページで公表している（資料 5-5-1-1）。また、ポートフォリオ学習支援システムのラーニングポートフォリオ（LA）を用いて大学院生の意見を聴取しており、教員の計画指導や学生の実施報告から教育の質の改善を行っている。

大学院生の主指導教員が大学院生毎に指導報告書を半期毎に作成するだけでなく、授業点検・改善報告書も作成し、教育と指導の質的改善に向けた活動を行っている（資料 8-1-2-1 各教員の指導報告書と授業点検・改善報告書）。また、平成 18 年度には大学教育委員会と高等教育開発センターでは、教職員にもアンケートを行い、オフィスアワーの設置意義やFD講演会の参加回数あるいは学生の授業評価の利用方法などを質問しており、これらのデータを基に教員の教育の質の向上や改善を行っている。

資料 5-2-3-1 授業評価アンケート実施基準 (<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

資料 3-2-2-6 平成 29 年度授業評価報告書（農学部・農学研究科）

資料 5-5-1-1 佐賀大学ホームページ（Live Campus）
(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/livecampus.html>)

資料 3-2-2-5 平成 29 年度FD活動報告書

資料 8-1-2-1 各教員の指導報告書と授業点検・改善報告書（教務課一括所有）

【分析結果とその根拠理由】

農学部

学生による授業評価、FD活動等が行われ、学生及び教員からの意見聴取を踏まえ、教育の質の向上に反映させている。

農学研究科

大学教育委員会と全学教育機構高等教育開発室では、大学院生による授業評価を毎年行い、また教職員にも教育に関する重要な事柄についてアンケートを行い、これらの結果を教員の授業改善及び教育全般にわたる改善に利用しており、大学の構成員の意見が教育の質の向上・改善に向けて継続的に適切な形で活かしている。

観点 8-1-③： 学外関係者の意見が、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。

【観点到係る状況】

農学部

学外関係者の意見は、学生の保護者、後援会、同窓会会員、学部卒業生の採用企業、外部評価委員等から得ており、教職員の意識改革と教育の質的向上・改善に活用している。

農学部後援会総会を毎年開催し、保護者に対する教育活動報告と意見交換を行っている。意見交換を通して得られた要望等は、学科会議や学部運営会議で検討し、教育活動へ反映している。農学部同窓会総会には、学部長、副学部長、学科長等が出席し、農学部における教育活動の報告と、卒業生からの意見聴取を行い、その結果を教育活動へ反映している。農学部卒業生の就職先に対するアンケート調査及び就業している卒業生を毎年 5～6 名招き就職ガイダンスを開き、同時に意見収集を農学部就職委員会が実施している。卒業生に対する社会の評価を学部教育へ反映させるために、報告書を作成し、各教員へ周知している。毎年実施する農学部自己点検・評価において、学外評価委員からの意見を聴取し（資料 8-1-1-1）、農学部教育委員会や学部運営会議で検討し、教育活動の改善に活用している。

農学研究科

農学部就職委員会においては、平成 20 年度に修了生の就職先へアンケート調査を実施し、修了生に対する社会の評価を教育活動へ反映させるための報告書を作成・配布し、各教員へ周知した。

毎年農学部後援会総会を開催し、大学院生の保護者へ教育活動の報告を行い、保護者との意見交換の際、出てきた要望等を専攻会議や学部運営会議で検討し、教育活動へ反映させている。さらに、農学部自己点検・評価報告書（資料 8-1-1-1）について、学外評価委員からの意見を聴取し、学部教育委員会や学部運営会議で検討し、教育活動へ反映させている。

資料 6-2-2-1 卒業生・修了生に関するアンケート結果報告書（平成 26 年度）

資料 8-1-1-1 佐賀大学農学部自己点検・評価報告書（平成 22 年～28 年度）

(<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>)

【分析結果とその根拠理由】**農学部**

学外関係者から聴取したアンケートでは、本学部卒業生の企業における評価は比較的良好であった。企業アンケート調査による意見を参考とし、教育の改善に活用するなど、学外関係者の意見が教育の質の向上、改善に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされている。

農学研究科

会社関係者、保護者、同窓生及び卒業生などのアンケートや意見並びに農学部自己点検・評価報告書に対する学外評価委員の意見についてコース会議や学部運営会議などで検討され、教育活動へ反映されており、学外関係者の意見が、教育の質の向上、改善に適切な形で活かしている。

8-2 教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能していること。

観点 8-2-①： ファカルティ・ディベロップメントが適切に実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結び付いているか。

【観点到係る状況】**農学部**

農学部教育委員会内の F D 専門委員会を農学部ファカルティ・ディベロップメント（F D）委員会として独立させることにより、組織的な F D 活動の実施体制を強化している（資料 8-2-1-1、2-

2-1-2)。教員の教育力向上のために、農学部独自のFDセミナーを教授会前に開催し、また、教授会後に研究紹介を実施してきた。教員の出席率は高かった。「学生による授業評価」は、継続的に実施し、授業評価の結果を授業改善に利用するため、大学教育委員会が集計分析し、各学部へフィードバックしている（資料 3-2-2-6）。

農学研究科

学生による授業評価に基づいたFD活動を行うために大学教育委員会が授業評価の結果を集計分析し、検討結果を学部へフィードバックし（資料 3-2-2-5）、これらに基づいて、教員はシラバスの改善（資料 5-5-1-1）を毎年継続的に行っている。また、平成 20 年度から本研究科に佐賀大学大学院農学研究科FD委員会を設置し（資料 8-2-1-2）、この活動に関する企画・実施体制を整えている。

さらに、佐賀大学では主に全学教育機構高等教育開発室が毎年 2～3 回FD・SDフォーラムを開催し（資料 8-2-1-3）、教員へ授業評価の活用法などを教授している。さらに、毎月定期的に行われる研究科委員会の終了後、各教員がお互いの研究を紹介し、自分の専門分野以外の研究動向について勉強会を開き、これらを自らの教育研究に活かしている。

また、授業評価の結果から映像を用いた講義スタイルへの要望が強いことへの対応として、講義室にビデオ装置や動画処理が可能な液晶プロジェクターを整備し、さらに無線LANポートやLAN有線接続ポートを設け、インターネットを活用した講義を可能とするなど、教育環境の改善を行っている。

平成 25～29 年度全学教育機構高等教育開発室主催FD・SDフォーラム

開催年度	開催日	講演題目	講演者
25	5/30 (木)	ICT 活用教育支援のための情報基盤～ 広島大学に異動して感じたこと～	広島大学教授 教育学研究科 渡辺健次
25	9/13 (金)	「大学入門科目Ⅰ」の実践報告とこれから	大学入門科目のプレゼン者 文化教育学部 重藤輝行他 5 名
25	3/17 (月)	大学における学術情報基盤と図書館の 機能強化	文部科学省研究振興局参事官 (学術基盤整備室長) 長澤公洋
26	5/27 (火)	アメリカの大学との協同作業による発信型 海外研修プログラムの構築	文化教育学部 早瀬 博範
		社会人基礎力育成を目的とした学生の 主体活動の支援	全学教育機構 山内 一祥
26	7/2 (水)	授業内独自アンケートの実施と分析	農学部 和田 康彦
		同窓生の学業生活と職業	全学教育機構 村山 詩帆
26	12/9 (火)	アクティブ・ラーニングの実践と方法	九州国際大学 教授 山本 啓一
27	12/22 (月)	TB Learning チーム基盤学習の手法	高知大学 准教授 立川 明
28	9/30 (金)	大学で教える人のためのリーブリック 評価入門	大阪大学 准教授 佐藤 浩章

28	1/13 (金)	学生主体の授業デザインと運営方法	ダイナミックヒューマンキャピタル 代表取締役 中村 文子
29	9/12 (火)	学生主体の授業デザインと運営手法	ダイナミックヒューマンキャピタル 代表取締役 中村 文子

平成 23～29 年度農学部主催 F D 講演会

開催年度	開催日	講演題目	講演者
23	7/6	ティーチングポートフォリオについて	滝澤ポートフォリオ専門委員長
23	7/20 (水)	TA 研修会	鹿児島大学大学院連合農学研究科が主催 小林恒夫・長 裕幸・光富 勝連大代議員
23	10/19	ハラスメント~思いやりのない行動~	佐藤 武 教授 (佐賀大学保健管理センター長)
23	11/19	最近の大学生をどう理解し、対応するか	安田 郁 氏 (佐賀大学保健管理センター・カウンセラー)
24	8/10	TA 研修会	鹿児島大学大学院連合農学研究科が主催 長 裕幸 (農学部生物環境科学科・教授・連大代議員)
24	9/5	佐賀大学の EA21 活動の現状と課題	佐賀大学 EA21 委員
24	11/19	最近の大学生をどう理解し、対応するか	安田 郁カウンセラー (佐賀大学保健管理センター)
24	1/25	卒論・修論教育などストレス時の学生への対応及びストレス解消法	山内一祥助教 (全学教育機構特任助教)
25	6/12	佐賀大学の EA21 活動の現状及び農学部における節電対策について	農学部 安全衛生委員会 EA21 担当 近藤文義
25	7/3	T A 研修会	鹿児島大学大学院連合農学研究科が主催 稲岡 司・野間口眞太郎・石丸幹二 連大代議員
25	1/22	この時期、学生をどのように支援し、研究の進展を促すか ～ その取組方法について	山内一祥 全学教育機構 高等教育開発室
26	7/16	T A 研修会	主催 鈴木彰宏・野間口眞太郎・石丸幹二 連大代議員
26	1/14	初等教育への e ラーニング教材導入について	e ラーニングスタジオ 久家淳子氏、穂屋下先生
26	1/22	この時期、学生をどのように支援し、研究の進展を促すか、その取組方法について	全学教育機構 高等教育開発室 山内 一祥 (農学部男女共同参画推進委員主催)
27	9/9	佐賀大学における障害学生支援の現状と課題	学生支援室 中島 俊思講師

27	3/4	キャリアセンターの就職活動支援状況と学生への進路指導	キャリアセンター 森田 佐知子准教授
28	5/11	アリゾナ大学における在外教育・研究の報告	農学部 徳本 家康助教
28	7/13	陥りやすい利益相反	産学地域連携機構 安東 静客員教授
28	8/3	科研費の獲得増に向けて ～科研費制度の概要～	佐賀大学理事 門出 政則 研究協力課長 江藤 直行
28	10/12	農・水産業に悪影響を及ぼす特定外来生物等に対する佐賀市の防除対策の現状について	佐賀市農林水産部長 石井氏
28	11/9	アクティブラーニングとルーブリック評価について	全学教育機構・高等教育開発室 五十嵐 勉教授
28	2/8	国際交流推進センターにおける国際交流支援の内容	国際交流推進センター 山田 直子准教授
29	6/14	最近の大学入試の状況	アドミッションセンター 西郡 大教授
29	7/12	科研費のFD講演会	学術研究協力部URA（リサーチ・アドミニストレーター）
29	9/6	科研費に関するFD講演会	門出 政則理事
29	11/8	佐賀大学の教育実習（教員養成）の実施と課題	教員養成カリキュラム委員
29	1/18	安全保障輸出管理に関するFD講演会	リージョナルイノベーションセンター鈴木 勇次客員教授
29	2/14	ティ칭ング・ポートフォリオを利用した授業改善に関する講演会	農学部 田中 宗浩教授
29	3/6	アクティブ・ラーニングについての講和	全学教育機構 五十嵐 勉教授

資料 8-2-1-1 農学部ファカルティ・ディベロップメント委員会規程
(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

資料 2-2-1-2 農学部教育委員会規程 (<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>)

資料 2-2-1-3 農学部教育委員会議事録（平成 29 年度）

資料 3-2-2-5 平成 29 年度 F D 活動報告書

資料 3-2-2-6 平成 29 年度授業評価報告書（農学部・農学研究科）

資料 5-5-1-1 佐賀大学ホームページ（Live Campus）
(<https://lc2.sc.admin.saga-u.ac.jp/portalUI/html/shibbolethStart.htm>)

資料 8-2-1-2 大学院農学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会規程
(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

資料 8-2-1-3 全学教育機構高等教育開発室 HP (<http://www.oge.saga-u.ac.jp/development01.html>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

組織的に F D 活動が実施され、教育の質の向上や授業の改善に活用している。

農学研究科

年数回のFDセミナー開催による教員への授業評価の活用法の教育，新たな佐賀大学大学院農学研究科FD委員会の設置，授業評価に基づいた教員個々のシラバスなどの改善，映像機材などの導入による教育環境の充実など，FDが適切な方法で実施されており，組織として教育の質の向上や改善に結び付いている。

観点 8-2-②： 教育支援者や教育補助者に対し，教育活動の質の向上を図るための研修等，その資質の向上を図るための取組が適切に行われているか。

【観点に係る状況】

農学部

技術職員，ティーチング・アシスタント（TA）等は，実験，実習において，授業担当教員と連携を図りながら，教育支援を担っている。教育支援者は，実験，実習等の場において，On Job Training も受けながら，資質を向上させている。TAについては，授業担当教員による説明（事前研修）を実施している。技術職員は，資質の向上を図る目的として研修会や学会などに参加している。

農学研究科

技術職員，TA等の教育支援者や補助者は，実験，実習において授業担当教員等と密接に連携し，教育支援を行っている。技術職員には，資質の向上を図る目的で毎年研修会や学会などに参加している。また，主に大学院生が行うTAについては，佐賀大学TA運用要領に基づき（資料 8-2-2-1），教育支援のノウハウを授業担当教員が指導し，教育支援者としての資質の向上を図っている。

平成 23～29 年度の技術職員による研修例

年度	農学部・農学研究科	附属資源循環フィールド科学教育センター
平成 23	中谷技術専門職員：有機溶剤作業主任者技能講習，平成 23 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 大島技術員：平成 23 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 片山技術員：平成 23 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）	福嶋技術専門員：園芸学会平成 23 年度秋季大会ポスター発表（岡山大学），平成 23 年度全国大学附属農場協議会九州地域協議会及び技術職員研修ポスター発表（鹿児島大学），トカラヤギ系統保存のための雄ヤギ交換および打ち合わせ（鹿児島大学），平成 23 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 嘉村技術専門職員：九州地区国立大学法人等技術職員スキルアップ研修（長崎大学），平成 23 年度全国大学附属農場協議会九州地域協議会及び技術職員研修（鹿児島大学），平成 23 年度佐賀大学技術発表会口頭発表（佐賀大学） 森技術員：新たな農林水産政策を推進する実用化技術開発事業「加工用タマネギ増産に向けた技術開発」キックオフミーティング（北海道農業研究センター），新たな農林水産政策を推進する実用化技術開発事業「加工用タマネギ増産に向けた技術開発」平成 23 年度研究推進会議（鹿児島市），園芸学会平成 23 年度秋季大会ポスター発表（岡山大学），平成 23 年度園芸学会九州支部大会口頭発表（那覇市），JAS 講習会（熊本市），

		平成 23 年度佐賀大学中堅職員研修 (佐賀大学), 平成 23 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学)
平成 24	中谷技術専門職員: 平成 24 年度九州地区国立大学法人等技術専門職員・中堅技術職員研修 (佐賀大学), 平成 24 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 有田技術員: マングローブ林海外現地調査 (インドネシア, スマトラ島リアウ州スンガイアサム), 平成 24 年度佐賀大学新採用事務系職員研修 (佐賀大学), 平成 24 年度農業機械士養成研修及び大型特殊自動車免許研修 (佐賀県農業試験場および佐賀県農業大学校), 平成 24 年度佐賀大学技術発表会口頭発表 (佐賀大学) 岩吉技術員: 平成 24 年度佐賀大学新採用事務系職員研修 (佐賀大学), 平成 24 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 片山技術員: 平成 24 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学)	福岡技術専門員: 全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術員研修 (佐賀大学), 平成 24 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 嘉村技術専門職員: 全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術員研修 (佐賀大学), 平成 24 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 森技術員: 全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術員研修 (佐賀大学), 平成 24 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 山口技術員: 全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術員研修 (佐賀大学), 平成 24 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学), 平成 24 年度佐賀大学新採用事務系職員研修 (佐賀大学)
平成 25	中谷技術専門職員: 平成 25 年度九州地区総合技術研究会ポスター発表 (長崎大学), 平成 25 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 有田技術員: マングローブ林海外現地調査 (インドネシア, スマトラ島ランポン州マルガサリ), 平成 25 年度九州地区総合技術研究会ポスター発表 (長崎大学), 平成 25 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 岩吉技術員: 平成 25 年度佐賀大学フォローアップ研修 (佐賀大学), 平成 25 年度九州地区総合技術研究会 (長崎大学), 平成 25 年度佐賀大学技術発表会口頭発表 (佐賀大学)	嘉村技術専門職員: 全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術員研修 (九州大学), 平成 25 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 山口技術員: 全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術員研修 (九州大学), 平成 25 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学), 平成 25 年度佐賀大学フォローアップ研修 (佐賀大学), 鹿児島大学入来牧場技術研修 (鹿児島大学) 於保技術員: 平成 25 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学), 平成 25 年度佐賀大学新採用事務系職員研修 (佐賀大学)
平成 26	中谷技術専門職員: 平成 26 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 有田技術員: 九州雑草防除研究会第 72 回例会 (福岡県久留米市), 平成 26 年度佐賀大学フォローアップ研修 (佐賀大学), 平成 26 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学) 岩吉技術員: 九州雑草防除研究会第 72 回例会 (福岡県久留米市), 平成 26	嘉村技術専門職員: 平成 26 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学), J A S 講習会 (佐賀県鳥栖市) 佐賀県特別栽培農産物講習会 (佐賀市) 於保技術員: 平成 26 年度佐賀大学技術発表会 (佐賀大学), 佐賀県特別栽培農産物講習会 (佐賀市), 全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術院研修 (東海大学), J A S 講習会 (熊本県)

	年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）	今田技術員：平成 26 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学），J A S 講習会(熊本県) 中島技術員：平成 26 年度 新採用職員研修（佐賀大学） 枕島技術員：全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術院研修（東海大学），平成 26 年度 新採用職員研修（佐賀大学）
平成 27	中谷技術専門職員：平成 27 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学），平成 27 年度 九州地区総合技術研究会（九州工業大学） 岩吉技術員：刈払機・振動工具取扱作業安全衛生教育（キャタピラー九州株式会社佐賀支店），平成 27 年度九州地区国立大学法人等技術職員スキルアップ研修 B(九州大学)，「障がい学生支援」に関する職員研修会（佐賀大学），平成 27 年度佐賀大学技術研究会（佐賀大学），平成 27 年度九州地区総合技術研究会 in 九州工業大学（九州工業大学） 有田技術員：刈払機・振動工具取扱作業安全衛生教育（キャタピラー九州），平成 27 年度九州地区国立大学法人等技術職員スキルアップ研修（九州大学），障害学生支援に関する職員研修（佐賀大学），佐賀大学技術発表会（佐賀大学），平成 27 年度九州地区総合技術研究会（九州工業大学）	嘉村技術専門職員：平成 27 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学），佐賀県特別栽培農産物講習会（佐賀市），草刈り機・振動工具安全衛生教育（佐賀県）， 於保技術員：平成 27 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学），佐賀県特別栽培農産物講習会（佐賀市），全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術院研修（東海大学），J A S 講習会(熊本県)，農業機械化基礎研修（佐賀市） 今田技術員：平成 27 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学），全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術院研修（東海大学），佐賀県特別栽培農産物講習会（佐賀市），小型車両系建設機械（整地等）の運転特別教育（佐賀市） 中島技術員：平成 27 年度 新採用職員研修（佐賀大学），平成 26 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 枕島技術員：平成 27 年度 新採用職員研修（佐賀大学），平成 26 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 福嶋技術員：平成 26 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）

平成 28	中谷技術専門職員：平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 岩吉技術員：平成 28 年度佐賀大学技術研究会（佐賀大学） 有田技術員：平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 平嶋技術員：平成 28 年度新採用職員研修（佐賀大学），平成 28 年度 農業農村工学会 土壌物理研究部会（京都大学）ポスター発表，平成 28 年度 土壌物理学会大会（京都大学），平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）	嘉村技術専門職員：平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学），全国大学附属農場協議会（香川） 於保技術員：平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学），草刈り機・振動工具安全衛生教育（佐賀県） 今田技術員：平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）全国大学附属農場協議会（香川大学），自由研削砥石（グラインダー）特別教育（佐賀県） 中島技術員：平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）草刈り機・振動工具安全衛生教育（佐賀県）全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術院研修（宮崎大学） 椛島技術員：平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）自由研削砥石（グラインダー）特別教育（佐賀県），全国附属農場協議会九州地域協議会及び技術院研修（宮崎大学） 福岡技術員：平成 28 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）
平成 29	中谷技術専門職員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 岩吉技術員：平成 29 年度佐賀大学技術研究会（佐賀大学） 有田技術員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 平嶋技術員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学），平成 29 年度佐賀大学フォローアップ研修（佐賀大学），平成 29 年度九州地区国立大学法人等技術職員スキルアップ研修 B（佐賀大学），平成 29 年度農業農村工学会 土壌物理研究部会（北海道大学）	嘉村技術専門職員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 於保技術員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 今田技術員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 中島技術員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 椛島技術員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学） 福岡技術員：平成 29 年度佐賀大学技術発表会（佐賀大学）

(出典：農学部事務局記録)

資料 8-2-2-1 佐賀大学ティーチング・アシスタント実施規程

(<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/doc/rule/612.html>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

教育支援者の資質の向上を図る研修等の取組は適切に実施している。

農学研究科

教育支援者に対し、教育活動の質の向上を図るための研修を行い、また、佐賀大学 TA 実施規程を定め、授業補助者へ授業担当教員が教育支援のノウハウを指導するなど、資質の向上を図るための取組を行っている。

(2) 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

農学部及び農学研究科では、各種アンケート調査から、教育の状況についての点検・評価及び教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能している。

【改善を要する点】

農学部・農学研究科における教育効果を検証するために、農学部卒業または農学研究科修了後 3 年以内の OB・OG とその採用企業・官公庁の人事担当者・上司等を対象として、「佐賀大学学士力」を構成する各能力および学習満足度に関するアンケートを実施した。アンケート検証の結果、「他者と協調・協働して課題に取り組む能力がある」や「持続的に学習を続け、主体的に仕事に取り組む」など高い評価があった半面、「国際コミュニケーション力、異文化理解力がある」や「積極的でリーダーシップがとれる」での評価が低く、今後特に後者について学生の教育効果について検討が必要である。

(3) 自己評価の概要

農学部及び農学研究科では、各種アンケート調査から、教育の状況についての点検・評価及び教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能していると判断される。

基準 9 財政基盤及び管理運営**(1) 観点ごとの分析****9-2 管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能していること。**

観点 9-2-①： 管理運営のための組織及び事務組織が、適切な規模と機能をもっているか。また、危機管理等に係る体制が整備されているか。

【観点到る状況】**農学部**

農学部の管理運営は、学部長のリーダーシップの下で、教員組織と事務組織（農学部事務長、総務担当職員及びアグリ創生教育研究センター事務職員）が連携・協力しながら、任務を果たしている。なお、農学部では全学的な管理運営に係る諸規則・諸規程に加えて、独自の諸規程等を制定・整備し、農学部の管理運営に係る業務を遂行している。これら諸規程等には、制定目的、職務、委員会構成などを明記している。

管理運営に係る農学部委員会と構成員（平成 29 年 4 月現在）

委員会等の名称	構成員
学部運営会議	学部長，副学部長（3），学科長（3），アグリ創生教育研究センター長
農学部基本計画委員会	副学部長（1），学科選出教員（6）
農学部予算委員会	副学部長（1），学科選出教員（3）
農学部人事委員会	学科選出教員（6）
農学部中期目標・中期計画実施本部	学部長，副学部長（3），学科長（3），アグリ創生教育研究センター長，事務長
農学部施設委員会	副学部長（1），大学施設マネジメント委員会委員（1），基本計画委員会委員（2），学部長指名者（1）
農学部中期目標・中期計画実施本部作業部会	副学部長（3），関係委員会委員（6），総務係長
農学部安全衛生委員会	副学部長（1），講座選出委員（7），センターの衛生推進者（2），農学部技術職員（1），センター技術職員（1），総務係長
アグリ創生教育研究センター運営委員会	センター長，学科選出委員（3），センター長が必要と認めた者（3），センター専任教員（5）

農学部の管理運営に関する主な規則・規程等（平成 29 年 4 月現在）

全般	農学部規則，農学部教授会規程，農学部運営会議規程，農学部副学部長に関する規程（選考規程），農学部事務分掌規程，農学部学科長規程（選考規程），農学部基本計画委員会規程，教育研究分野の新設及び改廃の手続きについて，
評価	農学部中期目標・中期計画実施本部規程
人事	農学部長候補者選考規程，農学部人事委員会内規，人事委員会申合せ，農学部の人事に関する申合せ，教員の特別昇給候補者選考実施要領

予算	農学部予算委員会規程，学部・大学院修士課程予算配分方法，特別設備の維持費及び研究基盤支援促進経費並びに外部研究資金から光熱費等としての振替に関する申合せ
施設・安全管理	農学部施設委員会規程，農学部施設点検・評価実施細則，農学部安全衛生管理規程，農学部安全点検実施要領，農学部安全衛生委員会廃棄物処理専門部会内規，農学部防火管理委員会内規
附属センター	農学部附属アグリ創生教育研究センター規程，農学部附属アグリ創生教育研究センター長選考規程

農学部の運営に関する重要事項は，農学部長（農学研究科長を兼務）を議長とする農学部教授会で審議し，教授会構成員全員が，全学部的あるいは全学的な視野に立った学部運営を行っている。教授会の審議を実質化させ，円滑な運営を行うために，学部運営会議（学部長，副学部長，学科長，アグリ創生教育研究センター長の 8 人で組織），学科会議及び各種委員会等が設けられている。委員会の構成，責務，権限等は委員会規程等に明記されている。

農学部の管理運営責任者である農学部長の候補者の選考は，佐賀大学農学部長候補者選考規程に定めている。学部長候補者選挙管理委員会の管理の下で実施される学部長候補者の選挙結果に基づいて，教授会で審議し，学部長候補者を学長に推薦する。佐賀大学学部長選考規則に基づいて，当該学部からの推薦を受けて，学長が学部長を選考する。学部長は，教員選考委員会に出席して意見を述べることができ，学部の人事計画について方針を示すことができる。

副学部長の 1 人は教育研究評議員を充て，2 人は学部長が指名し，学科長は，学科構成員による選挙で選出され，学科を代表し，学科の運営及び学科における教育研究活動に関する事項を処理している。

危機管理のために，「非常事態発生時（勤務時間外）の緊急連絡網」を定め，教職員と学生へ周知している。緊急事態の発生を未然に防止するための実務は，専門知識を持つ教員を含む農学部安全衛生委員会（委員長は副学部長），農学部安全衛生委員会廃棄物処理専門部会等が担当している。

農学研究科

農学研究科の管理運営は，研究科長（学部長兼任）のリーダーシップの下で，教員組織と事務組織（農学部事務長と総務担当職員）が連携・協力しながら，任務を果たしている。農学部には，管理運営に関係する委員会として，管理運営を含む重要事項について検討するための組織である学部運営会議（学部長，副学部長，学科長，アグリ創生教育研究センター長の 8 人で組織）をはじめ，農学部予算委員会，農学部基本計画委員会，農学部人事委員会，農学部中期目標・中期計画実施本部，農学部施設委員会，農学部安全衛生委員会，アグリ創生教育研究センター運営委員会を設置しているが，これらの委員会は農学研究科の管理運営に関わる事項についても審議し，管理運営に係る事項は，研究科委員会において周知されている。

研究科委員会は，研究科を担当できる資格を持つ教授（27 人），准教授（24 人）及び講師 1 名により構成している（平成 29 年 4 月現在）。研究科委員会は，各種委員会委員の選出や，その他の運営に関する事項の審議を行っている。なお，農学研究科の管理運営に関する方針は学部の方針を準用し，各委員会委員は学部と兼務し，効率化を図っている。

危機管理のために，「非常事態発生時（勤務時間外）の緊急連絡網」を定め，教職員と大学院生へ周知している。緊急事態の発生を未然に防止するための実務は，農学研究科においても効率化を図るために農学部安全衛生委員会（委員長は副学部長），農学部安全衛生委員会廃棄物処理専門部会等が担当している。

【分析結果とその根拠理由】

農学部

農学部の管理運営の組織と事務組織は、適切な規模となっており、適切に機能している。また、農学部の管理運営に関する諸規程が整備されて、管理運営に関わる委員会等を設置し、委員会等の責務、権限、委員選考方法等を文書として明確に定めている。危機管理のために、「非常事態発生時（勤務時間外）の緊急連絡網」を定め、教職員と学生へ周知しており、適切に機能している。

農学研究科

農学研究科の管理運営の組織と事務組織は、適切な規模となっており、適切に機能している。研究科委員会規程に基づいて、研究科委員会が招集され、農学研究科の管理運営について審議決定し、研究科の運営が行われている。管理運営に関わる委員会等の責務、権限、委員選考方法等を明確に定めている。危機管理のために、「非常事態発生時（勤務時間外）の緊急連絡網」を定め、教職員と学生へ周知しており、適切に機能している。

なお、農学研究科の管理運営に関する方針は学部の方針を準用し、各委員会委員は学部と兼務し、業務等の効率化を図っている。

観点9-2-②：大学の構成員（教職員及び学生）、その他学外関係者の管理運営に関する意見やニーズが把握され、適切な形で管理運営に反映されているか。

【観点に係る状況】

農学部

教職員のニーズは、各種学内委員会、学科会議等を介して把握されている。この際、教育研究分野レベルのニーズも把握できるように配慮している。

学生のニーズは、多様なチャンネルを介して、把握している。学生生活については、学生委員会と学生生活課、修学については、教育委員会と教務課がニーズ（課題）を把握している。チューター（担任）を含む全教員は、学生（卒業生を含む。）並びに保護者（農学部後援会会員）のニーズ把握に努めている。

学外者からのニーズは、卒業生の就職先企業、地元佐賀県関係、外部評価委員を通して把握している（資料6-2-2-1）。また、自己点検評価報告書を作成し、外部評価委員に農学部の管理運営についての意見も求めている（資料8-1-1-1）。

農学部教職員、学生、学外者のニーズは、農学部あるいは各学科で検討し、管理運営に活かしている。

農学研究科

教職員のニーズは、各種学内委員会、専攻会議、研究科委員会等を介して把握されている。教育研究分野レベル及び個人レベルのニーズも把握できるように配慮している。

大学院生のニーズは、アンケート調査（資料6-1-2-1）や面談を通して把握している。学習については、教育委員会と教務課がニーズ（課題）を把握している。指導教員を含む全教員は、大学院生（修了生を含む。）並びに保護者（農学部後援会会員）のニーズ把握に努めている。

学外者からのニーズは、修了生の就職先企業、地元佐賀県関係、外部評価委員を通して把握している（資料6-2-2-1）。また、自己点検評価報告書を作成し、外部評価委員に農学研究科の管理運営についての意見も求めている（資料8-1-1-1）。

農学研究科教職員、大学院生、学外者のニーズは、農学研究科あるいは各専攻で検討し、管理運営に活かしている。

資料 8-1-1-1 佐賀大学農学部自己点検・評価報告書（平成 22～26 年度）

(<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>)

資料 6-1-2-1 修士学生対象アンケート（平成 29 年度）

資料 6-2-2-1 卒業生・修了生に関するアンケート結果報告書（平成 26 年度）

【分析結果とその根拠理由】

農学部

各種委員会やアンケート等を通じて、農学部内外のニーズを把握し、それらの結果が適切な形で農学部の管理運営に反映されている。

農学研究科

各種委員会やアンケート等を通じて、農学研究科内外のニーズを把握し、それらの結果が適切な形で農学研究科の管理運営に反映されている。

観点 9-2-③： 監事が置かれている場合には、監事が適切な役割を果たしているか。

【観点に係る状況】

該当なし

【分析結果とその根拠理由】

該当なし

観点 9-2-④： 管理運営のための組織及び事務組織が十分に任務を果たすことができるよう、研修等、管理運営に関わる職員の資質の向上のための取組が組織的に行われているか。

該当なし

【分析結果とその根拠理由】

該当なし

9-3 大学の活動の総合的な状況に関する自己点検・評価が実施されているとともに、継続的に改善するための体制が整備され、機能していること。

観点 9-3-①： 大学の活動の総合的な状況について、根拠となる資料やデータ等に基づいて、自己点検・評価が行われているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部の自己・点検評価は、農学部中期目標・計画実施本部（構成：学部長、副学部長、学科長、附属アグリ創生教育研究センター長、事務長）が、教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営及び施設の 5 つの領域について、教育研究等に関する教員のデータベース等に基づいて実施している（資料 3-2-2-1）。自己点検・評価の結果は、冊子として発行し、公開している（資料 8-1-1-1）。また、評価報告書はウェブサイト上でも閲覧することができる（資料 9-3-1-1）。

農学研究科

農学研究科の自己・点検評価は、農学部中期目標・計画実施本部（構成：学部長、副学部長、学科長、附属アグリ創生教育研究センター長、事務長）が、教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営及び施設の 5 つの領域について、教育研究等に関する教員のデータベース等に基づいて実施している（資料 3-2-2-1）。自己点検・評価の結果は、冊子として発行し、公開している（資料 8-1-1-1）。また、評価報告書はウェブサイト上でも閲覧することができる（資料 9-3-1-1）。

資料 3-2-2-1 農学部中期目標・中期計画実施本部規程

(<https://www.sso.cc.saga-u.ac.jp/ag/rule/rule.html>)

資料 8-1-1-1 佐賀大学農学部自己点検・評価報告書（平成 22～27 年度）

(<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>)

資料 9-3-1-1 佐賀大学ホームページ（大学評価について）

(<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

大学（法人）が実施する自己点検・評価に加えて、教育研究等に関する教員のデータベース等に

基づいて農学部独自の自己点検・評価がなされ、その結果は公表されている。

農学研究科

大学（法人）が実施する自己点検・評価に加えて、教育研究等に関する教員のデータベース等に基づいて農学研究科独自の自己点検・評価がなされ、その結果は公表されている。

観点 9-3-②： 大学の活動の状況について、外部者（当該大学の教職員以外の者）による評価が行われているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部の自己・点検評価は、農学部中期目標・中期計画実施本部が実施し、外部評価委員による検証を受けている。5 領域（教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営、施設）について実施された平成 27 年度の自己点検・評価については、外部評価委員による検証結果を、平成 29 年 3 月に得た。自己点検・評価と外部評価の結果は冊子として取りまとめられ、公表した（資料 8-1-1-1, 9-3-1-1）。冊子は、学部改善に資するため、農学部教員と関係教職員へ配布した。

農学研究科

農学研究科の自己・点検評価は、5 領域（教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営、施設）について農学部中期目標・中期計画実施本部が実施し、外部評価委員による検証を受けている。平成 27 年度の自己点検・評価については、外部評価委員による検証結果を、平成 29 年 3 月に得た。自己点検・評価と外部評価の結果は冊子として取りまとめられ、公表した（資料 8-1-1-1, 9-3-1-1）。冊子は、研究科の改善に資するため、農学研究科教員と関係教職員へ配布した。

資料 8-1-1-1 佐賀大学農学部自己点検・評価報告書（平成 22～28 年度）
(<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>)

資料 9-3-1-1 佐賀大学ホームページ（大学評価について）
(<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部

自己点検・評価した結果について、学外者による検証は実施されている。

農学研究科

自己点検・評価した結果について、学外者による検証は実施されている。

観点 9-3-③： 評価結果がフィードバックされ、改善のための取組が行われているか。

【観点に係る状況】

農学部

評価の結果明らかになった問題点は、学部運営会議、学科会議、学部教育委員会等で検討するとともに、改善が必要な事項等を、教授会等を通じて教員へ周知し、学部教育の質の向上のために活用している（資料 8-1-1-1）。

農学研究科

評価の結果明らかになった問題点は、研究科委員会、大学院教育委員会小委員会、学部運営会議

等で検討するとともに、改善が必要な事項を、研究科委員会等を通じて教員へ周知し、大学院教育の質の向上のために活用している（資料 8-1-1-1）。教育の質の向上・改善を図るために必要な抜本的な事項については、基本計画委員会で検討している。

資料 8-1-1-1 佐賀大学農学部自己点検・評価報告書（平成 22～28 年度）
<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>

【分析結果とその根拠理由】

農学部

評価結果のフィードバック・システムが整備され、学部の管理運営及び教育研究体制等の改善に活用している。

農学研究科

評価結果のフィードバック・システムが整備され、研究科の管理運営及び教育研究体制等の改善に活用している。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

- 1 管理運営のための組織及び事務組織は、適切な規模を有し、危機管理等に係る体制も整備され、これらは適切に機能している。
- 2 農学研究科の管理運営に関する方針は、学部の方針を準用し、各委員会委員は学部と兼務し、管理運営業務等の効率化を図っている。
- 3 各種委員会やアンケート等を通じて得られた農学部・農学研究科内外の管理運営に対するニーズ等を適切に把握し、それらの結果を教授会・研究科委員会等を通じて教職員に周知し、農学部の管理運営に反映させている。
- 4 学部及び研究科の自己点検評価・外部評価に関する評価結果のフィードバック・システムが整備され、学部及び研究科の管理運営及び教育研究体制等の改善に活用している。

【改善を要する点】

教員分離構想が固まったことを受けて、学部規定等の見直しを進め、農学系の重要事項を扱う「農学系会議」の設置が予定されており、会議の構成メンバーをはじめ審議内容等の検討が求められている。また、各種委員会の再編と委員会規程等の見直しも必要である。

農学部の技術職員は、アグリ創生教育研究センターと農学部本庄キャンパスの２場所に別個に配置されて業務し、相互の協力体制が整っていない。そこで、相互の業務を効率化するために、技術職員の交流を行い、業務の一括管理が望まれている。

（３）基準 9 の自己点検評価の概要

教員数が 50 人程度の小さな学部において、管理運営のための組織及び事務組織は適切な規模を有し、これらは適切に機能している。また、危機管理のために、「非常事態発生時（勤務時間外）の緊急連絡網」を定め、教職員と学生へ周知しており、適切に機能している。さらに、農学研究科の管理運営に関する方針は学部の方針を準用し、各委員会委員は学部と兼務し、管理運営業務等の効率化を図っている。各種委員会やアンケート等を通じて得られた農学部・農学研究科内外の管理運営に対するニーズ等を適切に把握し、それらの結果を教授会・研究科委員会等を通じて教職員に周知し、農学部の管理運営に反映させている。学部及び研究科の管理運営や教育研究の自己点検評価・外部評価は適切に行われており、それらに関する評価結果のフィードバック・システムが整備され、学部及び研究科の管理運営及び教育研究体制等の改善に活用されている。

基準 10 教育情報等の公表**(1) 観点ごとの分析**

10-1 大学の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされていること。

観点 10-1-① 大学の目的（学士課程であれば学部、学科又は課程等ごと、大学院課程であれば研究科又は専攻等ごとを含む。）が、適切に公表されるとともに、構成員（教職員及び学生）に周知されているか。

【観点到る状況】**農学部**

農学部の目標は、農学及び関連する学問領域において、多様な社会的要請にこたえうる幅広い素養と実行力を身に付けた人材を育成することである。農学部のこの目標および各 3 学科の目標は、農学部のホームページで公開されているとともに、平成 29 年度佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要（資料 4-2-1-1）や佐賀大学農学部履修の手引（資料 2-1-1-4）にも記載され、教職員及び学生に周知されている。入学生への、農学部の目標及び各学科の概要等の周知は、入学時ガイダンスにおいて教育委員やチューター等の教員を通して学部全体及び学科毎に実施されている。農学部ホームページ及び農学部・大学院農学研究科概要における関連する説明は、国内だけでなく海外への公表であるように、また学内の留学生に配慮したものであるように、基本的に和英併記になっている。

農学研究科

農学研究科の目標は、食糧問題と環境問題を克服し、地球上の生物が共存し続けるための科学技術の発展に寄与するために、社会・国際ニーズに応えられる創造性豊かな専門家を育成することである。この研究科の目標は、農学研究科のホームページで公開されるとともに、平成 29 年度佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要（資料 4-2-1-1）や佐賀大学大学院農学研究科大学院履修案内（資料 2-1-3-2）にも記載され、教職員及び学生に周知されている。平成 22 年度の研究科改組に伴う、1 専攻 5 コース及び副コース（農業技術経営管理学コース）の設置に関する教育研究の理念と目標、設置趣旨等についても、これらの冊子に明記されている。研究科の目標、コース概要等については、入学時ガイダンスにおいても教育委員等から学生へ周知されている。農学部ホームページ及び農学部・大学院農学研究科概要における関連する説明は、国内だけでなく海外への公表であるように、また学内の留学生に配慮したものであるように、基本的に和英併記になっている。

資料 4-2-1-1	佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要（平成 29 年度） (http://www.ag.saga-u.ac.jp/pdf/nogakubu_gaiyo.pdf)
資料 2-1-1-4	農学部履修の手引（平成 29 年度） (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html)
資料 4-1-1-6	佐賀大学大学院学生募集要項（平成 29 年度） (http://www.sao.saga-u.ac.jp/daigakuin/daigakuin_yoko.html)
資料 2-1-3-2	大学院農学研究科履修案内（平成 29 年度） (http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/risyuu-tebiki.html)

【分析結果とその根拠理由】**農学部**

農学部の目標及び概要等は、ホームページ及び冊子体の佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要において和英併記で公表され、また同じく冊子体である佐賀大学農学部履修の手引等で公表さ

れている。またそれらの学生へ周知は、ガイダンス等において適時適時行われている。

農学研究科

農学研究科の目標、概要等は、ホームページ及び冊子体の佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要において和英併記で公表されている。またそれらの学生へ周知は、ガイダンス等において適時行われている。

観点 10-1-②： 入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表、周知されているか。

【観点に係る状況】

農学部

農学部の入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針は、3つの方針として、ホームページ（佐賀大学学生センターのウェブサイト）上で一般に公開（資料 10-1-2-1）されている。また、各学生に配布される履修の手引の中にも、各学科の教育目標、開講意図、標準履修モデル、履修認定と卒業要件等が明記されており、さらに教育委員やチューター教員、指導教員等から適宜周知されている。

農学研究科

農学研究科のアドミッション・ポリシー、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針は、3つの方針として、ホームページ（佐賀大学学生センターのウェブサイト）上で一般に公開（資料 10-1-2-1）されている。また、各学生に配布される大学院履修案内の中にも、各コースの教育目標、研究指導の方法、修士論文及び最終試験の評価基準、修了要件と学位、授業科目と履修方法等が明記されており、さらに教育委員や指導教員から適宜周知されている。

資料 10-1-2-1 佐賀大学ホームページ（佐賀大学の教育方針について）
(<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/kyouikuhousin.html>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部及び農学研究科の三つの方針は、ホームページ上で公開されており、また印刷体である大学院履修案内にもその内容が記載され、学生に周知されている。

観点 10-1-③： 教育研究活動等についての情報（学校教育法施行規則第 172 条の 2 に規定される事項を含む。）が公表されているか。

【観点に係る状況】

農学部及び農学研究科における教育研究活動の情報は、農学部自己点検・評価報告書（最新版は平成 28 年度版）等の冊子及び佐賀大学ホームページ（研究業績メタデータベースのウェブサイト）を通して一般に公開（資料 10-1-3-1、資料 8-1-1-1）されている。ウェブサイト上の情報には、各教員の組織名、職名、専門分野、所属学会、学歴、職歴、受賞歴、研究テーマ等が含まれ、それらは各個人の研究業績データベースのページや研究室のホームページにもリンクしている。このように各教員の教育研究基礎情報は適切に公表されている。

資料 10-1-3-1 佐賀大学ホームページ（研究業績メタデータベース）
(<http://udb.cc.saga-u.ac.jp/>)
資料 8-1-1-1 佐賀大学農学部自己点検・評価報告書（平成 22～28 年度）
(<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>)

【分析結果とその根拠理由】

農学部及び農学研究科における教育研究活動の情報は、農学部自己点検・評価報告書及びウェブサイト（佐賀大学ホームページ）等を通して一般に公表されている。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

各種報告書だけでなくウェブサイトを通して、研究教育活動の情報は十分に公開されている。また農学部が農学部同窓会との連携により毎年自主的に開催する研究成果発表シンポジウムでは、農学部同窓会会員、元農学部教員、地域試験場研究者、企業研究者及び一般市民や高校生が多く参加しており、このようなシンポジウムを通して農学部及び農学研究科における教育研究活動の情報は公表されている。

【改善を要する点】

平成 31 年度に予定されている農学部および農学研究科の改組に関して、プレスリリース、定例記者会見をはじめ、ホームページ等で積極的に内容を公開するとともに、高校訪問、オープンキャンパス、入試説明会等におけるステークホルダーへの情報提供を強化する必要がある。

（３）基準 10 の自己評価の概要

農学部及び農学研究科の教育研究活動等についての情報は、報告書やホームページ、また各種公開シンポジウム等で適切に公表されている。

国立大学法人佐賀大学部局等評価検証結果報告書

部局等の名称 農学部・農学研究科

部局等評価の実施時期 2019年 2月

1. 評価手法

当該部局から提出された評価手法に関する資料に基づき部局等評価の評価手法について検証した結果、

⊙ 評価手法は適切であった。

・ 評価手法には改善すべき点があった。(具体的な内容は別紙1)

2. 評価基準

当該部局から提出された評価基準に関する資料に基づき部局等の評価の評価基準について検証した結果、

⊙ 評価基準は適切であった。

・ 評価基準には改善すべき点があった。(具体的な内容は別紙2)

3. 評価の妥当性

当該部局から提出された自己点検・評価報告書に基づき部局等評価の妥当性について検証した結果、

⊙ 評価は評価基準に照らして妥当である。

・ 評価は評価基準に照らして妥当でない点があった。(具体的な内容は別紙3)

国立大学法人佐賀大学大学評価の実施に関する規則第3条第2項に定める検証を行い、上記のような結果が得られた。

平成31年 3 月 15日

検証者 氏名 柳田晃良



別紙 1（評価手法についての改善すべき点）

平成 29 年度の佐賀大学農学部自己点検・評価報告書を平成 28 年どの同報告書及び評価検証結果を比較検討しつつ、その評価手法を検証しました。平成 28 年度の場合と同様に、それぞれの評価項目が適切は根拠資料に基づき明解な表現で評価されており、その客観性と厳格性を追求しようとする評価手法は、全体として見た場合妥当であると判断される。

別紙 2（評価基準についての改善すべき点）

評価基準 1～9 に関して、評価基準自体については改善すべき点はありません。

単位の実質化との関連で評価基準がシラバス内容を客観的に評価する学内システムの構築が必要である。基本的な学習内容は教員個人として対応していると判断されるが、学部・専攻での理念と合致しているか、教員と学生を交えた検討も必要となろう。

シラバスをもとにした講義形態と展開・方法は担当教員と受講生の意見を反映させて、共通認識のもとで真のシラバスの実質化が可能と考えられる。

また、教員・職員が協働した教育実施の体制、組織管理の体制と更なる整備は今後の課題であろう。

別紙3（評価が評価基準に照らして妥当ではない点）

評価基準に照らして、その評価が明らかに妥当でない点はありませんが、今後の検討事項として若干の指摘をしておきます。

「観点2-1-3：研究科及びその専攻の構成（研究科，専攻以外の基本的組織を設置している場合には，その構成）が，大学院課程における教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか」に関して、コース名から内容がわかりづらい名称もあり、次の機会に検討されてはいかがでしょうか。

P 11～ 「観点3-1-2：学士課程において，教育活動を展開するために必要な教員が確保されているか。また，教育上主要と認める授業科目には，専任の教授又は准教授を配置しているか」に関して、附属アグリ創生教育研究センター 所属の教員数が専任教員の1割強と多いことから、農学部教育ではこのセンターでの教育上の役割が重視されているものと推察される。一方、学部教育は主要な専門基礎科目に教員を配置していると書かれており、適正な配置により偏りが生じない教育組織体制も必要であろう。今後の検討すべき課題と考える。また、非常勤講師の配置は学科でかなりバランスに偏りがあるが、この理由が本報告書からは読み取れない。具体的記述が必要であろう。

外国の大学では、一人の教員が複数の学科教員として登録される制度もあり俯瞰的な見方を養っている。基本的な科目を徹底的に学ぶ方策の検討が今後必要であろう。

「観点3-3-1：教育活動を展開するために必要な事務職員，技術職員等の教育支援者が適切に配置されているか。また，TA等の教育補助者の活用が図られているか」に関して、「学務部教務課職員と農学部技術職員は，教育支援者として適切に配置され機能している。実験，実習，演習等の教育補助業務のためにTAが活用され，教員と学生をつなぐパイプ役として，重要な役割を果たしている」と記述されている。教育上重要な役割をもつと思われるが、各研究室の大学院生数のアンバランスの問題がありTAのプール化が必要となろう。特に、融合型研究科である先進健康科学研究科の設置に伴う新体制の早急な整備が必要である。

P 35～ 「観点5-1-3：教育課程の編成又は授業科目の内容において，学生の多様なニーズ，学術の発展動向，社会からの要請等に配慮しているか」に関して、国内での単位互換については一定の成果は出ているとの認識であるが、まだ十分とは言えないのではないかと。

また、学部、大学院生の国際化をふまえた国外大学との単位互換は佐賀に立脚しながら地球規模で農学を考える見地からは更なる充実が必要である。早急な対策に関する記述が必要。

P 36～ 「教育課程の編成趣旨に沿ったシラバスが適切に作成及び公開され，授業で活用されている。また，シラバスに記載する事項の改善は，学生による授業評価の結果などを利用してなされている」との分析結果と根拠理由が書かれている。教員のシラバスと学科、専攻全

体でのバランスを取る必要があるのでは、講座内で目標到達にふさわしいシラバス作りになっているか事前に十分議論しておくことが有益の効果をもたらすであろう。

このことは P78からの「観点8-1-1: 教育の取組状況や大学の教育を通じて学生が身に付けた学習成果について自己点検・評価し、教育の質を保証するとともに、教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され機能しているか。観点8-1-3: 学外関係者の意見が教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか」とも関係する。組織的にFD活動が実施され教育の質の向上や授業の改善に活用されているが、教職員全員でさらに充実したものにするとの認識が必要であろう。

P40～「観点5-3-3: 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか」に関して指摘しておきたい。成績判定に関してGPAでの評価がされているが、私の経験した事例として、アメリカでの大学院入試の際には全受講者数あたりの成績順位を要求されたことがあった。国際化にあたっては今後の対応・改善が必要であろう。

P42-43 「ホームページの充実」は行われてきているが、一部はさらに改善が必要である。特に英語でのホームページの作成は国際化にとって第1歩であるのでさらに充実が必要であろう。

P48～「観点5-5-3: 適切なシラバスが作成され、活用されているか」に関して、約6割の学生が利用していない、と答えており予習などができていない学生が多い。具体的な改善策が求められる。

P59「観点6-1-2: 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか」に関して、8割以上の学生が満足と答えているが一部で不満足の高割合が多い科目が見られる。例えば、地域社会開発学コースは前期と後期で満足度が極端に異なっている。これは教員の講義内容や手法に問題があると考えられる。学年別の満足度も学習達成度・満足度を客観的に調査することが教育上で有効であろう。

P88～「国際コミュニケーション力、異文化理解力がある」や「積極的にリーダーシップがとれる」での評価が低く、今後学生の教育効果について検討が必要である」との認識である。具体的な改善計画を述べる必要あり。

P95～「農学部附属アグリ創生教育研究センターや総合分析実験センター」を中心に、附属施設や全学的なセンターと農学部は教育面で密接に連携しており、農学部における教育と研究を達成する上で適切に機能している。

農学部は比較的小さな教育単位であり、コミュニケーションを取りやすいと考えられ効果も上げやすい利点がある。しかし、教職員数が少ない故に各教職員の負担は大きくなる。無駄な業務をなくすため必要な業務を洗い出し、教職員協働で業務を遂行する体制を作る必要がある。

本報告書内容とは直接関係しないが、学科専攻が要求している学生の理解度を深めて次に繋がる講義内容・方法が要求される。そのためには、現在の週 1 回ではなく集中的に講義する体制も必要であろう。教員は研究・教育に専念できる時間確保が容易になる可能性があり、検討する価値がある。